

[もくじ]

はじめに…2	16・対峙の日…149
11・入城の日…3	17・絶縁の日…191
12・破滅の日…29	エピローグ・再認識の日…261
13・集結の日…63	あとがき…272
14・解放の日…91	『ミコロボ』シリーズ一覧…273
15・譲渡の日…119	

★無断転載・無断掲載・複製・複写・転用・アップロード・フリマ出店はお断りします。

★シリーズを通して残虐行為・性的描写（年齢制限をかける程ではないですが、匂わせがあります）があります。ご注意ください。

★この作品は、フィクションです。

☆はじめに☆

こちらは『白井未衣子とロボットの日常（ミコロボ）』シリーズの、『反転』ルートの後巻となります。

前巻から先に読んで頂くよう、お願いします。

前巻が288ページで、この本が276ページ…。

総数500ページ超えちゃいますねえ…。

改行の多用って、結局のところどうなのでしょう…。

かと言って、改行しなさすぎもぎっしり詰まりすぎて読みにくいだろうし。

もう少し、編集技術を上げていく必要がありますね。

今更何を言っているんだろうと思われがちですが…。

『10・切替の日』の続きは、次のページからどうぞ。

『あとがき』にて、またお会いしましょう。

11・入城の日



戦闘が始まるきっかけは、合図以外にも存在する。

自軍が手を出さなくても、相手の軍から突如仕掛けにかかる場合もあるからだ。

土星圏ニコンを出て、火星圏タレスの付近まで移動した宇宙船〔フレアランス5〕と、他のニコンからの数隻の宇宙船が、まさにこの過酷な状況に陥っていた。

〔フレアランス5〕率いるニコンの宇宙船の軍は、現時点ではタレス付近まで辿り着いただけであった。

接近行動のみで、各々の宇宙船からミサイル等の武装の展開はされていない。

だがタレス側は、距離を縮めにきただけでも、敏感に反応した。

火星圏タレスは、赤い光点をちらつかせた黒い星。

星の赤道部分らしき地点に、黒と反転した白い花の群れが存在していた。

地球上では《ペンタス》という星のように尖った花が、火星圏タレスの赤道部分に広がっていた。

リュートや側近のサレン、現在2人に同行するニコンの者達は、タレスという星を訪れた経験が全くなかった。

リュートが因縁相手として認識しているラルク・トゥエラーは火星圏タレス出身のHRである。

ところが、リュートが大人の仲間入りを果たした時には、既に《黒川武人》と名前を変えて地球に拠点を置いていた。

だから、王家フレアランスの5代目の因縁相手の故郷を訪れるのは、今回が初めてだった。

《ペンタス》みたいな星形の花を、各宇宙船のブリッジにいた者達はご覧になっていた。

黒い星に咲き誇る白い花という事で、すごく綺麗だなあと感動していた。

そのおかげで、異変に気づくのが遅かった。

いや、異変に勘づいても、こんな潔白な花の醜態さを信じたくなかったのだろう。

白い花の群れは、一斉に真っ直ぐに伸ばしていた花びらを閉じた。

布を絞るようにして捻り、再び開花した。

花の弁には、縦長く尖った透明の宝石が露わになった。

尖った宝石の先端に光のエネルギーが集中し、一気に宇宙の外へと放たれた。

〔フレアランス5〕率いるニコンの軍団は、狙われた。

各々の宇宙船は宝石からのビームの猛攻により、被弾した。

落ちた船はなかったものの、揺れは発生した。

各操縦士達は警報の発令を行った。

ブリッジ以外の乗組員達は急ぎ足で、各自の持ち場についた。

戦闘用のロボに乗ったパイロット達は、いつでも出れるようにエンジンを作動していた。

ロボの整備士達は、機体の最終調整を急いだ。

各宇宙船は強固なバリアを張り、ビームの猛攻によるダメージの軽減で凌いだ。

できる事ならば武装による攻撃展開を行いたいところだが。

「タレス側は1機も出現していないのか!」

「ビームの勢いが凄すぎて、全てを追ってませんが、おそらく!」

〔フレアランス5〕の操縦士は、リュートの耳に届くように声を張り上げた。

彼らは常にタレス側の動向を確認しなくてはならない為、多忙であった。

艦長席に座っていたリュートは、猛攻を受けた時には完全に起立していた。

彼は、一方的に攻撃してくるタレス側に、報復したかった。

王子の飛び出しには、操縦士達とサレンが全力で止めた。

いくら4代目王と、《ラルク》の再戦を果たす誓いを交わしたとはいえ、リュートは次期〔フレアランス家〕の王として継承する身。

ここで宇宙空間に飛び込んで、最悪命を落とす羽目になってしまう展開だけは、避けたかった。

自分の身を案じてくれているサレンや側近兵達には感謝している。

だがリュートは、悔しがっていた。

猛攻の嵐に、次期王となる自分が抵抗できないのを。

ビームを止める有効的な反撃手段がない以上、しばらくはバリア展開と回避行動に専念していた。

それが、一時中断された。

尖った宝石によるビームの猛攻は、一斉にピタリと静止した。

「…え？眩しくなくなったの？」

サレンはリュートを抑えつつも、右手を帽子のつば代わりにしていた。

室内の照明以上に眩しい光が、視界に入るからだ。

「どうやら、止まったみたいですね…。」

1人の操縦士が答えた。

ブリッジの正面モニター前の席についていた彼らは、猛攻中はパネルの方を凝視していた。

これも1つの、ビームの光による目眩を最小限に止める為の対策だった。パネルの明るさは、ビームの光よりは暗めに設定されていた。

「！？王子！」

別の操縦士が何かを発見した。

報告するため、即座にリュートの位置する艦長席へ振り向いた。

「どうした、何か異変を察知したのか？」

リュートが該当操縦士の近くまで寄った。

サレンも後ろで同行する。

「タレス側から、超強力な電波が発信されています！」

操縦士は再びパネルを操作していた。

電波は宇宙のような無重力の中でも、生物達の肉眼では完全に見る事ができない。

電流のような折れ線が流れていると示唆する研究者もいたが、視認できない為、実際の電波の姿はわからない。

だから、計器による測定が必要であって。

隣の操縦士が解析作業を進めていた。

「情報はどこまでわかるの？」

サレンが聞いた。

ちょっと間を置いてから、計器を回す操縦士が答えた。

「言語情報が届いてますね。」

「内容は判明できているのか？」

「現在翻訳処理中です。」

リュートは操縦士からの報告で、タレス側からの伝達があると知った。

もちろん、[フレアランス5]のブリッジにいる者は全員、今の強力な電波が通達の情報だと悟っていた。

「翻訳完了しました。かなりの長文ですので、重要な箇所を要約しますね？」

「やはり電波の強弱は情報量に影響しているのか…。わかった、要約の基準はお前達に任せる。」

了解しました！とはっきり応答した操縦士は、素早い手の動きでパネルを操作した。

それはパソコンのキーボードでテンボよく入力しているのと同じであった。

要約時間も、少しかかった。

完了の合図も、操縦士から発せられた。

「全解析、終了しました！」

「読み上げできるか？」

言語情報の中身を早く知りたいリュートは、操縦士に開示を求めている。

求められた者は躊躇わずに、快くリュートの期待に応えた。

「それでは、読み上げます。

『ニコンの王子様一行、物騒な訪問ご苦労様。

お前さん達は戦闘がしたくてウズウズしているだろう？俺もだ。だがなあ、ウチの《息子》がどうしても嫌がってるみたいでなあ。タレスの外じゃなくて、中まで来て欲しいんだとよ？そこで、派手な紫の、ど真ん中の宇宙船だけ…《出港口》まで接近してくれねえか？出迎いはこっちでちゃんとするからよお？』」

「何だ！この不愉快な言語情報は！」

操縦士の読み上げた言語情報の詳細に、リュートは溜まっていた感情を爆発させた。

苛立ちを覚える王子を、サレンは横で支えた。

「この発信者は、もしや…。」

「奴だ！この憎たらしい言い方をするのは、クーランしかおるまい！まして、火星圏タレスの前にいるのならば！」

リュートは文章だけで発信者を特定していた。

彼はクーランとの面識はない。

しかし、〔フレアランス家〕の賢者達の伝授から、飛ばした衛星データから抽出した映像で、リュートはクーランの存在を知っていた。

そもそも、クーランの《自慢の息子》に、『最初の』故郷を滅ぼされたのである。

因縁相手の《育ての親》に関する話題を、聞き逃すわけにはいかなかった。

「要約をしまして、1分以内に読み上げできました。いかが致しましょう？奴の要求を…。」

読み上げた操縦士は、リュートに指示を仰ぎうとしていた。

言語情報の詳細は、リュートに向けられている。

「〔フレアランス5〕をタレスの出港口へ移動するんだから…この船は入港する可能性があるわね。…異じやないかしら？」

サレンの upper body が、若干前屈みになっていた。

リュートの隣についた彼女は要求を飲んだ後の展開を推測してしまい、慎重な態度を取った。

ほぼ全員が、危険を僅かに感じていた。

しかし、危ない橋を渡る恐れがあったとしても、リュートは《ラルク》との決着をつけたいとずうずうしていた。

簡単に要求を飲むのは危機感に欠ける。

かと言って、入らなければクーラン達の攻撃に敗れて、寸前で船ごと散ってしまいかねない。

好戦的なクーランなら、攻撃を緩めないだろう。

2択のうちのどちらかを選ぶ決断の時は、刻々と迫ってきている。

どれだけ悩みまくっても、リュートはニコンの仲間達にも、タレス側のクーランにも、片方の意思決定を示さなければならなかった。

王子は唾を飲み込んだあと、言語情報の解析を務めた操縦士に指示を出した。

「ここまで来れば後は引けない！」

〔フレアランス5〕はタレスに入港する！

その前に、私は奴に条件を課したい。タレス側に電波を発信する。用意を急げ！」

「わかりました！」

担当操縦士のパネル操作のスピードが、更に早まった。

四角い機械の箱が、艦長席の前まで近づいた。

「このまま声明を記録する。電波の発信は怠るな。奴は強力に流してきた。

我々も同じように返してやろう。」

「無論、そのつもりです。熱意のこもった声明、よろしくお願いします。」

「お気遣い、感謝する。」

リュートは箱の装置の前に立った。

軽く深呼吸をして、口を大きく開いた。

★★★

火星圏タレス、[レッド研究所]。

この施設の主であるクーラン・レッドは今、普段籠っている自室を出ていた。

彼が居座っているのは、無人の司令室であった。

無人であったのは、過去の話。

それはクーランが入り浸るようになったから有人化したわけではない。

司令室の左端。背もたれのない丸い椅子に、1名の《オス》が座っていた。彼は長ズボンも、フード付きの短いコートも黒系統の色で染められていた。

座っているだけで、他には何もしていない。

やっている事と言えば、しいてクーランへの、『言語を経由しない』報告業務だった。

はあ、とクーランはため息を吐いた。

「とりあえず、電波の発信はしておいたさ。これでいいんだな？」

クーランの問いに、フード男はコクリと首を上下に振った。

「俺としては他の部下に落としてやってもいいぐらいの勢力としか見てないんだがなあ…。ま、お前さんが希望を出してるんだからな。」

クーランはフード男の希望を叶えようとしたが、どこか不服そうな表情をしていた。

司令室のパネルの隣で、計器の数値が一瞬で増減した。

その後、ビピピッと電子音が鳴る。

ん？とクーランは唸った。

電子音と点滅を繰り返す赤い光の元へ、面倒くさそうに足を運んでいた。

パネルの台にも携帯端末機と同サイズのモニターが組み込まれている。そこには、記号じみた形の羅列が3行ほど並べられていた。

「…ああ、あそこの船も、電波を流してきたってか？」

どれどれ、とクーランはパネル操作を開始した。

斜め後ろから、フード男は黙って見守っていた。

クーランに希望を叶えてもらった彼だが、その眼差しは諦めたかのように冷ややかであった。

冷徹な視線を向けられている当の本人に、フード男の気持ちはわからない。

いや、気づいていてもクーランはフード男に恩恵を与えようとしない。

奴は癪に触る笑いしか浮かべない、非情な《オス》。

フード男の、クーランに対する認識は、研究所に来る前後で変化しなかった。

パネル操作の末、クーランは電波の内蔵された情報を解析できた。

「言語情報の類いしか、即急に流せるのはこれしかないわなあ。」

情報が明瞭化された途端、クーランは右手の指で顎髭を摘む仕草を始めた。

「えー何何？」

『貴様の要求は飲もう。その代わり、同行する他の船には手を出すな。』

ほお、お決まりの常套句だねえ…。」

解析された言語情報を読み上げたクーランは、敵のセリフに感心していた。

同時に、現在の接近してくる敵に対して、呆れた感情も持ち合わせていた。

「…たく、わざわざ船を駆使してまで戦を申し込んでいるのによお？停戦じみた事言ってんじゃねえよ。」

馬鹿じゃねえの？とクーランは宇宙船しか存じない敵を見下していた。

彼の言葉は、逐一フード男の耳にも入っていた。

フード男は研究所の主の侮蔑的な発言を見過ごせなかった。

だがフード男は、発声機能を失ったおかげで、口で制する事はできなかった。

口で述べた所で、クーランの態度が変化するとは思っていないが。

口以外の制手段を、フード男は既に取っていた。

目による睨め付けである。

フードを被っている為、男の表情の細部ははっきりとわかりにくかった。

元来の赤い眼に、光が灯されていた。声を失っても、気はまだ残っていた。

司令室の端の椅子に座り込んだまま、視線だけクーランに定まったまま。

かなり強固な視線を感じたクーランは、1度フード男の方へ振り向いた。

研究所の主であり、宇宙でも恐れる権力者の1人であるクーラン。

黒1色の小汚い格好をしたフード男に、恐怖の念を僅かでも感じ取っていた。

フード男は、HRである。

クーランは、地位が高いがあくまでも《生物》である。

ロボット、またはそれに準ずる機械の形態に変身できる《オス》は、怖かった。

クーランが施した改造技術で、フード男が強くなったのに。

「お、おう。何だ…？」

クーランは多少怯えながらも、フード男に尋ねた。

話しかけられたフード男は、視線をずらして、顔を背けた。

一言も、一文字も、丸い椅子に座る男は喋らない。

発声機能まで喪失させてしまったのは、間違いだったか…？

クーランはその部分のみ、後悔していた。

「はぁ…。わかったよ、手柄はお前にやるから、大人しくしろよ？」

クーランはフード男にそう告げた後、

正面モニターと備え付けのパネルの方へ顔を戻した。

（全く…。服従させる為の劇薬も投与しているっつーのに、何だ？コイツから
滲み出る反抗心は。）

クーランはパネルを人差し指で触った。

先程までは両手でリズムカルに触っていたのに、今度は一定間隔でピッ、ピッ
と音を鳴らしているだけだった。

（ま、いいさ。今は望みを聞いてやる。隙を見てから、兵を輩出させてやん
よ。一気に畳み掛けた方が、後先楽だからよお？）

クーランは1人、妖しい笑みを浮かべていた。

★★★

リュートは操縦士と装置を通して、タレス側からの電波のお返しをした。

電波には電波を、という事で。

リュートもタレス側に、クーラン目当てに言語情報を電波として流した。

発信後、［フレアランス5］はタレスの出港口へ直進した。

必要最低限のバリアだけは、張っておいた。

リュートは操縦士に、何度も電波のチェックを要求した。

返答は、「観測されていません」の一点張りであった。

対応の悪さに苛立つリュートだが、細かく気にしないようにした。

〔フレアランス5〕だけでも、敵の陣地に突入し…因縁相手の再戦を果たす。

この目標を忘れないよう心がけた。

直進時にスピードを上げたので、出港口前に着くまでの時間は掛からなかった。

タレスもまた、ニコンや地球などの惑星と同じように、硬質な岩石と似た物質で形作られた。

自然と形取った岩石のオブジェに囲まれて、出港口の扉は存在していた。

濃い目のグレーの塗装だが、光沢はない。

上下に開閉する為、横型に隙間にほんの些細な隙間ができています。

隙間は横一線状でも、折れ線状の構造でもない。

テープカッターのギザギザ刃みたいなの、複数の山々が並んでいる構造をしていた。

リュートとサレンは正面モニター越しに扉を見て、逃す気がないのをひしひしと感じていた。

「噛み砕けるのかしらね？あれは。」

「あの尖り方、妙に鋭いぞ。」

2人は隣同士で、各々感想を述べていた。

〔フレアランス5〕の接近を、光のセンサーが捉えた。

扉の4隅のライトで、〔フレアランス5〕の真正面が照らされた。

扉の上部には3色の信号が備え付けられている。

制止の赤から、許可の青へと点灯された。

扉が自動で開かれる。

重くて硬い扉なのか、ぎこちなさそうに上に、下にずらしていた。

リュート達の予想の範疇ではあったが、扉の層は厚かった。

正面モニターから数えただけでも、5枚以上はあると判明した。

操縦士の一部は、それにゾッとした。

彼らが敏感になるのも、無理はなかった。

〔フレアランス5〕はこれから、火星圏タレスの領域へと入る。

故郷の星以外へ立ち入るには、なにかしら勇気が必要だ。

戦争にまで発展しかねないのならば、尚更である。

国家以上のレベルの争いに巻き込まれるのは、決まって一般の民だ。

自分の身が心配ならば、宇宙船に乗って他星の領域に入るのを躊躇うのは当然だ。

そもそも、今回の戦闘は、リュート王子が因縁相手である《ラルク》との決着をつけるのが目的である。

王子以外は、タレスの件には全くの無関係である。

同行の任務の要請がなければ、民が行く道理はない。

側近兵と呼ばれた民達の眼差しは、真剣だった。

与えられた任務を真面目にこなそうとする意識もある。

が、彼らもまた、4代目王と同じように、王子の成長を見届けたかった。

今回の戦闘を通じて、リュートが強くなれば、自信と勇気を持つようになれば…と民達は願っていた。

5枚以上の層がある出港口の扉が完全に開かれた。

各々の扉の端に、小さなライトがポツポツと点灯した。

タレスの中へと、〔フレアランス5〕を誘導するように。

「これは、進入してもよろしいと解釈すればいいのでしょうか？」

「これまでに電波の観測は？」

「ありません。」

案内されていても、無言で1歩を踏み出すのには躊躇するものだ。

操縦士はリュートに判断を委ねるような物言いで尋ねた。

これに対してリュートは、電波が今まで流れてないか確認した。

返答を聞いた彼は、同行する民達に命令した。

「このまま直進する！まずは様子を見るぞ！」

ブリッジにいた一同は、肯定の返事しかなかった。

〔フレアランス5〕は複数のライトに導かれるがままに、タレスの出港口を潜った。

他のニコンの宇宙船は、空間で止まったままだ。

それらのブリッジのモニターには、〔フレアランス5〕が暗闇の穴へ進む姿が、鮮明に映っていた。

★★★

「ほーれほーれ、何ちんたらしてやがんだ。早く入れってんだ。近所迷惑になんだろうが。」

へへへ、とクーランは司令室のモニターを眺めながら笑っていた。

〔フレアランス5〕筆頭のニコンの軍団から強力な電波を受信後、彼はパネル操作等の動作を一切行っていなかった。

椅子を用意してそこに座り、〔フレアランス5〕の動きをじっと観察しているだけだった。

「ビウスのとこもそうだけだよ…派手な飾りついてる船を所有してる星の民って、何で偉そうなんだろうなあ。なあ、ラルク？」

クーランはずっとモニターの映像を眺めたまま、誰かの名前を呼んだ。

指定した誰かが司令室内にいるとは限らない。

なのに、顎髭を生やした中年の研究者は存在を確認せず、サラッと名前を口にする。

クーランが、フード男すなわちラルクが未だ斜め後ろの椅子に座っているのを知っているからだ。

ラルクは裾の短いコートのフードを、深々と被っていた。

肌を曝け出しているのは、両手のひらと口元だけだった。

椅子に座っているだけのラルクであったが、いよいよ彼が椅子から離れようとした。

立ち上がる行為をただで、彼の格好は変わらない。

顔を不必要に見せたがらないのか、フードの縁を右手で下に引っ張るよう固定した。

右手の親指と人差し指は、フードの縁を摘んだままである。

ラルクはモニターを眺めるクーランの身体とは正反対の向きに変えた。2人の背中が対面している状態だ。

沈黙が流れる間に、ラルクは司令室の出入り口を目指す。

映像の雑音だけが、司令室内のBGMとなっていた。

「競技場でいいか？」

クーランの声だった。

ラルクの足音を聞いていても、彼はモニターから目を離さなかった。

ラルクは歩みを一旦ストップする。

フードの縁を摘んだまま、少し顔を上げた。

軽く、横目を逸らす。

白衣姿のクーランの背中を、ほんのちょっとだけ見つめた。

ラルクが睨め付けるようにしてクーランの後ろ姿を目に焼きつけたところで、司令室内で何の変化は起きない。

彼は視線をクーランから出入り口のドアへと変えて、再び足を前に出した。

縁は掴んだままで、ゆっくりと歩いていった。

発声機能を失ったラルクは、クーランに対しての返答はできない。

失わせた張本人であるクーランは、場所の指定に対する答えが返らないのを既に知っている。

ラルクが歩み始めて数分後、自動ドアの開閉音が響いた。

彼の接近に反応して、出入り口のドアが左右にスライドした。

ラルクはそのまま、出入り口を潜って通路に出た。

彼は通路の奥へ、ひたすら歩いた。

自動ドアはラルクが離れてから、今度は逆方向にスライドして、閉めた。

「…まだ整備は終わってねえがなあ。俺様がチマチマした雑用が苦手だから、長引いたがよお。」

クーランは独り言を呟きながら、パネルを人差し指でのタッチを繰り返した。

それに応えるよう、モニター画面も切り替わった。

〔フレアランス5〕の現在の動きを捉えた映像の左斜め下に、小さな映像が表示された。

それは、数回のHR同士の戦闘を繰り返された末にできた、崩壊気味の競技場の映像だった。

瓦礫の岩と化した、リングやスタンドの材質となったかけらを、清掃用のロボが十数台ががりで片付けていた。

クーランは瓦礫のゴミだらけの競技場へ、通信回線を開いた。

「おい。掃除中すまねえが、今から《息子》がそっち行くんだわ。壊れたくないならとっとと避難しろよ？」

彼はぞんざいな口調で清掃用のロボに言ったが、これらに意味が伝わったようだ。

ゾロゾロと、ロボ達が退散していく。

4つのローラーを回転して移動するロボで浮上はできない。

だがセンサーを頭部に内蔵している為、障害物の回避は可能だった。

退散にかかる時間は、数分で終わった。

クーランの通信回線は、競技場以外でも繋げていた。

退散命令の後、モニターの右下に新たな映像が出現した。

こちらも清掃用ロボと同じ機械の人形らしき物体が複数いた。

ただし、清掃用の3頭身以下のちんまりとしたロボと身体つきが違った。

合金製の空間に集められた機械の人形は…全員HRのロボ形態である。

細身の人間のようなスラリとした体型だが、機械っぽく所々に接続の切れ目があった。

合金製の空間内の壁は半分鏡のように加工されていて、壁に近いHRはぼかした状態で反対の自身を映し出していた。

空間内の薄い色味の影響か、集まったHR達の黒いボディはよく映えた。

HR達は頭部を上げて、一律カメラアイを同じ方角へ向けた。

空間内に設置された、小さなカメラを見る為に。

「おう、待ちくたびれたか？まあ、そんな時間もおしまいさ。土星圏の頭領が察知できなくなった所で、俺様が判断を下す。出港口の外で待機してる宇宙船を、潰して来い。邪魔だわ。」

『承知しました。』

HR達は全員、感情のない肯定の返事をした。

右下の映像は、1分も掛からずに閉じられた。

★★★

〔フレアランス5〕は出港口を通過して、タレスの中へと直進した。

リュート王子が乗る宇宙船が辿り着いた先には、外来者向けの駐艇場が存在した。

他星人を迎え入れる1番最初の出会いの場所の筈、なのだが…。

「閑散としているわね…。」

サレンの駐艇場における最初の感想だった。

彼女が隣で支えているリュートが答えた。

「宇宙船の数が少ないのはともかくだ…。民達の姿もないぞ？ここは機能しているのか？」

彼は眉間に皺を寄せていた。

民達だけでも信用できる者がいるのではないかと少々期待していた王子。

だが寂れた姿の駐艇場にて、民達に対しても訝しんでいた。

もうこれ以上、甘い考えを持つべきではない。

リュートは自分の思考を改める為に、首を勢よく振った。

突発的な行動に出たので、隣の技術士官が心配した。

「リュート？大丈夫？」

「ああ、すまない。もう陣地に侵入している。後戻りはできない。君がそこまで気にやまなくてよい。」

王子がそんな意思を示したので、サレンは深く追及しなかった。

ほとんど無人の、静けさが増す駐艇場。

意外に収容できる数は多かった。

ざっと数えただけで10はあると、リュート達は認識した。

〔フレアランス5〕は、まだ収容されていない。

ライトによる誘導に従っていた。

10もある収容ポート。

本来なら駐艇場に入ってすぐの位置に停めても問題はない。

誰だって効率を重視したいのだから、近くで停めて作業を終えて出港したいと考えるのは当然だ。

しかし、〔フレアランス5〕はあえて、タレス側が出している光の誘導に沿って進行していった。

下手に動いてしまうと、自分達がやられるからだ。

タレス側、とりわけクーランの息がかかっている勢力には、HRが潜んでいる。

頭領のクーラン以外はHRだろうと推定してもおかしくない、とニコンの賢者達は述べていた。

反対に、リユート率いるニコン側の勢力には…HRがいない。

リユートとサレンはもちろん、同じくロボを操縦する側近兵ですら、HRではない。

それは、生物上の個々の能力が、それぞれHRに劣る、という事。

ロボもしくは何らかの機械に変身してすぐに戦えるHRと異なり、ただ普通に命を分け与えられた生物は変身の能力なんて持ち合わせていない。

相当の装備を担いで挑む気持ちで行かなければ、普通の生物側は不利である。

リユート王子も、他のニコンの民達も…タレス側の弱点や隙を探す方へ着目しようとした。

そちらがより、自分達の勝利へと繋がる、と考えて。

出港口から1番遠いポートまで、〔フレアランス5〕は進んだ。

駐艇場の宇宙船専用の通路は、規定の宇宙船の全幅より倍以上の幅をとっている。

指定のポートにうまく停めるのに、宇宙船の向きを変えやすいように広げられていた。

〔フレアランス5〕は地球の飛行機の全長の5倍以上の規模を誇る。

ロボや小型宇宙船も搭載している超大型宇宙船である。

発進できるよう、〔フレアランス5〕は指定ポート付近で90度回転した。

宇宙船の背部とポート奥の壁を、ギリギリまで接近させた。

ぶつかると背部の部品に傷がいくので、慎重に行なった。

ピー、とブザー音が鳴る。

ここで〔フレアランス5〕が静止した。

船内の照明は、まだ灯していた。

星と宇宙空間の境目となる出港口に近い場所なのか、タレスの民らしき者は1人もいなかった。

たとえ生身の姿でなくても、作業用のロボが数十体配置されているだろう。

リュートもサレンも、ニコンの駐艇場を目撃しているのだから、稼働状況はどういった雰囲気なのかは知っていた。

「もの凄く静かよね…。」

「この作業員は、責務を果たしているのか…？」

リュートとサレンは、駐艇場内の様子についての第一印象を口にした。

ライトと機械音が鳴るだけの広い空間で、突如アナウンスが流れた。

『配置、クリアしました。所属の解析業務に移行します。』

声の主の性別は《メス》だと判断したが、流暢さには欠けていた。

話し方にぎこちなさを、〔フレアランス5〕の乗組員達は感じていた。

「人工知能の類いかしら…。もしかすると、先進的な技術によって人員削減してるのかもね？」

サレンの推測だった。彼女の発言で、他の者達は大方納得した。

アナウンスの述べた『解析業務』は、ポート奥の4隅から機械のアームが出現した時から開始される。

4本のアームが電撃状の輪を形成し、〔フレアランス5〕の背部から輪を通す。

ゆっくりと通過していきながら、輪は背部から前部まで通していく。

この時に、輪は宇宙船の輪郭に合わせて変形した。

アームは伸縮性のある機械で、〔フレアランス5〕の前部の先まで伸ばしていった。

前部に位置するブリッジから確認したアームは、前へ行くほど細くなっていった。

縮小されたアームの筒の構造は、何十層も収められているのか…と技術士官のサレンは考えていた。

『解析業務』も終わりの時が来た。

『解析業務、完了しました。』

宇宙船名：〔フレアランス5〕

所有者：リュート・フレアランス5th（土星圏ニコン出身）…』

アナウンスが解析したデータを元に、〔フレアランス5〕の情報をつらつらと述べた。

先代王から譲り受けた宇宙船の基本情報をズバリ当てられてしまったリュート達。

タレス以外の他星を訪れた経験がある為、大層に驚かなかった。

4本のアームは縮小して、ポートの奥へと収容された。

駐艇場内のアナウンスは、まだ続いた。

『それでは、目的地までご案内しますので、到達までは我々の指示に従うよう、お願い致します。』

「我々？1人じゃないの？」

『我々は日々、プログラムを交換しております。本日は私が担当しているだけです。』

「ふーん。そうなんだ。」

サレンの好奇心はそこで止まった。これ以上は時間の無駄だからだ。

もっとも、アナウンスが余談について聞く耳を持たなかった。

『我々が指定する機体の入場を許可します。』

アナウンスは用事を済ませたかったのか、リウト達に行動を要求した。

『【ホーンフレア 5 t h】、【ウインドアーチ】、残りお好みの機体を4機まで決めてください。』

「4機も…出撃させるのか？」

『ただし、目的地以外での武力干渉が認められた場合は、然るべき処置を取らせていただきます。』

「民達、とりわけ一般の民には危害を加えんぞ？」

『了解しました。機体選択後、ご案内を開始いたします。即、ご決断を。』

機体の微調整ですら、猶予を与えない口ぶりだと、リウトは思った。

ブリッジにて、リウトは指定の位置についている操縦士達と向かいあった。

両脇の壁面モニターには、ブリッジ以外の乗組員達が忙しなく動いてる姿に切り替わった。

誰かが回線に気づくと、残りの者達も一斉に集まってきた。

一緒に着いて来てくれた仲間達が、王子である自分を見つめている。

期待に応えようとして、リウトは思い切ってここからの進路を再び宣言した。

「皆の者！私とサレン、あとこれから名前を呼んだ4名は、タレスの中へ進撃する！各宇宙船の統制は、【フレアランス5】から通達する！決して、警戒を怠るな！」

ハッ！

リユート以外の乗組員達の、威勢のいい返事が響き渡った。

その後、リユートは指定の側近兵の名前を告げた。

名前を呼ばれた4名とも、自他共に認めている優れた兵士であった。

4名は既に各々のロボのコックピット内で待機しており、メインの電源を入れた。

差し込んだ状態を維持していた鍵を、縦から横へ、直角に曲げる。

コックピット内や、ロボのライン部分が、徐々に水色に光った。

歩行は可能になったが、4機ともまだ動かなかった。

先陣を切る隊長の出番を、待っていた。

〔レッド研究所〕への侵攻の隊長役として務めるリユートが、サレンと共に格納庫までやって来た。

彼の専用ロボである〔ホーンフレア5 t h〕は、発進口の扉から遠く離れた位置に配置されている。

宇宙での、敵の陣地への移動力を上げる為、背部に〔ウインドアーチ〕が取り付けられていた。

接続時では、〔ウインドアーチ〕が必須の弓矢の攻撃はできない。

しかし、奥義技である弓矢の攻撃を、リユート達は温存するつもりでいた。

なので、素早く目的地まで飛べるなら、それでよかった。

「よし！〔ホーンフレア5 t h〕！」

『並びに〔ウインドアーチ〕、出ます！』

「ハッチを開けよ！」

リユートがそう叫ぶと、ポート奥の扉が最初に開かれた。

下から上へ、直角から少し上に傾ける角度まで、扉はゆっくりと動いた。

掛け声を行ったリユート達は、全開の信号を待った。

【ホーンフレア5 t h】のコックピット、側面モニターの上が青く光った。

駐艇場のポート奥の扉の全開が完了した信号だった。

次は、【フレアランス5】の背部のハッチの開放である。

格納庫の作業員が、声を上げた。

『ハッチ、開けます！』

作業員が固いボタンを強く押した。

作業員の熱い想いに応えるように、背部のハッチの扉が、徐々に上へ上がっていく。

ポート奥の扉と同じく、全開までの時間はゆっくりである。

リュート達は焦燥に駆られるも、両手のレバーを前に押すのを待った。

ここで失態を犯してはならない。

因縁相手とのご対面までは、耐えないといけない。

ガチャン、と音が鳴った。

ハッチの扉が完全に開放された状態になっていた。

リュート達は側面モニターの信号を確認した。

下部の画面もまた、上部と同じく青く光った。

火星圏タレスの内側へ、突入する時が来た。

「選ばれし兵達よ、私の後に続け！」

リュートが叫んだ。

彼はレバーを思いっきり前に押し倒した。

レバーの倒した方向通り、【ホーンフレア5 t h】は格納庫奥で少し浮上し、そのまま勢いをつけて直進した。

わずか1秒も満たない敏速で、ハッチを抜けて、【フレアランス5】の外に出た。

【ウインドアーチ】のブースターも噴射を開始した。

【ホーンフレア5 t h】とは反対にハッチの付近で居座っていた側近兵のロボは、近いものから順に、ハッチから飛び降りた。

落下と同時に、背部と足元のブースターを噴射させた。

真下の黒い建物群に衝撃を与える事なく、側近兵のロボ達は飛んだ。

【ホーンフレア5 t h】の後に、ついて行った。

「これからはアナウンスの指示に従いつつ、奴を叩く為に本拠地に乗り込む。

目的地は〔レッド研究所〕だ。そうであろう？」

『流石はリユート王子。お見通しでありましたか。』

「元来、私は奴への復讐にしか、用はない！」

『ならば話は早いでしょう。ご案内致します。必ず守ってください。』

「貴様の指示を遵守すれば、ニコンの民達に危害は加えんな？」

『ご安心を。私には権限がございませんので。』

むっ、とリユートは声をもらした。

どこか腑に落ちないな、というような苦い表情をしていた。

『ラルクとの決戦の場を設けています。それだけは保証致します。』

『リユート。』

「やむを得ん。私にできるのは、第1の故郷を滅ぼした宿敵・ラルクを倒す事だ。奴の元に辿り着くまでの辛抱だ。」

『わかってるわ。貴方を勝利に導くよう、徹底したサポートを行うわ。』

「感謝する。」

【ホーンフレア5 t h】は、上空を真っ直ぐに横断した。

12・破滅の日

駐艇場を通過した、火星圏タレスの内側は…暗かった。

夜がいつ開けるのかわからない、黒い空。

ビルやそれより低い家屋が立ち並ぶ建物群も、空に染められたかのように黒く。



照明代わりとして機能しているらしき赤い光が、街中のあちこちで灯されていた。

明るさの基準が満たしているのか？

このような暗い雰囲気の中で、民達は満足に暮らせているのだろうか？

リウト達には街中の光景が不気味に思えて仕方がなかった。

もちろん、土星圏ニコンにも、最下層の民達も存在していて…充足感を味わえているのかも心配していた。

あまり耳を傾けすぎるな、と先代王に忠告されたが。

しかし、母星の最下層の民達よりも、この真っ黒な空間の住人の居心地は悪そうに見えた。

わざわざ拡大して民達の暮らしぶりを観察までしなかったが、満足してないだろうと想像していた。

アナウンスからの目的地到達までの指示の遵守。

因縁相手・ラルクとの決着。

今はこの2項目が優先事項だ。

苦しんでいる民達の解放は、ラルクどころかクーラン張本人を倒さねば、叶わない望みだろう。

タレスにも統治の権力者はいるとリウト王子は知っている。

ところが、裏では全て、クーランが糸を引いているという噂が広まり、統治者の影が薄かった。

噂ではないだろう、とリウトは信じていた。

H Rの改造技術に長けているクーランが、同郷の統治者達を脅かすのは容易かった。

クーランにとって不都合な批判が浴びせられても、彼はH Rを使役してそれらを叩き潰せる。

タレスの歴史を熟知せずとも、衛星データからのニュースで歪な支配構造は理解できた。

なんととち狂った星だ。先程述べた2項目の優先事項がなければ、真っ先に民達の救済に取り掛かりそうだ。

リュートはそうってしまった。

陰しい表情の王子を、サレンは【ウインドアーチ】のcockピットのモニター映像で目撃していた。

彼女は気になって、リュートに声をかけた。

『大丈夫？ 具合悪そうよ？』

「あ、ああ。すまない。」

『あまり下を見ない方がいいわよ？ リュートは優しいんだから、余計に自分を苦しめてしまうわ。』

「…そうだ。我々は訪問者の身。アナウンスに従う必要があるのだ。指示に背き、反旗を翻してはならん。」

リュートは気持ちの切り替えの為、頭を左右に振った。

「奴との再戦に臨めるまでは、【ホーンフレア5 t h】の槍先を出さぬつもりだ。

【ラストコア】での対決では屈辱を味わった。かつての同朋達が報われるよう、今度こそ…！」

『相当な熱意をお持ちですね？ 《水星人》の貴方は。』

「…何？」

リュートの眉間がピクリと動いた。

『粘り強い執着心がありますね。15年以上もラルクを憎み続けたのですか？』

《水星圏ラドム》の子供であった貴方は。』

「貴様！どこまで知っている！」

リュートは上を向いて怒鳴っていた。

アナウンスの流れるスピーカーは、コックピット内の天面の端に付着されていたからだ。

『我々は1度インプットを完了すると、削除依頼のない情報は永久に残り続けます。王子が4代目王の拾い子という事実は、既にタレス内では共有済みです。そして、王子に1番近い仕官の、サレン・D・フェルテさん。』

『はい、何でしょうか…？』

「サレン！耳を塞いでいるんだ！」

リュートはサレンに警告した。

彼女は何を言ってるのかわからなかったので、両手に耳を当てなかった。

アナウンスには、訪れた他星の王子様が激怒しているのを、気にしていなかった。

だから、続きを躊躇う事なく、話せるのだった。

『貴女もニコンの、土星圏の民の者ではありませんね？』

『えっ！』

サレンも顔を狼狽させた。

どうやらタレスの案内人は、王子だけではなく側近の技術仕官の秘密まで暴いている口ぶりだった。

『言ったであろう！耳を貸すんじゃない！』

『モニター越しに伝えても無駄ですよ？王子。』

サレンさん、貴女は確か…木星圏の出身でしたね？』

『…。』

サレンは黙り込んでしまった。

自己紹介も多くはしていないのにもかかわらず、自分達の本当の正体を知る者に、反抗ができなかった。

『フォトム…と言えばどんな星か想像できますよね？あそこは凶暴なHR、ヒスロ・インフィの母星であります。元々、巨人人の住処だったのですよ。』

アナウンスは2人の感情をお構いなしに、話を進める。

『ニコンの《メス》達と比べて、貴女は頭1つ分、背が高かった筈です。何故ならば、貴女がヒスロと同じ木星圏フォトムの出身ですから。HRであれば…強靱な体躯で生物達を蹴散らせる素質もあったでしょうにね…もったいない。』

アナウンスは言い切ろうとした。

だが、最後の言葉は掻き消された。

堪忍袋の尾が切れたリュートが、コックピット内のモニターに向けて、拳を思いつきぶつけたのだ。

相当力を振り絞ったので、右側のサブモニターのガラスにヒビが入ってしまった。

それ程、頭に血が上ったのだ。

『…度が過ぎましたね。申し訳ございません。』

アナウンスの謝罪だった。

機械でも、生物達の感情の起伏を認知できたようだ。

お詫びの定型句を言わせたリュートだったが、彼は黙って【ホーンフレア5 t h】を操縦していた。

ヒビが入ったサブモニターだが、映像の乱れは起きていなかった。

『目的地の到達、及び入場の方法まで、適切に対応いたします。』

「初めからそうしろ。次申したら…我々から貴様らにも宣戦布告を発表する。」

『…承知致しました。』

アナウンスの言葉の威厳が弱まっていった。

大人しくなった敵地の案内人と入れ違いに、側近兵から通信が入った。

『王子！具合が悪くなったのですか！』

「すまない。故障はしていないが、モニターにヒビが入ってしまった。」

『サブモニターですね？王子、その案内人が再び不躰な態度を示しましたら、我々にご申告なさってください。早急に対応致します。』

「…私の身勝手さに、気配り感謝する。」

『とんでもございません！おっしゃるラルクの上に立つクーランは、我々にとっても見逃せない存在です！宇宙の秩序を取り戻す為には、奴らを止めなければなりません！』

「ああ。そうだ。奴は多数のHRを兵器として仕立て上げている。それだけでも十分、罪深き厄介者である。」

側近兵とリユートのやり取りに、恐る恐る割り込んだ者がいた。

アナウンスに自身の出生を見抜かれたサレンだった。

割り込むというより、細々と同乗者の名前を呼んただけである。

『…リユート。』

「サレン。君の気を悪くしてしまった。」

『ううん。いつかは見破られるとは、思ってたから。』

サレンは気にしていない素振りを見せたが、やや暗い雰囲気は残っていた。

彼女もリユートも側近兵も、操縦するのに専用スーツとヘルメットを着用している。

具体的な喜怒哀楽の表現を直接見せる事はできないが、話の節々で感じとるのはできた。

これから本番なのに、気落ちさせたと王子は後悔した。

…手を当てて、嘆いたとしても、もう遅い。

サレンはこの大仕事以外にも、今までリュート自身に付き添ってくれていた。

10年前、リュートがフレアランス家に救われてから5年後。

リュートもサレンを、木星圏フォトムから拾った。

助けてくれた恩を、サレンはとても感じていた。

滅ぼされた第1の故郷の同志達の為に。

サレンや救ってくれた第2の故郷の王家や民達の為に。

リュートはひたすら、前へ進むのを改めて決心する。

『目的地は奥にそびえ立つ白い建物群です。』

『細かい進路は接近後に案内します。』

「わかった。」

リュートはアナウンスの提案を承諾した。

★★★

目的地は、[レッド研究所]であった。

クーラン・レッドのラストネームから取った、簡単な名前付けをしていた。

あっさりとした名称とは裏腹に、研究所の施設は豪華であった。

もちろん、絢爛たる外装と内装とは無縁の、簡素なつくりの建物群ではあった。

それは、『機能性』にある。

[レッド研究所]の正面の出入りに、内外を遮断する為の扉がなかった。

神社の鳥居のような門が、ドンと構えているだけだった。

門以外の境界線には、【ホーンフレア5 t h】の3倍以上の高さを誇る金属製の柵が設けられていたが。

「この門を潜るのだな？」

『左様でございます。』

アナウンスが肯定すると、【ホーンフレア5 t h】の右脚が1歩前へ出した。

そのタイミングで、アナウンスからの制止が割り込んだ。

『そのままでは門の罠に引っかかりますよ？この門には透明の膜が張られています。』

「透明の膜？」

『バリアかベールの類いと認識して頂ければ構いません。』

言い切った後、門に変化が訪れた。

門の下がポワツ、と緩く発光した。

淡い輝きだったので、間違えて直視しても失明の危険度は薄かった。

弱々しい照明を数秒間点灯しただけで、他に変化は起きなかった。

『これで入場できます。』

「何を、していた？」

『軽い認証手続ですよ？』

あまり深く考えなくてもいいです、とアナウンスは告げた。

透き通った門下を、【ホーンフレア5 t h】を先頭に潜り抜けようとする。

側近兵が試しに通過しようと申し上げたが、サレンが精査の報告をしたおかげで、リュートの率先は継続した。

彼女は今調べた結果、問題ないわと述べた。

いよいよ【レッド研究所】の施設内へ突入した。

初めて訪れたリュート達の感想は、『通路とトラップだらけだ。』の1言だった。

施設内でもアナウンスの指示に従って直進したが。

10メートル強の一方通行の通路を進んでは透明の膜が、を何回も繰り返していた。

途中で曲がり角の通路もあった。

「複雑極まりない構造をしているな…外観からは想像がつかん。」

『悪賊共の侵攻から身を守る為ですよ。あえて【宇宙犯罪者】達と取引をしたのもです。』『あえて?』

『おっと、また余計な発言をしてしまいそうになりましたね。』

「…貴様の行動が、不透明だ。」

『よく言われますよ。』

リウトとアナウンスとの会話が繰り返されている最中に、彼らは『行き止まり』の地点に到達した。

否、それは『行き止まり』ではない。

スライド式の扉がドン、と構えているのだから。

あまりにも大きすぎて、『行き止まり』の壁と見間違えそうになった。

「ここに来て急に、時代が…。」

『今までバリアを破るように通過したのにね…。』

リウトとサレンは、巨大な扉の前に感想を述べた。

2人から見た第一印象は、『古そうだ』と感じていた。

いかにも、金属製でできた扉なのは確かだが、5枚以上の板を重ねながら開かれる仕組みとなっている。

板の端には、錆の跡が残っている。

錆止め用にお手入れも施されていない状態だ。

下手をすれば、錆びて朽ち果てた金属に穴が開いて、扉の奥を覗き込めるのでは…。

そんな考えも一瞬よぎったが、今の扉には錆の程度は軽かった。

覗き見は不可能と判明していた。

『ここから通路ではなく、広間に入りますので。』

「広間？」

『当研究所は、現在使用されていない施設も多数ございまして…。』

『だから入った時に白い建物ばかりが目立つのね…。』

『実際に稼働施設もありますので、無駄ではありませんが。』

「我々からすれば、もったいないが。」

扉の前でも、王子と技術仕官とアナウンスの会話は続いた。

お喋りはここまでにして、アナウンスが通告した。

『この古びた扉を開けます。《覚悟》は…よろしいですか？』

「《覚悟》…？」

リュートは首を傾げた。

『この扉の奥に、貴方の目指す宿敵がいるのよ、多分。』

「そうか…ならば問題無用である。いつでも開けるが良い。」

アナウンスの1つの単語が理解不能だったリュート達。

しかし、ここで引き下がれない彼らは、奥へ進み続けるしかなかった。アナウンスに、扉の開放を求めた。

数秒後、扉の最下層から緩やかな速度で上がっていく。

開き始めのうちは、平然と待ち構えていたのだが。

単語の意図が、判明する。対策などを取らずに開放を要求したリュート達に、猶予は与えられなかった。

扉が半分以上、開かれた時。銃弾が扉の隙間から飛んできた！

弾の直径は、ロボの胴体に小さな穴が開く程度。

生物の5倍以上の全長を誇るロボだから、生身でまともに喰らうとすぐに息絶えてしまう。

幸い、【ホーンフレア5th】も側近兵のロボも、扉の両脇に仕切りの壁があった。

銃弾の連射中は、壁の幅に収まるようにして身を潜めた。

「あれは、HRなのか!？」

『その通りです。』

「貴様…!隠していたのだな!」

『隠す?侵攻してきたのはそちらです。開放前に申し上げましたね?』

《覚悟》はよろしいですか、と。

ここでリユート達はハッと気づいた。

『それでも極力、減らしている方ですよ?攻めてきたのは貴方方ですから、叩き潰される可能性は考えられるでしょう?…ラルクの手際に、感謝する事ですね。』

「…ラルクが?」

『兵を送るな、と彼は申したのです。』

余程、貴方と決着をつけたいのでしょうかね…とアナウンスの発言は続いた。

『王子、少し下がりますか?』

側近兵の1人がリユートに尋ねた。

銃弾の勢いは止まらない。シールドのようなロボの腕サイズのバリアを張りつつも、身を潜めて銃弾を極力防いだ。

側近兵が、策を思いついたのだろう。

「それはいかん!このまま引き返せば、今までの挫折と同じになる!」

リユートは側近兵に対してこう返したが、率先者の彼も特に思いついた策などなかった。

銃弾が一方的に飛び交う中で、どうすれば突破できるのか。

リュートは頭を抱えていた。

他の側近兵が、名乗りをあげた。

『王子！私が先行致しましょう！その際に最深部まで進んで下さい！』

「相手は別の者だが、仮にもHRだぞ！？丸裸では君の命が保たん！」

『我々より王子達の御身が優先です！』

名乗り出た側近兵は強く告げた。

すると、黙って追従してきた他の兵も、彼に協力しようと誓った。

『1人では危険だ、私も向かいます！』

『私も彼に同行します！王子達は一旦下がってください！』

「君達…。」

リュートが側近兵達の厚意に感動した。

しばらくして、銃弾の連射の勢いに鎮静化が見られた。

流れ弾はポツポツと残ってはいるが、開放時よりは減少していた。

これなら防御しながらでも、一気に突破できるかもしれない。

その判断を告げたのは、サレンだった。

『分析してみたわ！向こうのHR達は前後の列と入れ替わりをして撃ってくるみ

たいよ！今出ましょう！皆さん、迎撃をお願いします！』

『乗り込んだ時点で、重々承知しております！』

側近兵のロボ4体がついに、仕切りの壁から飛び出た。

層の厚い扉の跡を跨いで、ロボ達はHRの軍団に突撃を開始した。

突撃された側もすぐに反応し、彼らが手にしていた銃で近寄れないよう、乱射していた。

側近兵のロボ達はシールド状のバリアと槍回しで、弾の攻撃を防いだ。

やや遅れて、【ホーンフレア5 t h】も扉の向こう側へ侵入した。

H Rの軍団が待ち構えていた奥の空間は、今まで一方通行だった通路と比較にならないくらいに、幅も奥行きも広がった。

一大イベントでも催せるレベルの大広間。

だが展開されているのは、危険なイベントだった。

【ウインドアーチ】には、高性能な分析機能をコックピット内で活用できる。

地図データも、微細な予測を立てられた。

サレンがデータ群を拾って読み上げると、直近で抜けた扉の真っ正面奥に、道が出来ている。

その進路に沿っていくと、競技場らしき施設に突入するとなっていた。

ところが、正面奥に道があるからと、直進を決め込む訳にはいかない。

扉の開放時に、H Rの銃撃戦を経験した。

扉が閉鎖していたので、【ウインドアーチ】の分析機能は鈍っていた。

物理的な障害に遮断された影響で、控えていたH Rの反応を感知できなかった。

サレンがパネルをずっと叩いても。

扉が開放して、彼女はしまった、と後悔した。

仕切りの壁のおかげで、事なきを得た。

通路の最深部の壁一面が扉のみならば、リユート側に犠牲者が出たかもしれない。

大広間のH R達は銃で攻撃してくる。

側近兵のロボ達が防戦を張っている。

後方から避けるように、遠回りで向かう。

軍団の一部が【ホーンフlea 5 t h】を定めて狙い撃つ。

その場合は、側近兵のロボ達の防御体制と同じ行動を取る。

シールド状のバリアと、槍回し。

【ウインドアーチ】もライトグリーンカーテン状のパールを敷いた。

一定の威力以下の銃弾ならば、跳ね返すようになっている。

【ウインドアーチ】には他にも、【ホーンフレア 5 t h】の機動力を高めてくれる。

翼代わりの役目を担うので、空中に上がるのも可能にする。

大広間ならば、天井の位置も通路の場合と比べてかなり高くなっていた。

敵のHR達から距離を置きながら飛べば、奥に進めるだろう。

側近兵のロボ達が交戦している為、彼らの無事が気掛かりではあった。

しかし、無理をしてでも自分達を因縁相手の元まで導いてくれる心意気を、無駄にはしたくない。

敵のHRの軍団は、【ホーンフレア 5 t h】を、リュートもしくはサレンを執拗に狙ってくる。

奥への進路も、塞がれた。

開放時よりも数は減ったが、それでもたった1ヶ所の抜け穴に群がってきた。

流石にここまでされてしまったら、【ホーンフレア 5 t h】も攻撃を開始せざるを得なかった。

強力な奥義は隠さないといけないので、【ホーンフレア 5 t h】は右腰の懷から指で挟める小槍を3本出す。

3本の小槍をHR目掛けて投げつけようとしていた時。

側近兵のロボの1体が、【ホーンフレア 5 t h】の頭上を飛び越えて、手前のHRを数体撃破していった。

『王子！奴らは我々が抑えます！先に行ってください！』

「すまない！無事生還した暁には、最大限の恩義を授けよう！」

はっ！と側近兵達の威勢のいい返事が、コックピット内に響いた。

側近兵のロボが1体、奥への通路側に移動してきた。

2体がHRを次々と撃破し、【ホーンフレア5th】の進路を確保しようと尽くす。

隙間を発見した。

いよいよ、奥へ繋がる道が開かれる。

ここまで来れば、強行するしかない。

因縁相手との決着までに温存したかったエネルギーだが、多少の消費はやむを得なかった。

【ホーンフレア5th】は全長と同格である長槍で、渾身の力で振り回した。

隙間の間隔が広がり、突破できる確率が高くなった。

【ウインドアーチ】の推進力を借りて、一気に前進を決めた。

大広間の奥の抜け道は、扉の開放前に利用した通路と似た構造になっていた。

つまり狭くなってきて、敵の攻撃からの回避がより困難になった。

当然、大群のごく僅かなHRが、背後に迫ってきていた。

小型の銃の発砲音も響いてくるし、銃弾も機体をかすめにかかってきた。

HR達はしつこかった。

ところが、一生懸命に奥を目指す【ホーンフレア5th】には、思いもよらぬ味方がついていた。

今利用している通路もまた、一定の間隔を保ちながら、扉代わりの膜が展開されていた。

膜で敵の進行を妨げていけば、因縁相手までの距離が縮まるだろう。

リュートはアナウンスに強く訴えた。

アナウンスもこの状況を理解し、タイミングよく膜を張る指示を出していた。

稀に【ウインドアーチ】の背部のブースターと膜が当たりかけた時はあったが、些細な事は気にしないようにした。

目標は因縁相手・ラルクとの決着に勝利する事。

彼が待ち受ける競技場まで、直進あるのみだ。

★★★

激動の進行の末に、とうとうリュートとサレンは、[レッド研究所]内の競技場の施設に到着した。

H Rの大群を突破後、アナウンスをうまく利用し、案内に従うのみだった。

アナウンス側も想像以上にリュート達に協力し、彼らを目的地である競技場まで導いた。

追っ手の気配は消えた。

施設内の競技場は、はっきり言って整然とされていなかった。

足場である地面のスペースはあれど、山々の崖崩れから転がり込んできたかのような瓦礫が、所々に散在していた。

【ホーンフレア 5 t h】が出入り口付近で地面に足が付いても、すぐ側には茶色い石ころも転がっていた。

「何だコレは…。」

『スタンドが残ってるし、競技場だと予想はつくんだけど…。』

初めて訪れたフレアランス家の王子と技術仕官は、荒れ果てた目の前の光景に絶句した。

『もちろん、競技場として機能していましたよ？』

アナウンスが告げた。

サレンの予想は、正しかった。

『つい最近、此方で激闘が開催されまして、壮大にやらかしたんですよ。』

「激闘？一体何が…。」

『腕のあるH R同士、ぶつけさせたんだなあ。』

『！？』

リュートとサレンは、体を震わせた。

アナウンスのさらさらとした清音と異なり、どこか癪に障る感じの伸ばした
《オス》の声。

他星人である2人は、声の主の正体は知らない。

だが施設全体の主であろう予測はしていた。

リュートが怒りを露わにした。

「もしや、クーランか！どこにいる！」

彼はコックピット内で左右を確認した。

声の主らしき者を探していた。

『おいおい…。お前さんの相手は、俺じゃないだろ？』

クーランは姿を晒さない。

しかし、リュート達との受け答えには応じていた。

リュート自身も、因縁相手はクーランではなく《ラルク》であると自覚していた。

ねちっこい喋り方をする《オス》の存在同様、自身の因縁相手がどこに隠れているかもわからない。

すると、サレンが彼に声を掛けた。

『リュート、スタンドの奥の縁辺りを見て！』

「縁だと…！？」

彼女の報告通りに、リュートはモニターの映像を確認した。

ピンポイントの位置を指定しているので、切り替えの操作は早かった。

元水星圏ラドム出身の王子が発見するのに、時間を要しなかった。

粒に見えるなら、拡大すれば良い。

ズーム設定をした後、黒い粒は黒い影へと形を変えた。

黒っぽい格好をしているのだから、『影』と思わせたのだろう。

実際は、黒のコートに付属しているフードを被った人型の《オス》が、スタンド奥の縁にポツンと座っていた。

【ホーンフレア5 t h】は競技場の外側に立っている。

まだ戦闘の場である競技場内のリングに足を踏み入れてない。

最上階の縁側といっても、人型の生物を目視できるのは、施設内の競技場の全高が低いからか。

あるいは、直近の戦闘の数々で競技場一帯が破壊されまくった影響なのか。

初めて足を突っ込むリユート達に、理由はわからない。

でも、他星の研究所内の競技場の状況など、今は構っている暇はない。

彼らが取り組まないといけないのは、フード男の対処である。

一帯が崩壊気味で瓦礫が散在していて気が滅入ってしまいそうでも仕方がない。

どのみち、フード男との戦闘に突入すれば、また競技場はズタボロにされるだろう。

フード男の正体をいちいち探らなくても、リユートには見覚えがあった。

辛い過去は、そう簡単に忘れられるシロモノではない。

第1の故郷を滅ぼされた、醜い事実があるなら尚更だ。

ラドムの崩壊寸前に、ほんの少しだけ見かけた…黒っぽい少年。

当時よりは、成長していたが。

ラルク・トゥエラー。

第2の故郷となった土星圏ニコンで賢者達に教わった名前。

スタンド奥の縁に立つ《オス》は、映像の拡大加減で輪郭がふやけた状態である。

フードを取っていないので、鼻から上は未だシークレットのままだ。

だが、2度も出会ったリュートの鼓動は早まった。

彼は3、4ヶ月くらい前に、HRとの戦闘の経験がある。

地球の海底に基地を置く[ラストコア]。

そこの隊員として活動していた黒川武人は、ラルク・トゥエラー本人だった。

訪問して直後、リュートは彼に対して戦闘を申し込んだが、敗北を喫した。

撃たれる寸前で、中断された。

【ホーンフレア5th】が立てなくなった影響も受けて、次期フレアランス家の王として期待された《オス》は、意気消沈していた。

意欲を失った彼は一旦母星に帰った。

しかし先代王にこっ酷く叱られ、改めて自身を見つめ直したリュートに、再度闘志が湧き上がった。

そして、今のタレスまでやって来た。

【レッド研究所】内の競技場では、ラルクと刃を交えていない。

【ラストコア】の時と比べて、威圧感が凄まじいと思っていた。

『リュート…。』

【ウインドアーチ】からサレンが、不安そうに彼に話しかけた。

親しい兄妹のような感覚でも、サレンはリュートの側近であるのだ。

王子が怖気付いている様子を見ると、どうしても気掛かりになってしまう。

リュートは側近の娘の声が、聞こえていた。

「…気にするな。もう後には引けん。どうしてもというなら、お前だけでも…。」

『私は平気よ。同じように脅威を感じてる。だから、今度は一緒に立ち向かいたいわ。』

「そうか…。」

『おうおう、ボサッとしてると、あっという間にやられるぞ?』

「! ?」

クーランの声の直後に、数発の銃声が鳴り響いた。

矛先は自分達であると認めているリュート達は、回避行動を取った。

【ホーンフレア5 t h】は案の定、横にずれた。

軽快なステップだった。

問題は、その後の動きだ。

突進する時、方向は一直線な筈だと信じていたが。

ずれて地面に着地した【ホーンフレア5 t h】のカメラアイは、至近距離の【ブラッドガンナー】と目が合ってしまった。

わずか数秒で、ロボ形態への変身も、距離を追い詰める事もやりきったのである。

距離の間隔の差が、有利不利に繋がる。

接触スレスレの両者では、銃弾を打ち込みやすい【ブラッドガンナー】がやや有利である。

【ホーンフレア5 t h】の槍攻撃では、即座に防戦を張るのは難しい。

しかし、リュート達はどうかして思考を巡らす。

詰め寄るなら、少しでも離れるのがいい。

うまい事隙間を発見して、そこに飛んでいこうと考えていた。

【ホーンフレア5 t h】単体では、この動作は厳しかった。

スラスター類の装置は付随しているものの、この機体ができるのは浮遊ぐらいである。

大きく空を飛ぶのは、ほとんど不可能であったのだ。

だが、今は単体のみではない。

【ホーンフレア5 t h】の背部には、【ウインドアーチ】が上向きに弧を描くように接続されている。

弧の内側らしき下部（横に倒すと背部になる）に複数のブースターが備わっており、噴射して機体全体の推進力を上昇させている。

それに伴い機動力も向上し、機敏に動く事が可能になった。

隙間を見つけてはそちらにワープを、幾らか繰り返していた。

競技場のスタンドの外側から、次第に中まで深入りしていくリユート達。

競技場一帯は本当に、激しい戦闘が原因で地面の隆起や沈降、スタンド台の材質の破片がゴロゴロ転がっているなど、足場の状態はとにかく悪かった。

〔ラストコア〕の訓練所で行われた戦闘では、滑らかな平地のままで挑んだ。海底の基地内故に高さ制限があり、〔ホーンフレア5 t h〕はうまくジャンプできずに右脚を挫いてしまった。

研究所の類いである今の施設でも、瓦礫の散在以外の条件は似ていた。

だが、今の機体の両脚は挫いていない。

【ウインドアーチ】が【ホーンフレア5 t h】の着地の負担を軽減させている。無理矢理ズドンと強く落ちてても、衝撃を柔らいでくれる。

だから、どんな足場でも機体の損傷なく、スムーズに次の行動に移せるのだ。

競技場のリング内まで、【ブラッドガンナー】をうまく誘導した。

【ホーンフレア5 t h】が凸凹した地面のリングの中心付近に立つと、彼はスタンドの縁から見下ろしていた。

【ブラッドガンナー】から、ラルクから何の言葉を発してこない。

彼は利き手じゃない左手にショットガンを持ち、何度かバンバンと撃った。

攻撃のアクションを起こせないように。

【ホーンフレア5 t h】は飛んできた銃弾を回避する為、後ろにピョンピョン跳ねて下がった。

凸凹している地面でも、両脚に異常は発見されなかった。

何も手を出せないまま終われないので、機体の腰から小銃を何本か左手に持った。

忍者のくれないのように、ビュンと瞬発的なスピードで飛ばした。

速さでスバツと消えそうになった小銃だが、【ブラッドガンナー】はこれを捉えていた。

撃ち落とさずに横にズして、スタンドの縁から飛び降りた。

再び、【ホーンフレア5 t h】の間近まで着地した。

距離を詰めて、銃を発砲して動きを封じようとする魂胆だった。

間隔はまた、開いていく。

今の【ホーンフレア5 t h】は機動力が高くなっており、突発的な行動を単体のみよりも容易い。

詰めてきた【ブラッドガンナー】が1発弾を飛ばしてきたが、【ホーンフレア5 t h】の腕の盾型のバリアで凌げた。

『リ्यूー！』

サレンが叫んだ。

【ウインドアーチ】の弧の両端辺りが光る。

5メートル程度の弓の先端から、細長いライトグリーンのビームが出力された。

必要最低限のバリアで【ブラッドガンナー】は防ぐ。

彼の周りには地面が燃えて、黒っぽい煙がモクモクとあがっていた。

【ウインドアーチ】からのビーム攻撃は、まだ続く。

【ホーンフレア5 t h】を後退させた。

障害物と接触した時は、ジャンプしてそれに乗る。

全壊気味の、足場の安定しない競技場のスタンド。

幾度の戦闘でも耐えきった一部は、足場が階段状になっていた。

【ブラッドガンナー】がしてきた事を、今度は自分達がする。

ジャンプを有効活用して、スタンドの縁まで登った。

「サレン、ここまで登れたらもうよい。」

『わかったわ。』

【ウインドアーチ】のビーム攻撃がピタッと止まった。

ビームの火力が高くなり、リング内のほぼ全域が燃え盛る状況にまで発展していった。

引火しやすい物質は少ないので、これ以上の爆発は起こらなそうである。

今が、チャンスだ。

【ホーンフレア5 t h】と【ウインドアーチ】は、分離を開始した。

【ウインドアーチ】は空中を飛んで、縦向きに変えた。

緑色の弧を描いた機体は、【ホーンフレア5 t h】の弓となった。

『どっちにする？あなたの槍にするのか、私の矢で射るのか…。』

サレンはリュートに判断を委ねた。

王子の決断は、早かった。

「出し惜しみは不要だ、サレン。私の愛槍で奴を射止める。これで倒れる方が、奴も本望だろう。」

【ホーンフレア5 t h】が右手に機体と同等の長さを持つ大槍を持った。

『わかったわ。設定のサポートは任せて。』

「すまない。感謝する。」

『10年以上の付き合いになるのよ？そんな畏まらなくてもいいわ。』

サレンは恐れ入るリュートに対して宥めていた。

王子と従者の関係性が崩れそうな構図だが、彼らにはこれが普通である。

故に、周りに唆されても意識を変えようとしなかった。

大槍が倒れるように、横向きにした。

大槍の中心と、弓になる【ウインドアーチ】の中心とを重ね合わせる。

【ウインドアーチ】の中心部に、サレンが座るコックピットがある。

コックピットと飛ばされる矢の間に、超強力な耐熱性を持つ合金のボックスが挟まれていた。

これのおかげで、彼女の真横で矢が乱射しても、失明のおそれがない。

【ホーンフレア 5 t h】は大槍の底の部分を右手で掴み、弓道の構えを取った。

左手で【ウインドアーチ】中心部に備わった持ち手を握る。

飛ばす動力源となる弦は、【ウインドアーチ】の弓の両方の先端から、光の糸となって紡ぎ出された。

大槍の底に、光の糸を引っ掛ける。弦は直角に伸びた。

あとは照準を合わせて、放つだけ。そこに躊躇いはない。

【ホーンフレア 5 t h】は矢の代わりの大槍の矛先をやや下に傾けた。

標的の【ブラッドガンナー】は斜め下のリングの中心付近に位置すると読んでいる。

地面の砂ぼこりも相まってか、ビーム発射時に舞った煙は晴れなかった。

ビントは視界がくっきりしている時よりも、倍以上ブレていると思ってもいいだろう。

だが、ここまで煙が拡散していないと、【ブラッドガンナー】の動きは止められないとも考えていた。

避けても瞬時に詰め寄ってくる【ブラッドガンナー】は、身軽なHRだった。

回避行動もしばしば取られる。

まして、HRのラルクと、それ以下の身体能力の数値を示す生粋の生物のリュート達では、差が十分開いている。

真っ向勝負のつもりで挑む王子だが、正攻法一筋では彼とサレンに勝ち目はない。

だから、機会を狙う必要があった。

やや斜め下に固定した大槍を、明るい緑の光の輪が包む。

輪は広がりを見せて、大槍全体を緑色の光の膜で覆った。

【ホーンフレア5 t h】の右手に、高温の熱が伝わる。

まだ、まだだ。

この超強力な1本の槍を放てば、全てが終わるんだ。

そう確信づけるんだ。

ギリギリの所で照準合わせたら、槍は因縁相手まで真っ直ぐに飛ぶ。それまでの辛抱だ。

緊張しているリュートがサレンの完了報告を待ちに待っていた時、状況がガラリと変わった。

一瞬の、たった数秒間の動作が起きていた。

リング下にて煙の渦に飲まれていた筈の【ブラッドガンナー】。

それがピュン、とスタンドの縁の高さまで飛び上がった。

装甲は、あまり傷ついてなかった。

【ブラッドガンナー】は背部の赤いウイングを広げて、空中に浮いていた。

静止時間はわずかで、黒いHRは矢を射る寸前の【ホーンフレア5 t h】に正面衝突してきた。

わざと、である。

右手の指が弦を離せば、超速度の大槍の矢が【ブラッドガンナー】に刺さる危険性があったのだ。

下に傾いた大槍よりも上に【ブラッドガンナー】は突進したので、胴体への貫通は免れた。

コックピットが内蔵されている【ホーンフレア5 t h】の胸元に、ガツンと体当たり。

何かを握っていた両手が開かれてしまい、右手にあった大槍は天井方向に飛んでいった。

天井に穴ができた。

その後は施設内のどこかに突き刺さったのか、外部への空気の漏れは薄かった。

「ぐっ!？」

『きゃあ!？』

【ホーンフレア5 t h】も【ウインドアーチ】も、バランスを崩されてしまう。サレンがレバーの握る手を離さないでいたので、【ウインドアーチ】は元の体勢に戻れた。

【ホーンフレア5 t h】側が、大変な事になっていた。

スタンドの縁に立っていた藍色の機体は、競技場の外側の地面に叩きつけられた。

その地点はまだ破壊の跡がなかった箇所であり、これが初めての地割れとなった。

「ぐっ、かはっ!？」

リュートもサレンも、ヘルメットの着用はしている。

コックピットのシートには、衝撃を柔らげる特殊なクッション材を使用している。

それでも、今の被ダメージは物理的な衝撃が、勝っていた。

ヘルメットの透明シートから覗くと、リュートの額の上から、血が流れていた。

強い打撃を受けた影響で、流血以外に意識朦朧の状態に陥った。

彼の意識はフワフワしていた。

「はあ…はあ…」

視界も朧げで、モニターの変化もいまいち掴めなかった。

薄い意識の中でわかる事は、黒い物体が己に歩いてくる姿のみ。

【ブラッドガンナー】がゆっくりと、自分を倒しにかかる。

2度目の対戦。今度はサレンのサポートもあった。

全く歯が立たずに、このまま一生を終えてしまうのだろうか…。

『リュート！』

サレンがまた叫ぶ。

【ウインドアーチ】、先程と同じビームを【ブラッドガンナー】周辺に放つ。

トドメは厳しくても、足止めぐらいは。彼女は奮闘した。

しかし、サブのマシンはあくまでサブだ。

軽いバリアを張っただけの【ブラッドガンナー】はビームのダメージを受けた。

ただそれだけで、近づく【ウインドアーチ】を左手だけで払い退けた。

『きゃあああ！』

緑色の弓の形をした機体は、再びバランスを崩す。

今度は軌道修正に時間を要した。

その間、王子の意識が少し回復した。

「サレン…サレン！」

【ホーンフレア 5 t h】、今の状況下ではあり得ないと想定されるスピードで動き出した。

上体のみを素早く起こし、腰に忍ばせていた小銃を【ブラッドガンナー】に投げつけた。

3本合わせてを、2回行った。

当然、【ホーンフレア 5 t h】は両手で投げつけたのである。

自分目掛けて投げつけてきたのは察していたので、【ブラッドガンナー】も素早くこれを避けるか撃ち落とした。

撃ち落とした分は軌道を変えて下に落ちていった。

リュートは頭痛を覚え、苦しんでいた。

まだ戦いは終わっていないし、勝利の兆しも訪れなかった。

敵は、容赦してくれない。

あるいは、本気で挑まんとする相手に、情けをかけさせたくないという優しさがあったのか…。

ラルクが話さない以上、彼の思考は見えてこなかった。

【ブラッドガンナー】が再び迫ってきた。

今度は右足の裏で、【ホーンフレア 5 t h】の頭部を踏みつけた。衝撃の負荷が、襲いかかってきた。

『リュート！！！！』

サレンは無事だった。

【ウインドアーチ】は地割れの窪みに嵌り、空中飛行が出来ない状態になった。

涙目で叫ばれた名前の主は、2回の後頭部の打撃に遭い、瞳を閉じた。

仰向けに倒れた自分の愛機と共に、眠りについた。

彼に仕える人型の《メス》は、思いっきり泣いた。

★★★

『あーあ。やっぱり俺の《自慢の息子》の勝利だわ。』

新たな《オス》のニヤけた声を、サレンは聞いた。

別に目新しくはない。声の主であるクーラン・レッドが、わざわざ競技場まで足を運んでいたからだ。

競技場の外に標的の機体が押し潰されたのを、既に知っていた。

運動が苦痛なクーランが、わざわざスタンドの縁の、裂けた断面の上に立っていた。

肌黒の地球人の中年男性に似た研究者を、【ウインドアーチ】のカメラアイは捉えていた。

クーランはまだ、ご満悦までいかなかった。

ん？という疑問符がつきそうなニュアンスを含んだ声が漏れてきたのだ。

母星の王子を眠らせてまで戦闘を繰り広げたのに、まだ物足りないと言うのか。

サレンは口にせずとも、コックピット内でクーランを睨みつけた。

決着のつけ方に不満そうなクーランは、《自慢の息子》に命令を下した。

『ロボは粉々にしてしまいな！あと…《メス》は持って帰るぞ？』

《メス》。人間の女性に相当する性を持つ生物。

〔レッド研究所〕内の競技場一帯では…サレンしか該当する生物はいなかった。

つまり、十数年仕えた王子は愛機のロボごと粉々にされる。

自分は…クーランとラルクに連れ去られる。

タレスにとっては他星人である自分は、隷属扱いされるだろう。

クーランが《メス》のみを所望するのならば、《メス》のみが果たせる役割もご存じの筈だ。

…きっと、《オス》のHRか、ロボのような機械を当てがわれる。

自分と定められた相手との子種を残せと告げるのだろう。

そんな未来がそう遠くないと、サレンは想像してしまった。

絶望的だと嘆きたくても、無理だ。

フレアランス家の次世代の王として期待されていた《オス》が、強制的に意識を失ったのに、希望を抱けないだろう。

『声だけ聞いてりゃ、活きのいい若気の《メス》だなあ。あの巨体のヒスロと同じ《フォトム》の出身なら、長持ちするHRが生まれそうだなあ。』

クーランは、嘲笑っていた。

『どうだ？お前さんのガキ、2匹目。最初のガキを産んだ《メス》は早々くたばっちまったから、恋しいだろう？声が良いんだったら、発育も良さそうだな。務めを果たせると思うぞ？それか、他に回すか、分け合うか…。へへ、増強具合が楽しみ…。』

だ。とクーランはここまでは言葉を紡ぐ予定だった。

それは、遮られた。

クーランはスタンドの縁の面に、大の字で倒れてしまった。

彼の周りには、真紅の液体がスタンドを汚していく。

胸元にポカリと開いた穴が、液体=血の流出を促していた。

誰かが彼の、息の根を止めた。

穴の開け方は綺麗な円を形作っており、槍で器用に開けれそうになかった。

だとすれば。サレンはカメラアイの視点を切り替えた。

【ブラッドガンナー】の映像をキャッチする。

黒いHRは、地面にやや埋め込まれた【ホーンフレア5 t h】の近くに立っていた。

右腕だけ、直角に上げられていた。

ハンドガンを取り、引き金をひいた姿だった。

「…まさか、撃ったんですか？あなたが。」

サレンが恐る恐る尋ねた。まだ、全てを信用していない。

だが、過酷な現状から変わるきっかけがあるのなら、それを知りたかった。

【ブラッドガンナー】は顔を素振りを見せなかった。

ハンドガンを消滅させ、右手は人差し指以外の指を内に曲げた。

目的の物体に対して指を指すポーズを示した。

指先の方向には、天井から垂れ下がる薄い液晶モニターがあった。

ラルクが示してから、モニターは降りてきたのである。

モニターに電源が入る。映るのは、黒い宇宙と青い星。

サレンがリュートと一緒に、1度だけ訪れた星だった。

「地球…？」

サレンは青い星の正体を述べた。

【ブラッドガンナー】はこくりと頷く。

ここで、彼女は…ラルクの意図を感じ取っていた。

あまり複雑な処理を巡らさなくても、直感的に理解した。

『地球に行け。』と。

地球にある外宇宙対策本部【ラストコア】の特別隊員である黒川武人。

彼がラルク・トゥエラーという火星圏タレスの、【レッド研究所】のHRである。

しかも11の星を滅ぼした【宇宙犯罪者】のレッテルもある曰くつき。

土星圏ニコンの賢者達から、リュートとサレンは聞かされていた。

最初訪れる前は断片的にしか教えてもらえなかったが、訪問後の報告資料で情報が結びついた。

【ラストコア】自体が海底の基地だった為に、衛星データでの収集が困難だった。

ラルク本人が、金星圏フェルホーンの王女エトラトルによって改心の道が開いた事も、併せて知ったのだ。

クーランの側にラルクはつきながらも、自分とリュートには地球へ行ってサポートしろと仕向ける。

心底、【ラストコア】、ひいては地球の心配をしているのだろう。

ひょっとしたら、ラルクの心までは、壊れていないかもしれない。

サレンが想像を膨らませる最中に、小型のロボ達が集結する。

ラルクが競技場へ向かう前に後始末をしていた掃除用のロボ達だった。

【ウインドアーチ】が嵌った窪みの外堀を滑らかにするようにせっせと掘った。

外堀が緩やかな傾斜へと変化した時、【ウインドアーチ】が上昇を始めた。

緑色の弓型の機体は、共に戦った相棒の元へ駆けつけた。

【ホーンフレア5 t h】の動作の気配は無い。

掃除用ロボに加え、機体を持ち上げる支援用ロボが、それと地面とを引き剥がした。

背部の肩の辺りのみがガラ空きだった。

【ウインドアーチ】は接続の合体を開始する。

合体時はサレンでも、【ホーンフレア5 t h】の操縦は可能だった。

頭部のカメラアイは故障したが、メインエンジンまでは壊れていなかった。

移動の案内は、【ウインドアーチ】側で統一を決めた。

損傷だらけでも、移動する分のエネルギーは残っていた。

あとは…この施設を出るだけだ。

【ウインドアーチ】のcockpitに、新情報が流れた。

ここから外宇宙に出るまでの、脱出経路であった。

そこまで親切に教えてくれるなら…。

「ラルクさん、あなたも…。」

一緒に出ましょう？とサレンは言いかけた。

【ブラッドガンナー】が首を左右に振ったので、全部言えなかった。

「…わかりました。お気遣い、感謝します。」

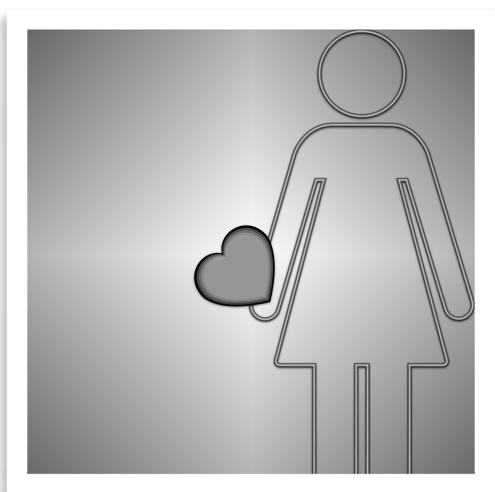
【ウインドアーチ】は下部のブースターで機体全体を前進した。

競技場には大きな出入り口が2つあり、リユート達を通った地点と向かい合った方へ進んだ。

経路の最後には《搬入口》があり、出ると外宇宙に繋がる。

経路図の通りに従ったサレン達は、タレスの外へ出たのだった。

13・集結の日



【パスティーユ】のパイロットとしての期間満了日前日。

私達白井3兄妹の更新が決まった。

期間は同じ3ヶ月間であり、9月の末で終了する。

更新手続に立ち会ったアレックスさんは、次の期間で新たな進展がなければ諦めろ、と告げられた。

夏から初秋にかけてが、ラストチャンスだった。

金星圏メイスのHR、ビウス・エクステラの残存兵が愛嬌市の【天海山ユートピア】を襲撃しようとして来た。

結果、マルロの説得で残存兵達を仲間として受け入れ、宇宙船【トールメイス・サウ】は大西洋上空まで運ばれていった。

アメリカ東部の海底には、【ラストコア】の臨時支部が潜んでいた。

私達も更新が決まった翌日に、【ラストコア】の臨時支部へ移動した。

まとめてあった荷物はそのまま所持して。

家族等の連絡は、ジェームズさんら事務局の方々が行ってくれた。

ジェームズさんは全く…と頭を抱えていた。

苦情も聞いたりする仕事だから、余計大変だろうなあ。

事務局長に同情しても、何もできないけど。

臨時支部に移動後、私達はこれからのスケジュールを言い渡された。

勉強と訓練の反復がほとんどだった。

もちろん、これはあくまでも予定である。

敵の襲撃、もしくは念願の《宇宙進出》が叶った時、予定が変更する場合がある。

《宇宙進出》は4、5年前に【ラストコア】で1度実施していた。

これは、あのポニーテールのお姉さんが話してくれた。

お姉さんは私達が来た事に哀しげの表情を見せていた。

だけど、

「もう覚悟しているみたいだから、仕方ないのね。」

と私達をすんなりと認めてくれた。

過去の《宇宙進出》を他の人達が伝えなかった理由として、悲惨な出来事があったかららしい。

計画に関わった1人を失ったのが、[ラストコア]の皆さんに大きな衝撃を与える結果になったのだとか。

お姉さんはその計画のメンバーに加わってないので、細かい事は知らないと述べていた。

私達が加わる《宇宙進出》の計画は、[ラストコア]にとっては2度目の挑戦になる。

移動してから翌日、早速勉強と訓練に取り掛かった。

勉強の内容には、宇宙に関する基礎知識の授業も組み込まれていた。

宇宙へ上がる時にも説明される予定だけど、予習しておくとアレックスさんは言った。

私と和希兄ちゃんはちゃんとノートを取っていたけど、勇希兄ちゃんは途中で眠気と闘っていた。

そこで講師の先生は、毎日テストを実施するようになった。

勇希兄ちゃんは焦って、勉強に取り組んだ。

授業前に音読して暗記しようとする下の兄に、私は呆れていた。

全く、普段からやらないから…。

午前に勉強をして、昼食を摂った後に訓練が始まる。

訓練にはH Rのロボ形態と戦闘に入った時の実戦を行った。

マルロはロボ形態【チタン・キュレン】にはなれない。

首元の黒い装置のおかげで。

誰が相手するんだろう？と疑問に思ったのだけど、答えはすぐに出たんだ。

3隻の宇宙船「トールメイス・サウ」に乗っていた、「エクステラ隊」というビウスの残存兵。

彼らはマルロら「宇宙犯罪者」には劣るらしいけど、れっきとしたHRである。

練習相手には丁度いいとなって、1週間の内5日間は彼らとの対戦を組んだ。

残りの2日間は、別の訓練だった。

ロボに乗って戦うだけで《宇宙進出》の期間は乗り越えられない。

些細なトラブルを対処できないと、命を落とす危険性がある。

応急処置的な訓練も、私達は受けた。

模擬戦闘も応急処置の実習でも、性格の差が出た。

いつもやかましい勇希兄ちゃんは、文句ばかり言っている。

【パスティユ・サニー】の拳が残存兵に全く歯が立たなかった時は、悔しがる表情をしていた。

負けず嫌いだからね、下の兄は。

和希兄ちゃんは黙々とメモを取っていた。

それどころか、自分でも閲覧室を利用して、予習や復習をしていた。

私も似たような勉強で取り組んではいたけど…。

上の兄は最終的に、模擬戦闘のコーチを担当するマルロに質問できる程になっていた。

やっぱり、普通の学業への姿勢がここを出るんだなあ、としみじみ思っていた。

暦上では8月初旬の頃。ジェームズさんが紹介したい人達がいると聞いて、統制制御室に向かった。

軽めの集会だった。統制制御室にはジェームズさんの後ろに、軍人の格好をした人達が十数人並んでいた。

見た目通り、正規軍から秘密裏で志願してきた若者達だった。

私達はジェームズさんの口から直接聞いた。

正規軍は名称と役割だけ学校で習ったんだけど、いまいよくわかってはいなかった。

【ラストコア】の皆さんからは、恨みつらみの言葉を発している人がちらほら見かけた。

集会の実施中、たまたま出会ったあのお姉さんは、

「ウチと仲が悪い組織なのよ。立派な設備を有しているのに、何も行動しない臆病な軍隊だって…。」

隣で私に囁いた。

でも、目の前の軍人さん達は違った。今までの経緯を述べて、謝罪したのだ。

志願兵の皆さん全員で、頭を下げていた。

本当に誠実な人達だと感心した。

同時に【ラストコア】のスタッフの皆さんの悪口を言っていた事も、初めて知らされた。

《宇宙進出》という、立派な目標を掲げているのに…。

嫉妬なのかなあ。

でも、仲間が増えるのは嬉しかった。

期間延長した私達以外だと、外部からの仲間はマル口とピウスの残存兵ぐらいだから。

もう、仲間と認めても、いいのかなあ…。

残存兵を引き抜いた成果もあるから大丈夫なのかも。

早速、志願兵の皆さんも私達と同じスケジュールを組まれた。

志願兵の皆さんは【軍用機】に乗って戦う予定となっている。

【軍用機】と【バステューユ】は似た構造とシステムを持つ、3機合体の巨大ロボットだった。

ただ、違うのは威力の低さと装甲の薄さ…だった。

実は【バステューユ】は一般人でも乗れるように、火力も防御力も高い水準を定めている。

つい敵陣に突っ込んで行っても、バリアで損傷の軽減も出来る。

エネルギーの交換や《剛力ガラススフィア》に包まれたコックピットの分離も、しやすい設計にされている。

これに対し、【軍用機】は少し劣っていた。

本来量産するために、1体あたりのコストを落としているらしくて。

私がメインを務める【フラワー】と同じロッド攻撃専門の【コードS】。

上の兄がメインの【スカイ】と同じ俊敏な剣術を疲労する【コードL】。

下の兄がメインの【サニー】と同じがっちりとした体格からのパワーで圧倒する【コードW】。

この3形態を戦況に応じて変形し、切り抜けていくのだ。

【軍用機】と【バステューユ】との連携を確立する為の訓練を、何度も実施した。

初対面時の謝罪の低姿勢といい、志願兵の皆さんは恐ろしい程に謙虚な態度で挑んでいた。

マルコの厳しい喝が入っても、ハキハキした大声で肯定の返事をしていた。

文句垂れの勇希兄ちゃんには見習ってほしいくらいだ。

これには、下の兄に至っては、寂しさを隠しきれていないのかもしれない。

辛いけど今がまだ楽しい私と違い、兄達は私について来た形である。

（上の兄は機械に関しては興味津々だったけど。）

〔ラストコア〕臨時支部は、アメリカ東部の海底に位置する、日本から遠い場所にある。

故郷に親しい友人でもいれば、離れ離れで心は痛む。

空き時間を利用して、勇希兄ちゃんは国際電話で空手教室の友達と話し合った。

和希兄ちゃんは閲覧室のパソコンを借りて、高校の部活中間のチャットに入室していた。

2人とも、遠方にいる仲間と声や文字で交わしてから、浮かない表情をした。

私も仲間なんていないけど、家族は心配だった。

実家の喫茶店を営む祖父母と、今成区でちょっと変わったホテルの経営をしている父が、心変わりせずに暮らせているか。

特に祖母は、普段は優しいのにたまに発狂するから…。

ジェームズさんの話術の凄さを、今は信用するしかない。

マル口はHRで、私達が彼の仲間達と切り離れたせいもあるか、この点に関しては冷たく言い放った。

「まだのうのと生きている仲間がいるだけマシだ。どうしても不安になるなら、せいぜい防衛対策の訓練に励む事。やる気と努力しかないよ。」

嫌味そうな口調だから、下の兄はムッと睨みつけた。

食ってかかりそうだったので、上の兄がそれを止めた。

でも、所詮私達も、マル口の言葉に突き刺さる立場だ。

マル口だって同じように発言している途中で心に刺さっているかもしれない。

彼も私達から《武人兄ちゃん》を奪ったから。

人は何かを奪ったり奪われたり…そんな中で生きている。

こんな事言うと、心が綺麗な人からすれば「なんて残酷なんだ！」と驚愕の表情をするだろう。

だけど、たった13年しか生きていない私だけど…家庭と学校しかなかった狭いコミュニティの中で実感していた。

家族は心配してくれるからまだマシで…学校なんて、私に対して冷遇だったよ。

なので最低限の勉強しか、同世代の人間が集まる学び舎では取り組んでない。

上っ面だけ装った、中身の無い生活。

〔ラストコア〕を訪れている今日まで、私の心は空っぽだった。

《武人兄ちゃん》だけがいなくなって寂しかった〔ラストコア〕だけど、《マル口》が来てから気が紛れた。

実はかなりの猫舌だったり、〔宇宙犯罪者〕の1人なのに情に熱い部分があったりと、面白い発見をした。

完全に味方になってはいけないのだけど、もう信用してもいけそうな位のレベルまで育まれてきた。

マル口との信頼関係をより強固にする為にも、7月からの訓練により励んでいる。

叱責、怒号が入り混じった中での厳しい環境に身を置いて、1ヵ月半が過ぎた頃。

日本ではお盆の時期があって、多くの日本人が数日間の休暇を取るんだけど、その期間は過ぎていた。

子供達の夏休みも、終盤に差し掛かる時だった。

緊急集会があった。

〔ラストコア〕に意外な訪問者が現れたのだ。

★★★

この日も午後から訓練があったのだけど、専用スーツには着替えなかった。

緊急の集会で統制制御室に行かなければならなかった。

モニター越しで話は聞けるのでは、と思っていたのだけど、私達兄妹とマルロは直接来いと言われた。

呼び出し人はアレックスさんだった。

私達が前に、マルロが後ろに続いて、急ぎ足で行った。

マルロは「全員揃ってからするんだ、落ち着け！」と吠えていた。

多分これは建前で、本音は私達の急ぎ足の速さについていくのが大変なのだろう。

HRなのに、体力がないんだよねこの人。

首元の黒い装置が重い影響もあるだろうけど。

志願兵の皆さんは勉強と訓練は合同で参加するのだけど、昼食時のみごく稀で、離れて食べる時があった。

ジェームズさんに連れて来られた人達だから、個別で打ち合わせしてるんだろう。

私はそう解釈していた。

統制制御室。

すでにスタッフさんの一部が周りを囲むように集まっていた。

西条司令とジェームズさんとアレックスさん、志願兵の皆さんも先に来ていた。

先に並べた3人は、空間ができていた室内の中心地の付近に立っていた。

中心地には…3人の大人が座っていた。

後ろの騎士の格好をした2人は跪くように、右拳と右膝を床につけてしゃがんでいた。

残りの、彼らの前列にいた1人の女性は、軽い正座をしていた。

お尻が少し、上がっていたのだ。

足の甲も、組まれていなかった。

この女性だけど、私達兄妹には見覚えがあった。

俯いていて、若草みたいな明るい緑色の頭髮と、耳を覆った紫色の飾りしか見えてはいないのだけど。

中学生になった4月。

勇希兄ちゃんとの下校中に、突然の【ホルプレス】の襲撃。

吉川公園で私達3兄妹は《武人兄ちゃん》と出会い、【ホルプレス】を倒してそのまま【ラストコア】の一員になった。

その10日後ぐらいに、藍色の髪の男の人と一緒にやって来た、女の人がいたんだ。

名前は確か…サレンさんと名乗っていたかなあ。

正直、来て早々故郷の星に帰ってしまった人達だったので、私達の記憶にあまり残っていない。

《武人兄ちゃん》に挑んで負けた王子様が気落ちしてしまい、復活しないまま戻っていった。

その後の王子様一行の行方を、私達は知らない。

《武人兄ちゃん》の不在から、【ラストコア】内は騒がしくなって、例の王子様一行の動向なんて気にする暇などなかった。

マルロやビウスの残存兵の受け入れに、私達兄妹の期間延長。

《武人兄ちゃん》以外のHRを引き抜く必要があった【ラストコア】に、他星人の活動に目を向ける時間はなかった。

統制制御室の真ん中に座り込むサレンさん達にはびっくりした。

故郷の星に帰る間際にはリュート王子の方が元気なかったのに。

今はサレンさんがひどく落ち込んでいた。

そんな彼女に対して、ジェームズさんを筆頭に、非難する「ラストコア」のスタッフの皆さんの姿があった。

西条司令はサレンさんと向かい合った形で腕を組んで、陰しい表情で静観しているだけ。

その隣のアレックスさんは、やや困り気味の顔をしていた。

和希兄ちゃんがアレックスさんに聞いた。

「すごい罵倒の嵐ですけど、どうしたんですか？ここまでこの女性を責めていきますけど…。」

「ああ。実はだな…。彼女達は急に戻って来たんだ。」

「急に、ですか？」

アレックスさんはこの後、簡単に経緯を教えてくれた。

サレンさん達は1隻の宇宙船を地球のインド洋の遠海にて着水させたようだ。

電波の発信作業という予約も無しに、地球に降下したのである。

東南アジア界隈の水産業界に勤めている人達が行政に取り次いで、そのまま情報が「ラストコア」に流れて来たのである。

彼女達も言われるがまま、ここまで連れて来られた。

「情報を提供してくれた団体には感謝したい。あそこ界限だと、治安の悪さで彼女が巻き込まれる危険もあっただろうからな。」

アレックスさんの発言は、想像に難くはない内容だ。

私達兄妹は日本人で、海外の知識は学校の授業かニュースで触れるかのどちらかから吸収する機会が多い。

「ラストコア」はほとんど地球外の話が多いので、地球上の地理関係はあまり教わらない。

まあ、自学自習で予備知識は定着できるけど。

勉強のできない勇希兄ちゃん以外はね。

サレンさんがいるという事は、土星圏ニコンの人達が来ている。

当然、リュート王子も一緒のはずなんだけど…彼の存在が見当たらなかった。

今はサレンさんだけでも、再会でできて嬉しい、んだけど…。

スタッフの皆さんは、執拗に責めていた。

「どの面下げて帰ってきたんだ！」とか。

「俺達に非協力的だっただろう！」とか。

「負けたからのこのこやってきたのか！」とか…。

サレンさんもサレンさんで反省しているのか、無理に反論せずに頭を下げているだけだった。

どうも一方的すぎて、詳しい状況が掴めなくなっている。

緊急集会なので、私達含めほぼ全員の顔がお披露目になってから、サレンさんの今までの経緯を話してもらう予定だった。

ところが、スタッフさん達の一部が彼女達の顔を見た途端に罵声を発したのだ。

《武人兄ちゃん》がいなくなっからの鬱憤を、今ここで発散しようと企てたみたいで。

「彼らの言い分もわからなくはない。俺達はマル口とビウスの残存兵をうまく引き抜けた方だ。それらがなければ俺達はジリ貧まっしぐらで崩壊していただろう。」

「すごく働いていましたし…。」

アレックスさんの発言に、和希兄ちゃんが同情した。

確かにスタッフの皆さんは黙々と働いている。

私達兄妹は、何度もこの人達に迷惑をかけていた。

身勝手な行動で掻き回された部分は多い。

苦勞ばかりさせて、申し訳ない気持ちが入り込めてくる。

そこまでは、まだいいんだ。

だけど、文句があるんだったら…。

サレンさん達じゃなくて、私達に晴らすべきじゃないの？

やっぱり大人の対応を徹底しないといけないから？

これって、本当にちゃんとした対応なの？

いくら他星のHRや宇宙人達の標的に晒されているからって、非力そうなサレンさん達に罵倒はないだろうに。

私は落ち込み続けている彼女が気掛かりだった。

そんな中、間に入った男がいた。

私達兄妹の後ろで覗き見していたマル口が、前に出てきたのだ。

罵声の嵐に晒される宇宙人一行を、黙って見過ごせなかったのかな。

他にも理由はありそうだけど、私はそう信じた。

「おい。話の流れが読めないんだ。1から詳しく説明しろ。」

マル口の要求は、ぶっきらぼうに聞こえた。

当然、不満をつらつら口に出していたスタッフの人達の神経を逆撫でた。

「部外者は引っ込んでろ！」

「のこのご降参したお前に全容を知る権利はない！」

「俺はここの上層部に聞いているんだ。黙っている。」

マル口は彼らの逆上をシャットアウトさせた。

静寂が戻った。ようやく西条司令が、口を開いた。

「…せっかくの集会だ。改めて説明しよう。」

「待ってください。」

サレンさんから制止の声があがった。

彼女の顔を、久しぶりに見た。

その目元には涙の粒が溢れていて、今にも頬をつたってこぼれ落ちそうになっていた。本当に辛そうだ。

「何を言っている、事情を話さんと、お前達は責められるばかりだぞ！」

「事情は私の口から、もう一度話させてください！」

サレンさんは訝しんでいるジェームズさんに、自身からの説明をしたいと頼んだ。

隣にいた西条司令の耳にも入ってきた。

「わかった。再度証言をお願いする。」

「ありがとうございます！」

サレンさんはお礼を言った。まだ表情に陰りは残っていたけど、ちょっとだけ喜びの感情が入り混じっていた。

サレンさんはその場で立ち上がって、深呼吸をした。

「…では、緊急集会が始まりましたので、私達の数ヶ月間の経緯をお伝えします。」

☆☆☆

気落ちしたリウト王子と共に母星の土星圏ニコンに帰郷した私達は、先代フレアランス王に王子が叱られる姿を目撃しました。

自分が情けないと悟った王子は、再び奮起の決意をします。

先代王とニコンの賢者様からの情報を得て、私達と共に王子は火星圏タレスに旅立ちました。

タレス付近まで到達すると、向こうから突然、攻撃を仕掛けられました。

白い花の群れがビーム兵器に変貌したのです。

しかし、ビームの猛攻撃は急にピタリと止まりました。

その後、強力な電波を私達が乗ってきた宇宙船【フレアランス5】が受信しました。

そのまま翻訳作業に取り掛かりました。

内容は長文でしたが、要求はすぐに把握しました。

後方で付き添って下さった他の数隻のニコンの宇宙船を置いて、【フレアランス5】のみをタレス内に入れるというデータでした。

王子の指示により、こちらからも相手・【レッド研究所】の主クーランに電波の発信でお返ししました。

【フレアランス5】はタレスの出港口から入港し、誘導されるがままに駐艇場で待機させられました。

ここでも要求が提示されました。

【ホーンフレア5 t h】と【ウインドアーチ】、他に4体のロボを連れて星の内部に入れという内容でした。

目的地以外の武力干渉はしないという条件もつきました。

目的地は…【レッド研究所】内に設営された競技場でした。

競技場の手前の大広間で待ち構えていたHRとの交戦を、側近兵のロボ達に任せて。

競技場内は、元々素材の一部だった瓦礫や破片がゴロゴロと転がっていました。

未だ形を残していた観客席の最上部に…王子の因縁相手が座っていました。

この時クーランとは通信で交わしていました。

競技場内は、ラルク・トゥエラーのみでした。

彼は黒い上着のフードで頭部を覆い隠していたので、素顔ははっきりと確認できていません。

しかし、王子が感じ取った気配と、奇襲を仕掛けるように一瞬でロボ形態に変身した事で、正体が判明しました。

賢者様の話をしっかり聞いていた私達は、襲いかかってきた黒いHRが【ブラッドガンナー】だと知っていました。

戦闘の序盤は、相手の動向をしばらく観察していました。

【ホーンフレア5 t h】単体のみではなく、背部に私が搭乗した【ウインドアーチ】を接続して、対処していききました。

距離を離しては詰め寄られて…をループしていくうちに、私達はちょうどいいタイミングを発見しました。

【ウインドアーチ】のビームでリング内に爆発と砂の混じった嵐を起こして、【ホーンフレア5 t h】を観客席の最上端まで登って行かせました。

ここで、私達の奥義が発動できると確信しました。

【ウインドアーチ】との接続を解除して、【ホーンフレア5 t h】の大槍との合体技で、【ブラッドガンナー】、ラルクを落とそうと考えたのです。

これは私達の、油断でした。

戦闘開始の合図がない状態で突撃する敵が、奥義の発動を待ってくれるはずが無いのです。

そう、彼は飛んできました。

【ブラッドガンナー】はお得意の銃撃ではなく、体当たりでぶつかってきました。

私達の機体はバランスを崩して…【ホーンフレア5 t h】は観客席の外側の地面に叩きつけられました。

リュート王子はヘルメットの着用もしてましたし、コックピットのシートも衝撃吸収の素材を使用しております。

しかし王子は頭から血を流し、昏睡状態に陥りました。

私の【ウインドアーチ】も足止めでもと挑みましたが、全くの無駄足でした。

私達とラルクの激闘は、ラルクの勝利となりました。

音声のみの存在だったクーランが、競技場に姿を現しました。

彼は《メス》の私を、連れ去ろうとしました。

私はもう、泣き叫ぶのをやめていました。

自分を導いた王子が意識を失った時、どうする事もできませんでした。

【ウインドアーチ】が脱出不能の地割れで出来た窪みにはまり、抜け出せませんでした。

このまま、王子は絶命し、私は隷属となりクーランの手に落ちる…。そう観念した時でした。

不気味に笑いながら増産計画を企んでいたクーランでしたが、彼の口は思わぬ形で閉ざされました。

彼への口封じは、身体に穴を開ける事で成し遂げられました。

競技場内にはクーランと私と王子と、ラルクしかいませんでした。

【ウインドアーチ】は窪みにはまって動けません。

【ホーンフレア5 t h】も軽く地面に埋め込まれ、本人も意識を失っているのだから立っていません。

開けられた穴は、綺麗な円を描いていました。

【ホーンフレア5 t h】の槍攻撃では、器用に開けられません。

だとすれば、クーランに手を下したのは1人しかいません。

ラルクが、【ブラッドガンナー】の姿で、右手に持った銃で仕留めたのです。

私は驚きを隠せませんでした。

でも、彼は他にも、私達への手解きをして下さりました。

研究所内で製造された掃除用ロボでの、私達の機体の掘り起こし作業。

もう1つは、『地球に行け』という合図でした。

彼は戦闘の始めから終わりまで無言でした。

ですが、星を出るまでの経路まで教えて下さったのです。

ここまで尽くして下さいる彼に、私は出る事を誘いました。

黒いロボは断りました。

私の機体を地面から剥がされた【ホーンフレア5 t h】と接続し、静かにタレスを後にしました。

☆☆☆

「タレスを脱出した時の宇宙は、無惨な姿へと変わっていました。王子と途中まで共に参った側近兵の生存者は1人だけ。宇宙船に至っては…駐艇場で待機していた【フレアランス5】のみ。他のニコンの宇宙船は…見事に破壊されて、黒くて固い浮遊物と化してしまいました…。」

「例の王子はどうなった？」

「今も、【フレアランス5】の医務室にて眠っています。命は取り留めましたが、意識が回復しません。」

そうか…とマル口は言った。

たった3、4ヶ月の間で、宇宙の、特に火星圏の星でここまでの動乱があったなんて。

私は衝撃を受けていた。

リュート王子とサレンさんは、ラルク…武人兄ちゃんであろう人に戦いを挑んだんだ。

結果は敗北だったけど、ニコンの王様の励ましで挑戦する気になったのだから、ある意味すごい事をしたんだと思う。

私は、話した後に座り込んだサレンさんと、未だ目が覚めないリュート王子を讃えたい。

身の危険に晒されかけたサレンさんを最後に救った、武人兄ちゃんにも。

武人兄ちゃんは自分の出身地の〔レッド研究所〕の刺客として、身を置いてしまった。

でも、心だけは、クーランの魔の手に染まっていない。

サレンさんの話から、ふんわりと伝わってきた。

少しだけ、ホッとした。

マル口は『自分の手でトドメを刺せ』と言った。

ただし、それは武人兄ちゃんが心変わりした時だ。

まだ、優しい心が残っているんだったら、話さえすれば、救える余地はあるんだ。

希望はある。そう決めつけていたのだけど…。

〔ラストコア〕の緊急集会は、人が多くなる。

人は多くなると、騒がしさが増してくる。

人には、口という発声機能が存在するから。

サレンさんが再度丁寧に説明しているのに。

〔ラストコア〕のスタッフさんの一部に、納得のいかない人間がいた。

その人達は…彼女に対して口酸っぱく言い放ったのだ。

怒りの表情を全く変えずに。

「同じ事何回も言っても、負けたから逃げたとしか考えられないぞ！」

「黒川さんを連れ出す機会があったのに…強引に引っ張るとかあっただろう！」

「そもそも黒川さんに敵意剥き出ししていたのは、アンタらだろうが！自分達の尻は自ら拭え！」

最後に言った人に至っては、汚い言葉も発していた。

ジェームズさんが最初から、静粛の指示を出しているのに。

事務局長が逐一ストップをかけまくっている間に、サレンさんが口を開いた。

「そうです。ラルク…黒川さんに私達は勝手に挑みました。黒川さんの件については、完全に私達の責任です。」

「だったらこのこと地球に降りてくるな！」

「恥さらしの程度を広げているのがわからないのか？」

そうだそうだ、とスタッフさん達の中で騒然としていた。

やっぱり来てすぐに帰ってしまったのが、いけなかったのだろうか？

周りの怒りのエンジンが着火しようとした所で、私達の側にいた白いHRも、苛立ちを隠せなくなっていた。

マル口はストッパー役のジェームズさんに訴えた。

「早く黙らせろ！煩わしいんだ！」

「今やってる！お前達！静かにしろ！」

事務局長は声を張り上げた。

流石の迫力に、騒いでいたスタッフの皆さんの口は閉じられた。

とうとう、西条司令がサレンさん達から得たい意図を聞き出した。

「君達は何を望んでいる？電波の発信なしに地球に降りたのだ、相当急を要しているそうだが。」

西条司令も険しい顔つきをしていた。

この人やジェームズさんとアレックスさんは、今は板挟み状態だ。

サレンさんの声にも、スタッフの皆さんの声にも傾けないといけないのだから。

スタッフさん達から不満や不平を浴びせられるサレンさん。

涙目ながらも、彼女は自分達の正直な願望を告げた。

「貴方方に協力をしたいです。申し上げられる立場ではありませんが、今度は途中で帰りません。嘘をつかないよう、約束します。」

泣き顔の彼女の眼光は、消えていなかった。

その訴えは、真剣そのものである。

向かい合っていたトップ格の3人は、静かに相槌を打つだけだった。

この人達はまだ納得している方だ。

すぐ口に出す一部のスタッフさんと比べて、堪えている。

裏切られた件については文句を言いたいけど、サレンさんの気持ちも汲んでおきたいから。

サレンさんが本音を言って、司令達が驚きながらも頷いているのに。

まだ、刃向かう人は残っていた。

「言ったな！お前！俺は覚えているからな！気落ちしている男の側にくっついて、俺達を睨みつけたのを！」

「え？いつだよそれ？」

「黒川さんが連れ去られた後のミーティングだ！」

サレンさん…？そんな事していたの？

武人兄ちゃんがいなくなった時に、[ラストコア]では緊急のミーティングが開かれた。

気が沈んでいた私は、当時の自室のベッドにて、掛け布に包まっていた。

聞いていたのは話だけで、統制制御室の全容まで見ていない。

一旦帰ったとしか、聞いていない。

また、どよめきが広がった。

その場その場でコロコロ変わる女だ、とサレンさんを否定する声が上がった。

ビウスの残存兵の受け入れも渋々だったとマル口から聞かされていたけど、今回はその倍の拒絶反応が出ている。

これはもう、サレンさんを仲間に加えるのは絶望的かなあ…。

ほとんど口を出さずに一連の流れを傍聴していた私達兄妹も、ここまでの批難の声があれば、諦めるしかなかった。

不穏な空気の中、1人、サレンさんのすぐ側に歩み寄った男がいた。

最初からずっとしかめた面をしていたマル口だ。

彼は西条司令の左隣にいるアレックスさんと前後を入れ替えた。

後ろに下げられたアレックスさんはびっくりした。

でも、マル口は技術局長の仰天した様子にも目もくれなかった。

彼が他星人の女性の前に立ったのには、目的があった。

それは、彼の一言で正体が判明した。

「王子の側近。ちょっと確認したい点があるんだが、まだ話せるか？」

「え…？」

「オイ！ちんちくりんのHR！お前に権利なんてねえぞ！」

「外野は黙ってろ！」

マル口、かなり圧の強い怒鳴り声を発した。

馬鹿にした表現を使った男性のスタッフさんをはじめ、室内全体がシンと静まった。

これで割込の心配はないと確信したマル口は、サレンさんに尋ねた。

「お前達は、どこまで提供できる？『モノ』でなくとも構わない。侵攻した時に目にした情報の1つや2つ、あるだろう？クーランが消えた事実も、有力な情報源だ。些細な出来事でもいいぞ。俺達は《ラルク》のいる星の現況を知りたいんだ。今後の戦略に、活かせるヒントがあれば…。」

人って、環境次第でここまで変わるのかなあ。

私はサレンさんに優しくしたマル口に驚いていた。

彼は宇宙人扱いだから、生物って事になるんだけど。

非難の声を浴びせられて、サレンさんは思うように進言ができなかった。

それが今、マル口の心遣いによって、気持ちが解れていったようだ。

うるうるとした悲哀の表情から、彼女は涙を拭ってキリッと元に戻したから。

「『モノ』も用意しております。地球降下前、ニコンの民の他、土星圏の有志達にも声を掛けました。現在、木星圏にて待機中です。〔フレアランス5〕から回線の接続が可能ですので、もしもの対応時には…。」

「現段階では降りてきた宇宙船1隻のみが戦力に加えるという解釈でいいな。」

「〔フレアランス5〕は稼働できます。王子は…。」

「寝てる者に無茶は言わん。宇宙船の役割を果たせるならそれで結構だ。」

「ありがとうございます。」

マル口に対してサレンさんはお礼を言った。

まだ、サレンさんには火星圏タレスの現状についての『情報』を話してもらわないといけない。

彼女も話が残っているのはわかっていた。

「『情報』につきましては、先述の通りクーランは落ちました。あのやられ様では、彼の復活はありえません。胴体にぽっかりと穴が開きましたので。」

「そりゃあ無理だな…。」

ジェームズさんの小声だった。

サレンさんは気にせずに、ありったけの『情報』を私達に公表した。

「ラルクは、黒川さんは完全にクーランの手に落ちていなかった事。出港口には多数の花を模した光線兵器が備わってましたが、ほぼ大破した事。他には…。」

サレンさんは火星圏タレスで入手した『情報』を次々と紹介していった。

タレス内の〔レッド研究所〕には現在未使用の〔搬入口〕という裏口ルートが存在する事。

裏口ルートだとすぐに外宇宙に出やすい事。

ラルク以外にもHRがたくさん潜んでいた等…。

かなりの量を把握していた。

彼女達は戦闘に負けて、地球に降りてきたのは事実だ。

だけど、同時にこれからの対策に活かせるヒントを収獲してくれた。

これはこれで、すごいんだ。

私達兄妹、西条司令達上官の3名と志願兵の皆さんは、黙って感心していたのに。

口うるさい人は、いつまでもそのままだった。

「ただ単に中に入れるって事だろ！それだけじゃ意味がないぞ！」

「結局HRがいるんじゃあ、どっちにしたって一緒だよ！」

「やっぱりお前達は余計な世話をしてくれたな！意思に反してでも連れ戻すべきだ！」

〔ラストコア〕のスタッフさん達から喧騒の声が上がった。

中には帰れ！と叫ぶ人も。

一体どうしてこんなに、不満の声が出るのか、私にはわからなかった。サレンさん達がきっぱり告げて母星に帰郷したのはいけなかったのかな？

それでも…今こうして激闘の後に地球に降りて、協力したいと請うてきている。

もう、許してあげてもいいんじゃないの？

静かにしてた側は困惑していた。

マル口の堪忍袋の緒が切れた。

醜さを感じさせる表現を、彼は使っていた。

「口先だけだな、原始の猿どもが。よく恨みを買われなかったもんだ。」

悪意ある発言を、スタッフの皆さんは聞いてしまった。

瞬間、彼らはピタッと罵倒の嵐を止めた。

ここから、マル口の逆転劇が始まった。

「いいか、この他星人共は敗北したが、わざわざ本拠地まで乗り込んで激闘を繰り広げたんだ。HRではない一般の宇宙の生物が勇猛果敢に挑んだ実績を、俺は讃えたい。」

マル口はここで発言を区切った。

彼は文句だらけのスタッフさん達に対して、軽蔑の眼差しを向けた。

やはり彼はHRだ。

30代なのに見た目も態度も子供っぽいところがあるマル口だけど、今の立ち振る舞いには恐怖を覚えた。

「それに比べ、お前達は何だ？ 後ろの研究者共とガキに身を委ねているだけのすねかじりの分際で、口だけは達者。情けないと思わないか？ ガキに兵器を乗せて、このクソ臆病者共が。」

この白くて小さなHRの言葉は汚かった。

沸点の低い人だったら、直接彼に逆上するだろう。

でも、集まっている統制制御室内も、各「ラストコア」の基地のフロアと繋がっている映像も…音を立てなかった。

マルロから直に厳しい指摘を受けてしまって、全員が沈黙してしまった。

ただ、1人だけがあの…と何うように手をあげた。

彼女は正規軍から連れてこられた志願兵のメンバーだった。

「こちらの基地に来て間もない私が言うのもなんですが…。」

「何だ？」

マルロはスタッフさんから志願兵の女性に視線を逸らした。

背筋が凍りそうな目つきをしていた。

女性はビクッと身体を震わせながらも耐えて、マルロや他の皆に告げた。

「ここはマルロさんの言う通り、種族問わずに協力すべきだと思います…。こちらの女性と皆さんの間に何があったのか、私達は存じておりません。ですが、嘘をつくような人ではなさそうに見受けられます。」

自信がついたのか、彼女は発言をやめなかった。

「私達は正規軍内の閲覧室に送られてきた小説本で、『宇宙を目指す道のり』に感動しました。「ラストコア」が最も掲げていたのは《宇宙進出》だと、フェリー少佐から聞かされてます。今、宇宙から降りてきた人を救わないでどうするんですか？」

女性の後ろにいた同じ志願兵の男性も申し出た。

「「ラストコア」のスタッフの一部は、復帰が絶望視される程の罪を犯した人もいると知りました。あなた方も、黒川さんやジェームズ少佐、アレックスさんや西条司令に救われた過去をお持ちでしょう？それを、忘れたのですか？」

まだ加入したばかりの志願兵の男女2人。

でも、彼らの言い分は立派な意見だった。

眼差しも、真剣そのもの。

ほとんどの人が図星を言い当てられて、俯いてしまった。

室内と映像は再び、静まり返った。

もう反乱分子が現れないと悟ったマル口は、西条司令に権限を委ねた。

「とりえず洗いざらい話してもらっただろう。どうするかの処分は、トップのお前が下せ。」

言われた側の西条司令の表情は、あまり変化がなかった。

白いHRのほとぼりは冷めてきたが、険しい顔の彼を前にしてまだ懲りない人がいた。

その人は前に乗り出して、アレックスさんに頼んだ。

「アレックスさん！こんないい加減な奴、とっとと吹き飛ばし…」

頼み事は全部言い切れなかった。

マル口が懲りない男性スタッフさんに対して、獲物を仕留めんばかりのキツイ視線を向けた。

男性はヒッ！と悲鳴をあげて、他のスタッフさんの身体に隠れた。

これで、刃向かう人間はゼロになった。

サレンさん、リュート王子達の今後の処遇を決める時が来た。

西条司令はまず、目の前に座ったままのライトグリーンの髪色の女性に、約束事を交わした。

「サレン・D・フェルテ、並びにリュート・フレアランス5thに告げる。もう2度と、中途半端な帰還を実行しないな？」

サレンさんははい、と肯定の意を口で示した。

司令の口頭による約束事は、まだ続いた。

「我々は近々、『宇宙進出』という重大な業務に取り掛かる。抜け出したくても無理だぞ？それでも、最後まで共に歩むのだな？」

「もちろんです。その言葉に、嘘偽りはございません。」

サレンさんは真面目に、西条司令の目を見つめていた。

真摯な姿勢が、[ラストコア]のトップにひしひしと伝わった。

彼は最高責任者としての威厳を、取り戻した。

「フレアランス家の王子一行の仲間入りを認める。各々の募る思いはあるだろうが、我々の目的は《宇宙進出》の再挑戦だ。我々地球人には、外宇宙についての知識や技術、必要物資が足りていない。志を共にする他星人達と協力し、平和を脅かす宇宙の権力者に打ち勝たねばならない。もう、些細な争いはやめよう。」

西条司令は遅い演説を行った。

各自、誰もが反論せず、大声で肯定の返事をした。

数分後、緊急集会は終わった。

この日は各自、自分の持ち場に戻って仕事した。

私達兄妹も訓練の為に、志願兵と残存兵の皆さんと一緒に統制制御室を出た。

サレンさんはまだ、司令達との打ち合わせが残っていた。

《宇宙進出》。

それを最後に、私達兄妹は[ラストコア]を抜ける予定だ。

役者はまだまだ不揃いの状態。

だけど、宇宙を旅した経験のある人達がやってきた事で、可能性は開けた。

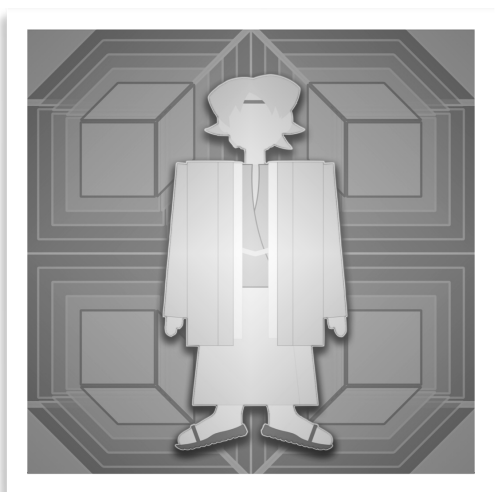
もうすぐ、もうすぐなんだ。

《武人兄ちゃん》の再会まで。

私はまだ残り続ける。まだ、粘り続ける。

公園で助けてくれた、黒髪の男性と会うまでは…。

14・解放の日



ゴホッ、ゴホッ、ゴホッ。

ラルクは数回咳き込んだ。

同時に、司令室奥の正面モニター前のパネルに、赤い液体がぶちまけられた。

彼の口からも、同じ液体が溢れ出ている。

液体の正体は、調べなくても自分でわかっていた。

戸惑いもせず、ラルクは乾いた布で液体を拭き取った。

土星圏ニコンのフレアランス家の次期王との決着をつけた後、ラルクの体内は蝕まれていった。

連れて行かれ、強化手術を施された後に、クーランの手で劇薬を注入させられた。

その効用は、ラルクが昔従っていた権力者の意志に背くと、微生物が体内の内臓などを食べていく仕組みになっている。

蝕まれて次第に身体が弱くなっていても、ラルクは後悔しなかった。

後悔する余裕もなかった。

彼はリユート王子との決着に際して、困った事が1つあった。

強化手術で失われた、発声機能。

戦闘前も最中も、勝利した後も、ラルクは一言も喋らなかった。

いや、喋れないのだ。

H Rではない高貴な《オス》が懸命に駆ったロボに対して、恐怖を植え付けてしまった。

ラルクは、無言の戦闘ばかりではダメだと感じた。

彼が今、司令室のモニターとパネルに苦戦している。

文字の刻印だった。

クーランが年中引きこもっていた部屋から、1台の装置を持ち出した。

地球にあるA4サイズのタブレット端末。

端末をスピーカーと接続して、スピーカーから音声が行れる構造になっている。

端末の中に、音声のデータが必要だ。

だから声の出せないラルクは、文字の刻印に集中していた。

〔レッド研究所〕には、ラルク以外のHRも残っている。

研究所内部と付近の見張りを任せ、彼だけが司令室に来ていた。

彼も決して、監視を怠ってはいない。

モニターの表示には、文字の入力画面の他、タレス付近の外宇宙の現在も映し出されていた。

小さな星々の輝きが美しかった黒の景色に、大きなゴミが散乱していた。

元々それは、宇宙船だった。

（手を出すな、と目配せしたんやけどな…。アイツは話を聞かへんから無理だったか。）

ラルクは赤い液体が吐かれる口を押さえながら、王子達との激闘でクーランがやらした行為を振り返っていた。

とは言え、ボロボロの宇宙船が散らばった今後悔しても、後の祭りであった。

失態の追及は諦めた。

そもそもこのフード付きの黒いジャケットを羽織った《オス》は、自分を使役する権力者に手を掛けたのだ。

命を落とした中年の《オス》に忠告の意を示すのはできなかった。

もう、昔の過ちに不満が募っても仕方がない。

ラルクはそう考えて、音声化するのに文字の刻印に集中した。

（火星は地球に近い惑星や。火星圏の俺達まで、〔ラストコア〕は来てもらわんと、《宇宙進出》の意味があれへん。王子達には僅かな支援でも大きな原動力となると思って、飛ばしたんや。）

ラルクは言葉を発せない分、頭の中の思考がぎっしりと詰まっている状態になっていた。

（お願いや、俺に挑んでこい。今のタレスは俺が権力者や。俺を倒せば、地球人に強靱な心が持てるようになるんや。生きたいんやったら、自分が強くなるしかないんや…。）

ラルクが刻印した文字列は、横書きで10行分の量まで拡大していた。

まだ、ラルクはパネルの操作をやめなかった。

☆☆☆

サレンさん達の急な地球降下以降、[ラストコア]内はタイトなスケジュールが組まれるようになった。

皆、バタバタと走る癖がついていた。

アレックスさんとは【パステージュ】の調整もあってか、何度か顔を合わせている。

西条司令とジェームズさんとは、会わない日々が続いた。

[ラストコア]外の地球のお偉いさんに頭を下げる回数が増えたから。宇宙開発を主とする機関や企業と面会するアレックスさんがそう言った。

逆に、『宇宙進出』実現の9月中旬までに、マルロとよく行動を共にするようになった。

数ヶ月前まで陰険な関係だった頃から、想像できないくらいに。

『宇宙進出』のお勉強に時間を割くので、訓練の時間は少し縮小された。

でも、マルロは私達につきっきりでサポートしてくれた。

やっぱり宇宙を飛び回った経験のあるHR。

彼はちょっとした小話まで教えてくれた。

「ラストコア」の今の状況下を見ると、呑気な事はしてられないけど。常に緊張感を張り詰めすぎでは、かえって身体への負担がかかる。マルコ本人にそんなつもりはないんだろうけど、彼なりの気遣いと私は認識した。

実現の時までは、宇宙への環境で生き延びるための体調管理が徹底された。時間は、否応なしに進む。

私達の宇宙への旅立ちの日がやってきた。

白い光がたくさん散らばっている黒い空間へ行くには、ロケットが必要だ。地球に残る人達以外は全員、数機のロケットに乗り込んだ。

遠目から眺めると、中心から下の部分が太い目のロケットとしか捉えにくい。実は中に、宇宙船が搭載されている。

大気圏突破後、ブースター等が外される。

発射時に付属されていた部品が外されると、丸みを帯びた宇宙船は縦から横へと変えられる。

乗組員の私達は指示があるまではシートに座って固定されているので、動けない状態だ。

シート部分のみを固定したまま、宇宙船を90度回転するのだ。

回転後、少し位置をずらしてから、指示が出る。

指示が出てようやく、私達は宇宙船内を自由に歩き回れる。

とは言っても、私達兄妹の他、志願兵の皆さんにビウスの残存兵達は、戦闘の前線に立つ身。

動力室など作業を担う人達のお邪魔はできない他、遊んだりとかはできなかった。

戦闘に備えて、身体を休めておくとアレックスさんに言われた。

宇宙船はリュート王子の側近が指揮を取る【ホーンフレア5 t h】、残存兵と志願兵の皆さんが乗る【トールメイス・サウ】3隻と…。

西条司令、アレックスさんとマルロ、サレンさんと私達兄妹が乗り込んだ【天海号・式式（にしき）】の合わせて5隻が宇宙に出た。

リュート王子は目覚めておらず、戦力にならなかった。

『宇宙進出』と彼女達にとって2度目のタレスへの出向に必ず参加するのを引き換えに、王子は【ラストコア】臨時支部で療養生活をしていた。

まだ眠っているので、点滴による栄養補給がメインだった。

『休め』と言われて、警報のサイレンがない今はゆっくりしているんだけど…。

目的地に辿り着くまでは、退屈だった。

仮眠をとる事も視野に入れてはいたけど、よほど疲れていない限りは横にならなかつた。

もしもの時に起き上がるとだるさを感じてしまうから。

なので私は、【天海号・式式】の通路に備え付けられた折り畳み式のベンチに座っていた。

通路には窓が存在するけど、本物の窓ではない。

宇宙船に内蔵されたカメラの映像である。

なので多少、画面にノイズが現れてきている。

でも、武人兄ちゃんがいる火星圏タレスに到着する為に宇宙船が飛んでいるから。

ちょっと気分転換に静かな宇宙を眺めるだけなら、ノイズは問題なかった。

ベンチに座って果てしない暗黒と所々に光る星々を眺めているのは、私だけではない。

左にマルロが座っていた。

彼は初対面の時から、自分の格好が変わっていない。

せいぜい袴風の上着の中に着込んでいるのが男性用の和の着物に変わっていただけ。

彼が怯える黒い装置はそのままだった。

2人の兄も来る予定だったけど、なぜかマル口に気を遣って、別の通路を探していた。

宇宙船の周りはどこも黒一面の宇宙しか広がってないし、視点を変えても意味がなさそうだけど。

《転送装置》はインナーの中にしまい込んでいるので、緊急時に合流すればいいと思って、気に留めなかった。

別れ際にマル口はきょんとしていたけど。

2人だけの時間。

会話のキャッチボールはほぼ1通りしかないので、私もマル口も口が動くと考えていた。

思いの外、座り始めは沈黙が漂っていた。

ただ、沈黙が長続きしてもしんどい。

マル口が先に口を開くのは、普通の事だった。

「いいのか、兄共と別れて。ちゃんと生還できる保障はないんだぞ？」

まだ、気にしているのね。兄達の行動を。

私は慌てる様子もなく、普段通りに答えた。

「大丈夫だよ。頑張って生き延びればいいだけの話だし。」

「根拠のない理屈だな。」

「根性って知ってる？最終的にそれが勝るのよ。」

まあ、なんて私に似合わない言葉なんでしょう。

でも実際、これまで何とかなってきたんだ。

存続の危機、とか言われた「ラストコア」だけど、宇宙へ旅立っている今日まで持ち堪えられた。

マル口の最初の襲撃。

ビウスの残存兵達の侵攻未遂。

これらを私達は、頑張って踏ん張った。

耐え凌いだから、今宇宙に出てきて、武人兄ちゃんに会いに行けるんだ。

「根性、か。HRには無縁の言葉だろうな。」

「果たしてそうかしら。あなたはのこのこと生きているじゃない。図太い神経って言われそうだけど、立派な根性よ。」

「お前がそう言うなら、そうだろうな。」

マル口は来た時から、全然笑わなかった。

ムスッとした不機嫌な表情ばかり、私達の前に出していた。

現在、彼の口は、笑みを表すように横に伸びていた。

正直、珍しいと私は思っていた。

もしかしたら、彼も最後が近いのかもしれない。

そこまでは流石に、考えすぎかなあ。

マル口も私も、基本的に口数が少ないと自覚している。

たった2人きりだと、静寂さが余計に増してくる。

心を落ち着かせる為なのか、「天海号・式」の通路内にヒーリングミュージックが流れているだけ。

時間の経過は止まらないのに、何らかのアクションが起こせないでいた。

それはかなりまずい状況、と悟ったのはマル口だった。

彼は自分の顔を少し私に向けてから、口を開いたのである。

「なあ、聞いてくれないか？」

この時の第一声が、変だと感じた。

だから私は言葉で返した。

「今話を聞いているわよ？」

「違う、俺が言いたいのは別の用件だ。」

なるほど、話題についてなんだ。それならマル口が言うのも納得だ。

何の話がしたいのだろう？

私は心の中でマル口に発言権を譲った。

彼は自然と、口を開いた。

「お前、任務が終わったらどうするんだ？地球に降下した後の前提ではあるが…。」

…なんだ、そんな話なのね。

ありきたりの内容になるかもしれないけど、一応伝えておこうかな。

「帰ったら、普通に暮らすよ。【ラストコア】での延長後の期間も9月末だったし。散々わがまま言ってしまったから、これ以上無理強いはいできないわ。」

たとえ退屈な日常を送るとしても、悔いはないんだ。

そうか、とマル口は理解を示した。

また、ぎこちない空気が漂った。

何でだろう。『普通に暮らす』のは、所謂地球人としての日常生活を送る事。

もちろん、嫌いな『学校』という学舎にもちゃんと通って、立派な大人に成長する事。

これはマル口も、スタッフのお姉さんも素晴らしいと言っていた。

どんな人間でも平等に知識を吸収できるシステムだって、マル口自身が評価しているのに。

なぜ、下を向くのだろう？

なぜ、暗い雰囲気を出すのだろう？

マルロ、あなたはむしろ喜ぶべき立場だったんじゃないの？

私が抱いたモヤモヤ感は、再び開かれた彼の口から解消された。

「あの研究者に、お前を永久に残らせるよう説得しようか？熱心に取り組んでいたんだろう？今は今回限りだが、将来はあの基地からどこでも宇宙へ旅立てる日が来る。学舎以上の、広大な世界を見て回りたいとか…思わないか？」

私はマルロを見て、両目を大きく開いていた。

たった数ヶ月間で、私の心情を汲めるようになったなんて…。

どういう風の吹き回しなのか、見当がつかないよ。

理由はどうであれ、私の事を考えてくれて、嬉しいのは嬉しい。

だけど、私は…。

私は冒険というスケールの大きな体験までは、わざわざやりたいとまでは思っていない。

もちろん最初は、学校に通うという《普通》がとても苦痛だった。

だから、[ラストコア]での《特別》な経験が楽しく感じられた。

でも、それは、今改めて考えると…違うとわかったんだ。

私はただ…。

「そこまで話しつけなくてもいいわ。私はね、会いたい人の為に宇宙に来てるから。」

「それは、あのラルクの事か？」

マルロが寂しそうに聞いてきた。

「あなたがそう呼ぶのならそれでいいわ。そう、私は宇宙へ出て、武人兄ちゃんと再会でできれば、自分の目標は達成できるんだ。もう再会以上の経験はいらない。これが終わったら、素直に[ラストコア]を出るよ。」

「…ならば、これ以上は何も言わん。」

マル口は自分の話を止めた。

止める時、少しの沈黙の間が出来ていた。

やっぱり、仲間達と離れ離れになっているし、相当寂しさを感じているんだろう。

私が継続的なスタッフさんになっていたら、彼を慰めてあげる事だってできただろう。

でも、私はなれない。

この期間限定のパイロットだって、武人兄ちゃんが主導となって決まった事なんだ。

アレックスさん達は苦渋の表情をしていた。

なので、私達兄妹は本当に特別な立場である。

ひょっとすると、自分の孤独感を紛らわすのに、さっきの提案をしたのかなあ？

そう考えると、可愛い一面あるのね…って思ってしまう。

実際、彼を仲間達と引き剥がしたのは私達【ラストコア】側だし、無理もない部分もあるんだけど。

ちょっぴり気まずそうな雰囲気が漂う中、通路の壁の窓代わりの映像に、突如四角い枠が割り込んできた。

枠の中にアレックスさんがいた。

想像通り、彼からの通信回線だった。

『そろそろタレスに着くぞ。一度ブリッジに集まってくれ。』

「何故だ？パイロットはコックピット内に待機しているのがベストなんじゃないのか？」

『確かに前回の察しはわかるが…ちょっと見てもらいたくてな。』

見てもらいたい物があるの？

一体、何だろう…？

『お前達2人が通路で休めているのは知っている。壁際に…いくらか実態が舞い込んできているはずだ。』

すなわち、今の映像でも確認できるの…？

私は壁際の至近距離に立って、そこに触れた。

タッチパネルが存在するので、何回かポチポチ押してみた。

パネルの操作は星々の紹介などの情報を開示する仕組みとなっていた。

今は火星圏。地球産のロケットでは半年以上かかる所なのに…。

〔天海号・式〕並びに他の宇宙船には特殊なエンジンが積まれており、かなりの推進力を発揮できるそうで。

だから、飛びだって2週間以上あれば火星圏に行けるのだ。

《MARS ○○》の表記がいくつかあって、もちろん私達の目指す星の名前もあった。

《MARS TELLESS》。

「フン、『テレス』と名乗っておけばいいのに、妙なこだわりをしている。」

マルロが呆れた物言いをした。何か事情を知っているようにも聞こえた。

「どういう意味？」

私は反応するように聞いていた。

「根拠のない権力の誇示だろうな。『E』より『A』の方が上だとか述べて、な。」

「ふーん。」

それは意味不明な主張だね。

今までで絶対必要のない知識。

ちょっとした雑学を学んだ気になったし、これはこれで悪くはなかった。

現時点で優先するのは。

『とにかくこれからの事も少し話すから、ブリッジに来てくれ。【バスターユ】に乗る時は、《転送装置》を使って移動すれば良い。未衣子の兄達にも、声は掛けている。』

「わかりました。すぐに行きます。」

そうアレックスさんに伝えて、私は回線を切った。

窓代わりの壁際の映像は、静かな外宇宙の景色に戻った。

「行こうマル口。もうすぐタレスの中に入れるから。」

「どっちにしろ、俺は装置が外せん。行くのはお前達と、他の宇宙船の一部の乗組員達だろう。俺はブリッジに残って、横槍入れる役立たずだぞ？」

「それでも、助かるわ。」

ありがとう、とマル口にお礼を添えておいた。

彼の反応はだんまりだった。

でもただの沈黙ではない。

ウツと声を漏らして頬を赤面させていた。

要するに、照れているんだ。

勇希兄ちゃんなら揶揄いそうだけど、私は違う。

フッフ、と笑っただけで、私はさっさとブリッジ方面へ歩いた。

★★★

ブリッジには西条司令とアレックスさん、サレンさんと2人の兄がいた。

私とマル口で最後だった。

ブリッジは宇宙船の司令塔である。

正面奥から、モニターが巨大化して広がっていた。

室内の中心の位置まで張り巡らされていて、外宇宙と割り込んだ通信映像で埋め尽くされている。

〔ラストコア〕の統制制御室とは違うようで、似たような場所。

大気圏を抜けて宇宙に出た時にブリッジに足を踏み入れているから、室内で驚くものはなかった。

だけど、2人の兄は、口をポカンと開けていた。

目もぼっちり開いていて、尚且つ全身も固まった状態を維持したままだった。

2人はブリッジ正面奥のモニターを凝視していた。

外宇宙の現在の様子が流れてくる巨大モニター画面。

真っ正面には真っ黒な星、火星圏タレスの丸い外観が見える。

でも、タレスに近づいてきているのに、モニターは低画質の映像のように鮮明さに欠けていた。

これはカメラが悪い、のではない。

逆に、宇宙に散らばっている岩石とかも、ちゃんと録っている。

岩石とかに混じった、宇宙船の残骸も。

きっと、兄達が驚いたのは、自分達が目にした宇宙の光景だろう。

私とマルロも、通路の映像にて発見したんだ。

紫色の合金製の歪な形をした板が、宇宙で彷徨っていたのを。

紫。あの時まで鮮やかさが残っていた。

ならば、まだあの板の表面だけは、綺麗な状態なんだ。

綺麗な宇宙船。

最近まで稼働されていた分もそうだろう。

身近な例が、〔天海号・式式〕のブリッジに1人いる。

土星圏ニコンから来たサレンさん。

彼女がタレスを訪れるのは、2度目。

リュート王子の側近兵が指揮をとる【フレアランス5】も、紫を帯びた宇宙船だった。

サレンさん達が最初にやって来た時は、星の前で過酷な戦闘が繰り広げられていたんだ…。

残骸の数は、かなりの量だし。

地球の次に太陽から離れた惑星の圏内で、大規模で熾烈な争いが起きていた。

「多くの仲間達が、散っていきました…。」

サレンさんが細々と言った。

その声は、私達の耳にすんなりと入った。

まだ誰かに、聞いてほしいという願望を残しているんだろう。

「リュート王子はクーランに、他のニコンの宇宙船には手を出すな、とタレスに電波を発信しました。」

「そのクーランって人が、約束を守らずに…。」

和希兄ちゃんの言葉に、サレンさんは頷いた。

「約束破るとか、とんでもねえ奴じゃねえか！」

「だがな。タレスを訪れたのはコイツらの判断で、クーラン達はいわば受け身の立場だ。守りの姿勢を取るのには致し方ない部分もあるぞ？」

勇希兄ちゃんがキャンキャン騒いだけど、マルロに冷静に突っ込まれた。

これに関してはサレンさんは何も言い返せずに、しょんぼりするだけだった。

勇希兄ちゃんは、まだ納得できていなかった。

「でもよ！お願いしてるんだったら、約束は絶対守るぜ！」

「全員が寛容な心の持ち主じゃないぞ？」

下の兄、また白い少年のようなHRに突っ込まれる。

勇希兄ちゃんはウツと漏らしただけで、いつもの強気の反撃はなかった。

対して強気なのは、マルロだった。

「俺ですら、お前達に馴染むのに苦労した。間近の研究者にいじ…説明されて、逃亡計画を諦めたんだ。和解には、時間を要するんだ。」

マル口の発言に、まだアレックスさんに苦手意識あるのね…と私は感じ取っていた。

和解に困難がつきものなのは、私もそうだと思っている。

マル口、ピウスの残存兵、志願兵の皆さんは本当に理解のある人達なんだ。

サレンさん達を受け入れる時、[ラストコア]のスタッフさん達は荒れていた。

新しい誰かを、問題を起こした誰かを受け入れるというのは、心を広く持つのが必要なんだ。

サレンさんの場合は後者だろうな、と思う。

私としては、リュート王子もあの時の私同様、大分気落ちしていたから…休ませようとサレンさんは考えていたと想像している。

その行動が、怒涛の波乱を生んだ。

《宇宙進出》前に、サレンさんから今までの経緯を全て聞いた。

リュート王子の決意表明で、多くのニコンの兵隊さん達が王子について行った。

その結果、王子も負傷したけど、彼らの命も落としてしまった。

タレス前の荒廃しきった静寂な外宇宙の姿が、哀しみを表現していた。

ここで、アレックスさんが言った。

「今、外部からの反応はないか？」

ブリッジにいるスタッフさんへの確認だった。

これが何を意図して聞いたのか、最初はすぐにわからなかった。

確認の理由は、アレックスさんの口から告げられた。

「乗り込む前に、黙祷の時間を設けよう。」

黙祷。

失われた人々に対して、黙って祈りを捧げる事。

地球では大小の規模に関わらず、特定の日に毎年行われていた。

もちろん、私達兄妹も黙祷の儀式に参加した経験があるから、知っている。

「…いいのか？今は静かでも、突然襲いかかる場合もあるんだぞ？」

「1分だけあればいいさ。」

マルロは多少の不安を口にしたが、アレックスさんは必要時間を伝えた。

彼の反論は、これ以降なかった。

西条司令はアレックスさんの意を汲み取り、大きな声でブリッジのスタッフさんに指示を出した。

「これから儀式を行う。当宇宙船内全域と、他の宇宙船に連絡を入れるんだ。」

「わかりました。」

オペレーターとして務めていたスタッフさんが答えた。

何も起こらない静寂な空間だから、連絡の通信はすぐに回った。

ブリッジ以外にいる全員が、外宇宙の映るモニターの前に立った。

黙祷の合図は、西条司令の響き渡る号令で始まった。

ポーンとかの音はない。

ほぼ全員が、自分の頭を下に向けていた。

悲しい表情を示す人や、目を瞑って祈りを捧げる人。

黙祷時の仕草は、各々異なっていた。

たった1分間。沈黙の時間が、やけに長く感じた。

マルロが危惧した戦闘には発展せず、1分間の儀式は無事終了した。

そう、戦闘まではいかなかった。

それ以外の収穫が、あったのだ。

司令の指示に答えた人とは別のスタッフさんが、ちょっとした異変に気がついた。

彼女は私と食事したり、[天海山ユートピア]のチケットをくれたお姉さんだった。

「強力な電波をキャッチしています。」

「何？」

「まさか…黙祷の合間に？」

「空気読めよ！」

「敵はそんなに優しくないぞ？」

「う、そうだったぜ…。」

勇希兄ちゃんがマル口に指摘されて、落ち込んだ。

「発信源は、やはりタレスからでしょうか？」

「周りの状況からすれば、それ一択しか絞れないだろうな。」

和希兄ちゃんとアレックスさんの推測は同じだった。

タレス。火星圏の星々の1つ。目の前に佇む、黒っぽい星。

そこから電波が発信されているならば。

「…武人兄ちゃん？」

私はかつて[ラストコア]にいた、この星の出身者の名前を口にした。

多分、無意識に、自然と出していた。

流石に人物の特定に関しては、マル口は不明だろうと答えた。

「タレスも民が暮らす星だからな。クーランが目立つから、実感が持ちににくいだけだ。」

「あんな真っ黒に焦げてんのに？」

「…まともな生活を送れているのは少ないがな。」

火星圏タレスの民達の様子については、ひとまず置いて。

スタッフさん達は電波の解析に勤しんでいた。

一生懸命、つまみを回しながら計器の波グラフと格闘していた。

「相当、データが大きいですね…。」

「まだ時間を要するのか？」

「おそらく…あ。」

「どうした。」

「今、解析終わりました。読み上げていきますがよろしいでしょうか？」

どうやら解析作業が短時間でうまくいったみたいだ。

スタッフさんの1人が、西条司令に許可を請うていた。

「構わない。2度目とはいえ、地球人はまだ宇宙の空気に慣れていないのだ。

時は一刻も迫っている。今すぐ情報を開示してくれたまえ。」

「わかりました！読み上げます！」

スタッフさんの返事の威勢が良かったと感じたのは私だけかな？

でもこれで、いよいよ私達に緊張感がひしひしと伝わってくるんだ。

もうすぐ、あの黒っぽい星の中に入る。

そこで、《武人兄ちゃん》と再会する。

ドキドキが止まらなかった。

近くにいた兄達やアレックスさんや司令も、胸の鼓動が止まらないだろう。

マルロはHRだけど、心底緊迫してるかも。

情報の読み上げが開始された。

『よくぞここまで来たな、地球の宇宙船〔天海号〕。早速だが、今から戦闘まで、指示に従ってもらおう。出港口に入って頂くのは、〔天海号〕1隻のみ。星

内に必ず【パスティーユ】を向かわせる。なお、この1機の他に追従するロボは何でも構わない。』

私達兄妹は、驚いた。

たった数分間で解析して抽出した言語情報を読み上げると、【パスティーユ】の名前が載っていたから。

それだけじゃない。

【パスティーユ】ほぼ単独で、あちら側が指名してきているんだ。

【パスティーユ】は地球産の、3機合体の巨大ロボットである。

火星圏の人達が知っている筈は…。

ううん、違う。

私の中で唯一、【パスティーユ】を知っている人がいた。

アレックスさんからは、【パスティーユ】の開発に大きく携わったHRである人物が。

「やっぱり、これは武人兄ちゃんだと思いますよ？」

私は自然と発信者らしき者の名を口にした。

これに兄達が、共感してくれた。

「俺も、彼しかいないと思うよ。」

「正直、兄ちゃんぐらいしかわかんねえよ？他に誰が送ってくるんだよ。」

私達兄妹は全員、口を揃えていた。

マル口はただ、横目で私達を見つめるだけだった。

「発信作業ですが、どうしますか？文面を仕上げますか？」

スタッフさんは西条司令に確認した。

Eメールは一部の例外を除いて、メッセージが受信すると、送信者に返信するのが普通である。

現在の宇宙船と星との間の電波のやり取りも、これに似ている。

電波の発信に言葉を乗せるんだけど、司令が言葉を考える役目を担っているんだ。

しかし、文章の構築には、時間が必要である。

西条司令は手のひらサイズのメモ帳とペンを取り出して、こう言った。

「手短に承諾の意志を伝える。多くて3行程度だ。翻訳装置を起動しろ。そのままタレスに発信するんだ。」

「わかりました。」

スタッフさんの返事の後、司令は前へ出た。

★★★

司令が電波発信用に言語情報を載せる作業に携わっている後ろで、私達兄妹はタレス突入後の行動について指示を受けた。

届いたタレス側の言語情報は、【パスティーユ】を指名していた。

3機合体ロボのパイロットは当然、私達白井3兄妹。

確実に、星内で災難に遭遇するだろう。

そこでアレックスさんが自身の知見を駆使して、注意を呼びかけたのだ。

【天海号・式式】は徐々に、目標の黒っぽい星へと前進していた。

星の表面に破壊されたボロボロの機械が散らばっていても、宇宙船を通す出港口はちゃんと機能していた。

ずっしりと重みを感じる扉は、開いてくれたから。

「格納庫までは《転送装置》で飛べるだろう。入港の作業に時間がかかりそうだし、先にジェット機内で待機しておくんだ。いいか？ 開放的な地球と違って、タレスは宇宙船自体が容易に突入できないだろう。距離や設備次第では、俺や西条司令からの指示を出せない状況に陥るかもしれないんだ。」

アレックスさんの言葉に、私達兄妹はえ？と衝撃の反応を示した。

頭のいい和希兄ちゃんは、ああ…と1人で納得していた。

宇宙船からの指示を出せない。

つまり、タレスの中に入ってしまうば…私達兄妹の独自の判断で戦況を乗り越えていかないといけない。

そこに、サレンさんの手が上がった。

「アナウンスのガイドは、健在だと思います。もちろん、私も直近の経験から辿るつもりでいますが…。」

サレンさんは少し自信なさそうに言った。

おそらく、1度だけの戦闘経験では、記憶がぼやけている箇所もあるからかもしれない。

だけど、アレックスさんがそれは杞憂だと告げた。

技術局長の視線は、マル口に向けられていた。

「ここに、とっておきの人材がいるだろう？」

「ん？誰の事だ？」

マル口はアレックスさんの目配せを理解できなかった。

いや、できないふりをしているんだろうなあ。

だって、「まさか俺が？」と訴えているような顔をしていたから。

マル口が認めなくても、このメンバー内だと火星圏タレスの内情を1番知っているのは、彼だし。

《武人兄ちゃん》へ会いに行く為のルートの案内の適任者で良さそうだ。

ところが、1つだけ問題点があった。

司令の手で捕縛後に収容されて以来、ずっと架せられていた首元の黒い装置。

アレックスさんが1つ、決められていたキーワードを口にするだけで爆発する仕組みの装置。

これは、HRであるマル口の手でも外せない。

無闇に手をかけても、起爆のスイッチが作動するらしく…常人には攻略不可のだった。

どうするんだ一体。

アレックスさん以外は、戸惑いを隠せなかった。

タレス内の、[レッド研究所] への案内役は必要。

だけど、マル口は装置のおかげでHRのロボ形態に変身できない。

ひょっとしたら、また私の下に座って…。

ちょっとだけ邪な気持ちが入りかかった所で、アレックスさんは白衣のポケットから、小型のリモコンを取り出していた。

「すまん。実は俺は、嘘をついていたんだ。」

小型のリモコンは、ボタンの数が3つしかなかった。

下の四角いボタンを押した。

すると…マル口の首元にはめられていた装置が自動的に上下にずらして、左右にパカッと割れた。

初めて、マル口の肌白くすっきりとした首筋を拝んだ。

白い髪の少年のようなHRの首の拘束が解かれたのは、すなわち彼がロボ形態へ変身可能になる意味を示していた。

「お前…。」

マル口は両目を大きく開いていた。

でも、驚いている余裕はなかった。

「格納庫へ急げ。ハッチの先から宇宙船の外へ出られる。そこからは、お前が導け。」

わかったな、とアレックスさんはマル口の肩に手を置いた。

時間がないのに、マル口は未だに固まっていた。

私は彼に声をかけた。

「マル口？」

「…あ、ああ…。何だ？」

「行くんでしょ？タレスの中に。」

「研究者から言い渡されたが、あっさり解いてよかったのか？」

動揺するマル口。

用事を託された事はあったけど、まさか再びロボになって戦場を舞うなんて想像しなかったんだろう。

だけど、同行する味方が増えてよかった。

元々こちらが引き寄せたHRで、いつか裏切る可能性も否定はできない。

それでも、僅かな時間でも、共に戦うのなら。

私は自然と、マル口の前に左手を出していた。

足で格納庫に向かうより、ペンダントの《転送装置》を利用するのが素早く動けるから。

「…何のつもりだ？」

「時間短縮よ。スタンバイしておけば、スムーズに出撃しやすいから。」

「わかりきった事を…。」

「で。行くの？行かないの？」

手を差し伸べたけど、選択権はあくまでマル口に委ねていた。

「もういいだろ未衣子！そいつ走らせろよ！」

「よせ勇希。未衣子、俺達は先に準備しておくよ。彼の事、忘れないようにな。」

和希兄ちゃんが勇希兄ちゃんを抑えて、先行の意を示した。

兄達は、《転送装置》で飛んだ。

「私も先に行きます。調整はニコンの技術者に任せてますので。」

サレンさんは歩いて格納庫へ向かった。

遠慮したんだろうなあ。

「別に俺もこのまま歩いていいが…。」

「あなたは変身が必要じゃない。ロボ形態になって、いつでも出れるようにしたいんじゃないの？今更、戸惑っちゃって…。」

ここまで私は言ったけど、マルコの反応はたじたじだった。

強引に手を掴もうか考えていたけど、その心配はいらなかった。

「わかった。連れていけ。」

マルコは右手を出して、私の左手を握った。

私と彼の間で、パンと叩いた時に出る音が響いた。

決して大きくないが、心地よかった。

ブラウスの中に忍ばせていたペンダントを右手で取り出した。

「未衣子ちゃん！」

女の人が私を呼び止めた。

声がした方向を見ると、私に〔ユートピア〕のチケットをくれたお姉さんがこちらを向いていた。

「お姉さん…。」

「必ず戻ってくるのよ？まだまだやれる事、沢山あるから！」

お姉さんなりの、励ましの言葉だった。

最初はくどくど一方的に話しかけてきて、イライラした事もあった。

だけど、本当は優しさも兼ね備えていた。

今となっては、ご迷惑をお掛けしたと思っている。

だから、私はちゃんとしたお礼を言った。

「ありがとうございます。行ってきます！」

私はマル口の右手を握ったまま、ペンダントの《転送装置》を開けた。
化粧品のコンパクトのように蓋を上に向けて、中のボタンを押すだけ。
たった2ステップで、私とマル口を光と風で包み込む。
私達の姿を覆い尽くすと、出来上がった球体は縮小する。
そのまま、球体は消滅した。

★★★

ビウスの残存兵達の時と同じように、私とマル口は【パステージュ】のピンク
のジェット機のcockpitへ転送された。
本来1人乗りのジェット機だと、2人で入るとなると狭苦しいもので。
今回はまだ上部のカバーが開かれた状態だったので、マル口は格納庫の床へと
飛んだ。
黒くて重い首元の装置をつけていた男とは思えない程の、軽いステップで着地
した。
やはり兄達は到着していて、ジェット機のカバーはみっちり閉められていた。
ちょっとしたお着替えに移行中だろう。
私もカバーを閉めて、専用のスーツに急いで着替えた。
服は収納ケースを用意してもらった。
ジェット機の近くで立っていたマル口は、整備士さんから自分のロッドを受け
取った。
それを左手で握ると、周りの人達に離れると言った。
半径、10メートルは退けられていた。
距離を置いてもらったのを確認したマル口は、自分の全身を光らせた。
cockpit内の私達にも、眩しさは伝わった。

少年の輪郭を形取った光は変形し、一瞬で格納庫の2階部分まで拡大した。

風船が割れるように、光はバリン、と細かく砕かれた。

いつも彼が羽織っている袴のような装甲のカバーは健在である。

中身の姿は…オーロラでも滲み出ているかのような光沢のある、輝かしい白のロボットだった。

これがマル口のHRとしてのロボ形態、【チタン・キュレン】である。

格納庫内の制御室で窓越しに眺めていた整備士さん達は、感動に浸っていた。

もちろん、コックピット内の私達兄妹も、マル口の神々しい輝きから目が離せなかった。

着替え自体はサッと終わらせてはいたけど。

ビビッ、と通信が入った。

アレックスさん？西条司令？もうすぐ出撃なのは何だろう？

私は回線を開いた。

コックピットのモニターに、小さな映像が表示された。

なんと…まだ出会ってばかりの志願兵の皆さんが集まっていた。

『白井家の皆さん、私達も後方で頑張りますから！』

『どんな事があっても挫けずに、乗り越えてください！』

『私達も【エクステラ隊】の人達と、協力しますから！』

志願兵の皆さんは笑顔で手を振ってくれた。

通信回線を使ってまで、応援しようとしてくれている。

彼らはサレンさんを受け入れ後、ビウスの残存兵達と仲良くなったらしい。

認証検査らしきものを終わって、いよいよ出陣の幕が上がる。

私達【パスティユ】が。【チタン・キュレン】が。

サレンさんの【ウインドアーチ】が、タレスの地に踏み入れる事になる。

全ての手続きが、無事に完了した。

ポート奥の扉が、〔天海号・弐式〕のハッチが…開かれる。

地球以外の星の内部という、新しい光景。

私達兄妹は、そこに足跡をつける機会を手に入れたんだ。

『【チタン・キュレン】だ。飛ぶぞ！』

マルロが叫んで、白いHRのロボは加速して飛んだ。

『【ウインドアーチ】、出ます！』

サレンさんも機体を操縦して、宇宙船の外へ飛んだ。

最後に、私達の出番がやって来た。

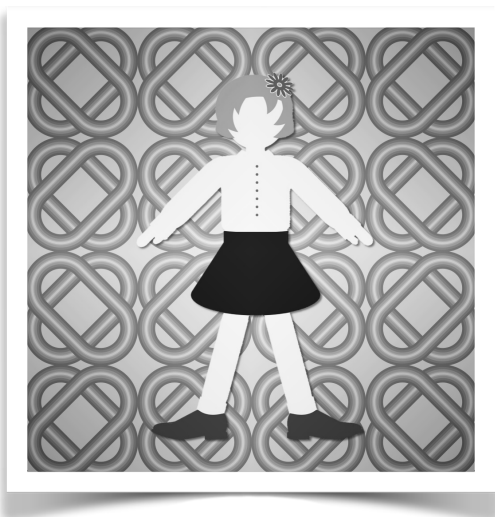
『【パステージュ】！飛びます！』

「飛びます！」『飛ぶぜ！』

叫んだ後、音速でジェット機が1機ずつ、未知なる世界へ発進した。

水色・黄色・ピンク色の3色のジェット機は、宇宙船のハッチの開かれた先で、合流した。

15・譲渡の日



『くたばっていたのかと認識していましたが、生きていたのですね？あなた。』

突然、不愉快な音声が流れた。

通信回線のアラームですら、鳴っていないのに。

【天海号・式式】の格納庫から、タレスの内部へ出た。

【パステューク】のジェット機で、内部の上空を飛んでいた。

横からの視点だと、X軸の正の方向のみの緩やかな放物線を描いていた。

【パステューク】は3機のジェット機が合体して、機体の本領を発揮する。

天井っばい上空の高さの所で3機は合流する。

高さ1列で整列して、3機は強力な光を放つ。

上から、ピンク・水色・黄色の順に並べられた。

【パステューク・フラワー】で、最初は様子を伺う。

火星圏タレスの内部は、真夜中みたいで真っ暗な雰囲気だった。

赤い光のみ、所々に点灯されているのだけは、はっきりとわかっていた。

生存確率は、なるべく高めたい。

【フラワー】はバリアの種類も豊富だし、強固に張れる。

複数で襲いかかって来た時、【フラワー】なら纏めて一掃できる。

更に、タレス内の潜入での指揮官はマルロだ。

彼の後ろについて行くのなら、【フラワー】で十分だ。

【フラワー】へ合体を成功させた後は、マルロの口形態【チタン・キュレン】の真後ろまで降下していった。

そこから二言、三言くらいお喋りしていた時に…割り込んできたのだ。謎の女性らしき声が。

私達兄妹は、この人の声を初めて聞いた。

だからこの人をよく知らない。

マル口とサレンさんにご存知か、私は尋ねた。

モニターの角の小さな映像から、サレンさんの蒼白な表情が映った。

『サレンさん？大丈夫ですか？』

和希兄ちゃんが様子を伺った。

サレンさんの耳に届いたようで、彼女はハッと我に返った。

青ざめていた顔つきは、若干控えめになっていた。

『だ、大丈夫です。お気になさらずに！』

『そうですか…。』

上の兄はどこか腑に落ちなさそうだった。

ところが、声だけの人が告げた『あなた』について、誰を指している言葉なのかすぐに判明した。

マル口が口を割ってきた。

『何だ？わざわざ戻ってきたのに、言いたい事はそれだけか？』

『これでも歓迎しているんですよ？新たなカモが来ましたね、って。』

今の返答は、サレンさんではない。

急に気分を悪くした彼女が、堂々とマル口に話せるわけがない。

これで、不快な気持ちにさせる発言をした人が指す『あなた』がマル口だと、私は見抜いた。

「…何なの？この人。」

『お前達の慕う研究者が操るロボと系統は同じだ。気にするな。』

『って事はAⅠが喋ってんのかよ！』

勇希兄ちゃんが大層に驚いた。

そんな大袈裟な…って思いそうだけど、お喋りするAⅠなんて、地球では[ラストコア]内外問わず、まだ最近出始めたばかりである。

そういった芸当ができる物も、ここまで流暢に話すに至ってない。

衝撃を受ける人があるのも、無理はなかった。

タレス、とりわけクーランという武人兄ちゃんの《育ての親》の技術力が優れている証拠なのかもしれない。

そんな技術の発展に圧倒されているうちに、マルロは声だけの人と話をしていた。

内容は、どうも友好的な関係は築けそうにないと感じる程の、陰湿な雰囲気を醸し出していた。

『久々に舞い戻られたと思いきや、変わり種を連れてきたのですか？それも、地球人の子供を。』

このA Iさん、私達の事まで知ってるの？

『…ああ。驚かれているようなのでお伝えします。宇宙船のポート収容時に、小手調べを行なっていましたので、情報を入手しているのです。』

『小手調べとは一体…。』

『船の配置後に、解析業務を実施しております。それで中身が読み取れるのですよ？』

船の配置という事は、すなわち駐艇場内に船を止めた時だ。

既に私達パイロットは、自分達の機体のコックピットに乗って準備していた。

せっせと支度していた頃に。

話を逸らされたのか、マルロが口を開いた。

『おい。ガキどもに余計な内容を吹き込むな。』

『私はタレスへの入港手続きに関しての説明を述べただけですが？これくらいの事でムキになるとは…。ああ、そうですか。子供を戦場に行かせるよう《洗脳》させた事実を知られたくは…。』

『黙れ。』

マルロがドスの効いた低音で言うと、【チタン・キュレン】が走行中の【フラワー】に近寄ってきた。

かなりの、至近距離。

目的地の【レッド研究所】へ辿り着く為に、スピードは落としてない。

突然の動作で、【フラワー】はちょっとよろめいてしまった。

「きゃあっ!？」

『うおっ! オイテメェ! いきなり突っかかってくんじゃねえよ!』

勇希兄ちゃんが怒鳴った。これは仕方がないかも。

だって、あと少し触れていたら下に落ちる可能性もあったから。

そうなると、今までの辛抱が水の泡になりかねないし…。

でも、マルロは私達に謝罪の言葉はなかった。

純白の眩しいHRは、癪に障る発言ばかりするA Iに集中していた。

『《洗脳》だったら、お前達の味方であらうラルクも同罪だ。地球人の娘に奴の記憶がこびり付いたおかげで、彼女は同郷の繋がりを犠牲にされたんだ。間接的だろうと、言い逃れはできないぞ?』

「武人兄ちゃんが…?」

『お前! この場に及んで兄ちゃんの悪口を…!』

勇希兄ちゃんの怒鳴り声は、長くもたなかった。

【チタン・キュレン】の右手のひらが、モニター画面の正面でスッと出された。

マルロは何にも言わなかったが、この合図で彼の意図は読めた。

『しばらく黙っている。割り込んでくるな。』と。

ここは空気を読んで、合わせて欲しい、と。

《洗脳》のワードを出したけど、マルロはマルロなりに、武人兄ちゃんが全てではない事を知っている。

アレックスさんから色々聞き出したのは、彼だから。

本人も、《期間満了》前日に…私にどうすればいいのか、去り際に告げていた。

『終わりを握らせたくないなら、貴様がトドメを刺せ。』

と言っていた。

彼も意識して、己も《洗脳》者の1人だと認めていた。

私は…武人兄ちゃん、《ラルク》にも、マル口にも操られた感覚はないんだけどなあ。

それはそれで、実に奇妙ではあるが。

A Iの減らず口に、変化が見られた。

『…まあ、ラルクの思考を理解し難いのは、事実でしょうね。』

『理解?』

突然、このA Iは味方である筈の《ラルク》の悪い部分をチラッと覗かせるように言った。

急な対応の変わり様。マル口の圧の強い発言が効いたんだ。

私達が聞かずとも、A Iは勝手に発言の理由を説明した。

『クーラン様を失ってから、タレスの治安は酷くなりました。元来暗くて汚い星の象徴とされたタレスですが、彼が去った後の反乱勢力が奮起したのですよ。今までのツケでも、返ってきたのでしょうか。』

『権力者に従うお前が堂々と言ってもいいのか?』

『故人に口無しですよ。』

私は案内のアナウンスを流すA Iです、物理的な危害に恐れる事はございません。

そうはっきりと、タレスのA Iは述べた。

《ラルク》の正体は、武人兄ちゃん。

兄ちゃんなら世界をより良くしようとする筈。

このA Iは、ちょっと悪口を言い過ぎじゃないかと思った。

なので、私は否定した。

「武人兄ちゃんは、『ラルク』は優しい人よ？良好な未来へと導けると思うわ。」

『その配慮がですね…間違っている気がするのですよ。〔研究所〕内のH R全てを同じ火星圏のセレスに送り、改造を繰り返した【フィルプス10】を破壊し…自身は無防備で余生を過ごしているかのようですね…。』

A Iという組み上げられた知能なのに、呆れた物の言い方ができる。

ある意味、これは優秀な案内役なんだろう。

自然体で誕生した私達生物全般と、違和感なく会話が通じるんだし。

『奴は生きる気力を失っている、と都合良く理解してもいいのだな？』

『あれでも、暫定的な権力者なの…。』

辛いところです。とA Iは躊躇いもなく言った。

『ふうん。ならば俺達に、少しばかりの余裕があるな。』

『何を自慢げに…と申し上げたいのですが、まさにその通りで何も返せません。』

マル口は武人兄ちゃんを、討ち取る気になっていた。

弱りきっているって、情報を得ると。

私に対しても『首を取れ』と言うぐらいだし…。

武人兄ちゃんと相対させたら、戦闘を開始してしまいそうだ。

私個人としては…まだ連れて帰れる余地は残っていると、信じていた。

隣の【ウインドアーチ】を操縦しているサレンさんの体験談を聞いただけで、彼の現況を知ったのだから。

反論したい気持ちはあるけど、今はグッと堪えた。

武人兄ちゃんに『会う』まで、私の本音は片隅に置いておく。

再会すら出来ていない今は、来るべき時期ではない。

『これからタレスは、どうなって行くのでしょうか…。AⅠの分際でありながらも、つつい考え込んでしまうのです。』

『組み込まれた存在なのに、感情まで表現できるんですね…。』

和希兄ちゃんの感想だった。

上の兄は電子工作に精通しているので、表現豊かな人工知能に驚いたんだろう。

『生物のリアルさを極限まで再現させましたから、クーラン様は。今はもう…我々以上の案内役は出ないでしょう。』

案内役のAⅠに哀愁が漂っていた。

『私は製作された物ですから、逃亡はできません。ラルクとも、一連托生の気持で進むのみです。何を申し上げても無駄ですがね…。』

こんな人でもストレス溜まるんだなあ。

私は意外な発見に遭遇した。

これだけ耳にすると、同情はしたくなる。

多少の情けを知るだけである。

この人を助ける、まではいかない。

どうやって救助したらいいか、わからないし。

〔レッド研究所〕はまっすぐ向かえばいいと、サレンさんから事前に教わっていた。

星の中に入れば、ひたすら前進あるのみ。

私は左右のレバーから、手を離さなかった。

★★★

【レッド研究所】の中に突入するのは、想像よりもはるかに容易だった。

1度リュート王子と共にやってきたサレンさんがいるからなのか。

地球降下前に入り浸っていたマル口がいるからなのか。

癪に障る案内役のA Iの導きなのか…。

多分、要素は複合化されているんだろう。

サレンさん達が訪れた時は、透明のバリアの膜が張られていたとか、通路内に罠が仕掛けられていたとかで…外部の者を簡単に通さないよう張り巡らされていたらしいんだけど…。

『何も…ありませんね…。』

『門と通路自体は変化はないですが、トラップの気配が、微塵も感じません。』

『まるで俺を倒しに來い、と言わんばかりだな。奴にはセキュリティ強化が頭に入っていないのか？』

和希兄ちゃん、サレンさん、マル口の順で発言があった。

3人とも突破しやすいと喜ぶよりも、迎える者への心配をしている口ぶりだった。

逆に勇希兄ちゃんは、楽観視していた。

『武人兄ちゃんが呼んでるんだろ？未衣子が信じる奴が、変な事しねぇよ！』

「変な事しなすぎなのよ兄ちゃんが。裏があるかもしれないじゃないの。」

『一体この半年、お前は何を学んできたんだ？』

『違えよ！気持ちの問題だよ！弱腰で挑みたくねぇし！』

下の兄は即座に否定した。

勇希兄ちゃんの言葉にも一理ある。

私は武人兄ちゃんと争い事を、本音を言えば起こしたくない。

だけど、マルロが過去に言ったセリフや、サレンさん達が挑んだ経験から振り返ると…起こさないとはい切れぬ。

【フラワー】のロッドで生み出した光の弾を、【ブラッドガンナー】に放つ時は来る。

もしもの時に、尻込みをしてはダメだ。

脆い意志では、武人兄ちゃんは喜ばない。

肉体的に厳しくとも、精神面では彼を上回る気で構えないと…。

【フラワー】に乗ったまま、【研究所】内の施設の通路をひたすら通って行く。

道のりには、端っこという終わりの点が存在する。

『行き止まり』だ。

施設の通路だから、当然進行を妨げる壁が現れる。

『また、この扉…。』

『その通りですよ、サレンさん。貴女が王子と共に行かれたルートそのまままで辿っております。』

サレンさんと案内役のAⅠが言うように、『行き止まり』の正体は閉められた扉だった。

時代錯誤かと思われそうな、古びて重量のある扉が開けば、目の前の『行き止まり』はなくなるんだけど。

『…ッ！』

サレンさんの吐息が漏れた。

モニター画面の片隅の映像から、サレンさんが操縦レバーから手を離して、身体を丸める姿があった。

彼女は、この道を通って来ている。

王子と一緒に戦闘の敗北を喫した彼女は、その時の脅威を身体に染み付いたように。

かなり怖がっている様子だった。

サレンさんより歳下の私達兄妹は、彼女に声をかけた。

【フラワー】は、【ウインドアーチ】に向けていた。

「サレンさん、大丈夫ですか？」

『宇宙船に戻りますか？』

『いえ、大した事はないですよ…。』

『すげえ具合悪そうにしてねえか？』

兄妹全員が、サレンさんの状態を気遣っていた。

マル口は彼女に対して、何も言わなかった。

彼が尋ねた相手は、案内役のAⅠだった。

『《ラルク》以外の相手をさせたのか？土星圏の者達に対してだ。』

案内役のAⅠはマル口の問いに対して、すぐさま答えた。

『貴方の推測通りですよ。この扉の奥で、HRを潜ませておりました。』

やっぱり、サレンさんが怯えているのは…。

『武人さん…《ラルク》に挑む前にHRに襲われたんですね？』

『そりゃあ怖がるだろ！このまま行けるのか！？』

上の兄が軽く察した後、下の兄の困惑の声が上がった。

だが、案内役のAⅠは毅然とした対応で否定した。

『王子が侵攻してきた時のみです。先程述べましたね？ラルクは〔研究所〕内のHRを逃したと。』

『ああ、そうか。』

『だったら、安心じゃねえのか？』

兄達は納得していた。

私も同じように、この扉を開けてしまっても問題無さそう…と軽く考えていた。

サレンさんに、心配ないですよ、と励ます様に声掛けをした。

生物の思考も、十人十色で食い違う場面が出ている。

私達兄妹が安心しきっている側で、マルロはまだ疑念を抱いていた。

だから、こんな発言をしたのだ。

『貴様。他に何も隠してないだろうな。』

『隠す、とは？』

『とぼけるな。俺の勘が冴えなければいいと願っているんだがな。妙に気配を感じるんだ。この正体は何だ？』

マルロがそう言った後、AⅠが答える出番なんだけど。

ここで案内役のAⅠは即座に答えず、黙ってしまった。

AⅠは顔を見せない。

表情は読み取れないのに、今困り果てている姿の想像がつく。

自然の生物同様、スラスラと喋れるからわかりやすいんだろうなあ。

『何だ？だんまりを続ける気か？やましくなければ堂々と答えられる筈だが？』

『…ではマルロ・ヒーストン。貴方にお尋ねします。』

今度は案内役のAⅠからマルロへ、問いは投げられた。

この扉の向こうには、彼に関係する何かが詰まっているとでも言いたそうだ。

マルロに意見を委ねたいので、私達は一旦黙って見守った。

『何だ。時間がないんだ。手短かに言ってくれ。』

彼は回答を急かした。

早く行きたいんだろう。

その気持ちは、私達兄妹も同じだった。

サレンさんにいたっては、このまま放置させたら危険なのも確かである。

とにかく、早く進めたかった。

案内役のAも、私達の気持ちを汲んでくれた。

『この先、奇襲をかけられても…責任を追及しませんね？』

『…わかった。警戒しておこう。』

今の質疑応答で、この先に危険の伴う事が強く伝わった。

ここまでの道のりが、襲撃の気配すら感じられなかったから、私としては不思議だったんだけど。

『それでは、扉を開けます。細心の注意を払ってくださいね。』

『言われなくても、そのつもりだ。』

マルロが答えていた。

扉の開錠は、緩やかだった。

アンティーク調のイメージを描いた為か、速度はこのくらいだろうと想定していた。

扉が上まで上がりきるのが遅く感じるのは仕方ないと思った。

どちらかと言えば、怖いと感じたのは…扉の層だった。

私達の近くの手前の扉から、1枚1枚開けられていく。

層が厚い事は、潜り抜けるのに時間を要するのと意味が似ている。

私達兄妹とサレンさんはロボや戦闘機に乗っているし、マルロはHRのロボ形態。

潜るスピードは生身の生物と比べてあっという間に終わらせるだろう。

でも、分厚いのは、引っ掛けやすい一面もある。

扉の1枚でも挟まれたら…。

最悪な事態を考えすぎるのは良くない。足がすくんでしまう。

もうここまで来てしまって、それはない。

なんとかなると心に決めて、奥に進もう。

全ての層の扉が開かれると、これらの動作は静止した。

罌の仕掛けさえなければ、ほんの数秒で通過できる。

【チタン・キュレン】が先に出た。

続いて【パスティユ・フラワー】が向かい、最後に【ウインドアーチ】がついて行った。

古びた扉を抜けた奥は、コンサート会場でも開催できそうな大広間である。

【研究所】の門から扉の前までの通路は、ロボが2体横に並んだだけでキチキチだった。

狭苦しい空間から、解放された気分になった。

【チタン・キュレン】の後ろで、縦1列に並んで進んだ。

鉄製で出来てるのかな？って疑いたくなる程、壁が銀色でテカらせていた。

天井部分に設置された照明の光がぼんやりしているせいで、眩しさは感じられなかった。

やや暗い印象は受けたものの、天井と壁一面に何らかの問題はなかった。

暗い印象の原因は、すぐに見つかった。大広間の底面部分だ。

そこは…心臓の弱い人だったら、失明するか吐き気を起こすであろう光景だった。

多くのロボ達が、無惨な姿でゴロゴロと横たわっていた。

傷だらけのロボもあれば、部位が欠落したロボもあった。

皆、動く気配はなかった。

動かないロボの残骸は、似たような外見をしていた。

同じタイプの機体だろうなあと、推測しやすかった。

そんな中、色合いが異なったロボを発見した。

黒っぽいロボ達に混じって、濃い紫色のロボの腕部分が、私達の視界に映った。

サレンさんが、悲しみに両目を閉じていた。

私達兄妹も、ある事に気がついた。

『兄貴、あの紫色のやつ…。』

『そうか…これは…。』

兄達が言わんとしている内容がよくわかる。

4ヶ月以上前に武人兄ちゃんに、《ラルク》に挑んできたリユート王子。

彼の専用機体である【ホーンフレア5 t h】の装甲の色とほぼ似ていた。

サレンさんは哀悼の意も込めて、目を伏せたんだ。

周りの私達も、彼女の悲しみを理解できた。

『相当、派手にやったんだな。』

『元々、クーラン様に拾われて改造されたHRを配置しておりました。』

『防衛対策としては、悪くはないんだが…。』

マルロは一応、敵の行動は真っ当だと言った。

やり方自体は間違っていないと思う彼だが、今の大広間での戦闘が惨劇を引き起こしていたのは十分承知していた。

あっと驚く私達に比べて冷静なのは、HRとしての過酷な戦線を乗り越えてきた経験があるからだろう。

悲劇を肝に銘じておきながら、大広間の奥へとまっすぐ飛んでいた時だった。

物音がした。【フラワー】のコックピット内でも、音声のデータとしての波を計測した。

「ん？」

『何だよ未衣子。こんな時は静かにするのが筋ってもんだろ？』

「わかってるわ。マル口じゃないけど、気配を感じない？」

『気配かよ？』

勇希兄ちゃんには、伝わりづらいかな。

今度の私の違和感に気づいたのも、和希兄ちゃんだった。

『なるほど。音が観測されている。』

『え？俺達の声じゃねえの？』

『音量の波グラフは細分化されているんだ勇希。ちょっとだけ時間を遡ったデータを確認するんだ。』

上の兄に言われてから、下の兄はパネルの操作を開始した。

彼も私が抱いた違和感に気がついた。

『おお！ちょっとだけ山ができてるぜ！』

『おい、静かにしろ。』

『あれ？マル口は気づかぬえの〜？』

勇希兄ちゃん、馬鹿にした笑い方をするのはやめよう？

そもそも、どちらかと言えば…マル口が先に不審な気配を感じたんだからね？

不審な気配を…。物音を感知して…。

まさか。

この3文字が頭によぎった時、積まれたロボの残骸から、這い上がる者が出てきた。

リビングの一室の片隅にでも飾りたくなるような、赤く光る立方体のオブジェがひょっこり現れた。

それが、2個、3個と、徐々に数を増やしていく。

薄暗い雰囲気の大広間にて、赤い立方体のオブジェの光との相性はピッタリだった。

ピッタリ…？暗めの部屋に似合う赤の光…？

マルロが猛烈に叫んだ。

『今すぐ防戦張るか、離れろ！』

少年のような童顔からは想像がつかないほど、かなり気迫のある声だった。

私達はびっくりした。

生の声ではなく、コックピットのスピーカー類を通じての調整された音量だから、彼の叫びが鮮明に聞こえる。

『…痛っ。』

『テメェ！静かにしろって言ったんだろうが！』

勇希兄ちゃんがマルロに指摘した最後の部分で、大広間の底面に変化が起きた。

赤の光が段々と濃くなった。

ドロドロに濃度を高めていったダケなら、まだ良かった。

濃い目の赤の次は、コントラストの明度を高めにした、所謂白に限りなく近いピンクの稲妻を目撃した。

あまりにも眩し過ぎて、直視は難しかった。

画面を一瞬で切り替えて、底面部分の映像を縮小した。

稲妻は何となく放たれてはいない。

それが目指す方向は、決まっていた。

私達の機体が浮遊している、大広間の上部である。

チラ見した程度で確認できたのは、稲妻は点と点を繋ぐように、光る立方体同士で結ばれていた。

底面に現れた全ての立方体が稲妻で結束し、平らな網模様を編み上げる。

稲妻は、枝分かれした。

分裂した細かい稲光が、私達の機体へと伸びていく。

稲妻は、稲光は、電気である。

H Rは生命体、ロボは機械である。

稲光が届くと、機体は痺れる現象を起こした。

機体に集約したせいで、機体の周りを点滅するみたいに発光した。

『うわあああ！』

「きゃあああ！」

『あああああ！』

叫び声に違いはあれど、私達兄妹の乗る【バステューユ】は、真っ先に標的にされた。

電撃の猛攻を浴びせられた。

前に出ていた【チタン・キュレン】にも、細い稲光が何十発も伸びてはいる。

防御体制を取れと声を張り上げたマル口は、咄嗟の球状バリアで電撃をうまく凌げていた。

『お前達！クソっ！』

マル口は悔しがった。

左手に持つロッドを上下に振る動作をしていた。

ガンッと、ロッドの底と固いバリアがぶつかっていた。

バリアが固すぎて、攻撃に手出しができない【チタン・キュレン】。

私達の救出も、到底望めない状況に陥ってしまった。

このままではまずい。

特殊技術を用いられた【バステューユ】でも、強烈な電撃ショックを受ければ機体がパンクする。

そうなれば、機体自体が正常に稼働できなくなる。

短時間で収まってくれたらいいのにと、目を閉じながら願っていた。

救世主は、身近にいた。

タレス内に突入した機体は、3つである。

サレンさんが操縦する【ウインドアーチ】は、【チタン・キュレン】程の頑丈なバリアを形成していない。

最低限の防御を施しているだけだ。

距離を十分に取って、稲光のダメージを回避した。

身軽な状態になっているので、反撃も可能だった。

『皆さん！』

彼女の叫び声である。

その直後に、弓状の機体の両端から、ライトグリーンのビームを放った。

残骸共々、焼き尽くした。

結果、【バスティーユ】に集中していた電撃ショックが、強制的に解除された。

公園の大木並みの全長のロボが、フラついて下に落ちそうになった。

【チタン・キュレン】が支えてくれた。

『世話のかかるガキどもだ、全く。』

マル口は呆れていた。

口ではそう言っても、本心は違うと信じてるから、深く考えなかった。

【チタン・キュレン】は小ぶりのマル口のロボ形態だ。

そのままでは、【フラワー】を支えるのは困難である。

だから、技を駆使して落下を防いでくれた。

特に足場の円陣を展開してくれたのは、助かった。

【フラワー】は右手のロッドを杖代わりにして立っている。

姿勢は猫背の状態になっていた。

『大丈夫ですか！』

【ウインドアーチ】が飛んできた。

サレンさんは素直に心配してくれた。

【バスティーユ】はコックピットも頑丈にしている。

《剛力ガラススフィア》で万が一の危険から身を守ってくれる。

私達兄妹は、無事だった。

「ありがとう、ございます…サレンさん。」

『うー、失明すんのかと思ったぜ…。』

『あと少し遅ければ…と気にしないのが1番ですかね。』

和希兄ちゃんの発言が身に染みた。

今の攻撃は危なかった。【パスティーク】の動作自体が完全に停止して、使い物にならない可能性もあった。

マル口達の足手纏いになりかねないのだ。

《武人兄ちゃん》に会いにいく前に、こんなアクシデントで台無しにしてしまっては困る。

兄妹全員で、機体の原状回復を優先した。

足場の円陣も、長く保たない。

真下に潜んでいるだろう敵の勢力なんて、気長に待ってはくれない。

【ウインドアーチ】のビーム攻撃による爆発の煙は、次第に晴れてきた。

攻撃で燃やしたのは、残骸のみだった。

赤い立方体の光は全て健在である。

【フラワー】は【チタン・キュレン】に天井付近まで引き寄せられていた。原状回復への微調整の最中に、残骸の積もる底面部分の様子もチェックした。

あの立方体のオブジェは、ロッドの先端だった。

全員が、ロッドを左手で握っていた。

頭部のメタリックなデザインから、ロボの軍団が下に埋もれていたと判断した。胴体も機械的な仕組みだと想像がつく。

異質な外見だなあと思わせたのは、機体の関節部分が赤く光っている奇怪さではない。

上着として羽織っている…和装の着物で見かける袴の形をしたカバー？だった。

変な格好…とちょっぴりダサイとか印象を持ちつつも、ある事に気がついていった。

隣の【チタン・キュレン】の格好だ。

怪しく光る赤いライン以外は、下に埋もれていたロボの外観とよく似ていた。

兄弟を思わせてしまうくらいには。

マル口は驚愕した。ロボ形態だと表情は読めない。

案内役のA Iに話した言葉のトーンが上がっている事から、かなりの動揺をしているのがわかった。

『捕まえたのか？』

俺の同志達を。

マル口は後に言葉を続けなかった。

でも、何を言おうとしているのかを私は読めてしまった。

案内役のA Iは、歯切れが悪い状態で説明した。

『…仰る、通りでございます。宇宙に戻ってきた貴方の仲間達を、クーラン様は捕獲しました。全ては、いきませんでした。』

『大半は洗脳させたのか？』

『左様でございます。こちらはクーラン様の身体的な認証がなければ、解除ができません。』

この者達のみ、ラルクでもどうにもいきませんでした。』

『そんなセキュリティを組まれたら、奴でもお手上げだろう…。』

マル口はA Iに、怒りをぶつけなかった。

重厚な扉を開ける前に忠告を聞いたからだろう。

怒る時は本気で怒るマル口。

だけど彼は、操り人形の扱いにされた彼の仲間達に対して、残念な気持ちでいっぱいだった。

話の合間のため息を吐く所から、辛そうにしている空気は感じられた。

実際にマル口の仲間達を弄ったのはクーランである。

元々は…私達が所属する[ラストコア]だって、責任はある。

マル口は西条司令の巧妙な技によって、降参してこちらの味方になった。他の仲間達を、宇宙に逃して。

ビウスの残存兵達同様に彼の仲間達も受け入れたら、大広間で惨めな思いをしなかっただろう。

過去を振り返っても意味がない。

もう悪の改造を施された者達への口での説得は、難しいだろう。

ここは消費を避けたいけど、戦闘で乗り切るしかない。

天井付近まで高度を上げていた私達。

敵に回ったマル口の仲間達が接近してくる。

飛び道具のような攻撃だし、今からでも弾を放てる筈なんだけど。

『逃げ場をなくす気か?』

『クーラン様によりプログラムを仕込まれましたので。止める手段はございません。』

『…突破するしか、ないな。』

『はい。』

マル口の発言に案内役のA Iは肯定した。

こんな広い空間でも、天井があればそこも『行き止まり』になる。

マル口の仲間だったであろうロボが、ジリジリ寄ってくる。

タレスの内部を1番知っているA Iがお手上げだと告げている。

逃げる事は不可能だ。

【フラワー】の右手で握られたロッドを、機体の胸元まで寄せた。
せめてロッドの放つ光の弾で、敵の数を減らそうと考えていた時。

ポオン！

頭部のヘルメットは装着しているが、爆発音はよく響く。

耳にほんの僅かな痛みを感じた。

現場の光景も、怪しい赤の光を灯すロボの軍団が、白い煙に包まれている状況に変化した。

【フラワー】はまだ、ロッドの攻撃を放っていない。

【ウインドアーチ】のビーム攻撃かと思われたが、映像ではサレンさんの動揺する姿が映し出されていた。

実際に【ウインドアーチ】の両端の銃口から、煙は消えていた。

3機で乗り込んだ【レッド研究所】。

白く膨張した煙を発した主は、彼しかいなかった。

「マルロ…！」

『これは、俺の全責任だ。俺が1人残らず落としてやる。』

『はあ！？お前、あれだけの数を対処すんのか！？』

『ビウスの同志達のように、彼らをお前達の配下に入れるよう、お願いするべきだったんだ。遥か彼方の宇宙へ逃げろ、と指示を出したのが不味かった…！』

『いくら貴方の能力が高くとも、大量に押し寄せてきたら持ち堪えませんよ？
手分けを…。』

また、爆発音が鳴り響いた。

まだ【フラワー】のロッドは左右に振り回してすらいない。

【チタン・キュレン】の全体像を見ると…その機体を持つロッドの先端が灯されていた。

マルロは下の軍団に対して、2回も広範囲の攻撃を放った。

おかげで軍団の勢力は遮られて、一気に上昇するロボの数が減らされていた。

『…潜んでいる戦力はこれだけか？』

マルロが言った。

内容から、私達兄妹やサレンさんに向けての発言ではない。

答えたのは、もちろん案内役のA Iだ。

『ラルクが他のH R達を他星へ送り出したのは、事実ですから…。』

彼女の歯切れが悪そうに感じた。

余程、謝罪の念があるんだろう。

最初のうちは不愉快になるような皮肉な言葉を話していたのに。

急な対応の変わり様である。

A Iに関しては、出会って間もない私達には何の感情も抱かない。

地球人としての、ほんの些細な同情ぐらいは残されているだけだった。

制止が不可能なプログラムを仕込まれては、手に負えないだろう。

『…ならば、お前はガキどもをラルクの所まで案内しろ。』

「え？」

私は戸惑いを隠せなかった。

マルロがA Iに対する依頼の意図が、なんとなく読めたんだ。

大広間での激化しそうな戦闘をマルロが抑制し、私達は先に進む。

作品のワンシーンで見かける、ありふれた行動だ。

私は小説を読むタイプなので、アクションシーンが派手な映画などはあまり観ていない。

でも、その後の展開なら、予想できる。

先へ進んだ私達は、確実に生き延びる率が高くなる。

反対にマル口は…。

『マル口さん、本気で言ってるんですか！？』

『お前、くたばるつもりかよ！』

2人の兄達もマル口の行く末を案じていた。

武人兄ちゃんやマル口と接する機会の少なかった彼ら。

人生の終わりを迎えようとしている生物を目の当たりにすると、どうしても気掛かりになってしまうのだろう。

対人関係で素っ気ない態度を散々取っていた私に対しても、親切に支えてくれた。

もう少し私が2人の心情を考えないといけないなあ、と反省する時もあった。

兄達はなんだかんだ言って、本当は優しいんだ。

その思いやりは、マル口に伝わっては…。

違う。彼も彼で、十分理解している。

だから私達を、先に行かせようとしているんだ。

大量発生する敵の進行を妨げてまで。

ブォン！と爆発以外の音が聞こえた。

【フラワー】はまだ【チタン・キュレン】の隣で浮いている。

【チタン・キュレン】の左手のロッドが、豪快に振り下ろされたのだ。

『無駄口叩かずに先に行け！お前達には奴に会う目的と、コレからの未来がある！こんな所で立ち止まるな！』

わかったか！とマル口は怒鳴り散らしていた。

本来ならハイ！と高らかに返事をするんだけど、私達はそれができなかった。

マル口も見返りが無いのを知っている、怒声の後は敵の沈静化に集中した。

『…急ぎましょう。奥に通路がございます。立ち止まっていたら巻き込まれますよ？』

案内役のA Iはもう、マル口はこの場の処理を譲っていた。

『通路を潜り抜けた先に、ラルクは必ずいます。私はこれでもタレスに長く居続けております。指示に沿って進んでいけば、ゴールはあります。』

「…わかりました。行こう、兄ちゃん達。」

私も、マル口の熱意に応える働きをしないと。

『未衣子…。』

「今逃してしまえば、完全に武人兄ちゃんに会えないよ。ここはマル口に任せよう？私達は、やるべき事をやらなきゃ。」

兄達の返事はなかった。了解の意図は、行動で示された。

【フラワー】はバリアを駆使して、【チタン・キュレン】の側から離れた。

多数の爆発と下のロボ軍団の攻め具合に奮闘しながら、A Iが示した奥に繋がる通路を目指した。

突破するのに精一杯で、無闇にロッドを振り回さなかった。

『…あとは、土星人か？それとも…。』

『いいえ。ニコンの地を踏んでから、私は土星人となりました。その呼称で構いません。』

『ならば土星人。お前もガキどもについて行け。』

『いいえ、私は残ります！』

『お前はHRではないだろう！』

『王子の側近ですから！』

『…頼む。俺の元同志達の始末は、俺自身で片付けさせてくれ。お前達が共に背負う必要はないんだ…。』

『マルロさん、貴方は…。』

『今までよく生きてこられたもんだ。[宇宙犯罪者]の烙印を押されたHRは、迅速に処罰を受けるべきだった。案内人の言う通りだよ。よくものうのと生きてこられたのさ。俺は。』

『…。』

『《メス》のガキに、未衣子に伝えてくれ。お前は乗る前から、《特別》な経験をしていると。』

『それは、どういう…？』

『急げ！お前の機体では、すぐに落とされるぞ！』

『…わかりました。意味があるのかは知りませんが、ご武運を祈ります。』

『ありがとう。』

【ウインドアーチ】も【バスティユ・フラワー】の後を追うように、奥に繋がる通路へ飛ばして行った。

★★★

案内役のA Iの指示通りに、【フラワー】は狭くなった通路を進んでいた。

潜んでいた敵はマルロの仲間だった人達以外の出現はなかった。

通路を抜けると、また広間に出た。地面に、瓦礫が散乱していた。

全体を俯瞰すると、中央に円の形があったんだけど…。

元々固い素材でできた塀だったのか、何かしらの力が加わって崩れた跡の影響で、ごわごわした円の姿になっていた。

『ここは競技場として利用されてました。』

案内役のAⅠが教えてくれた。

もう少し深く調べたら…なるほど。

円の内部に、これまた固そうな座席が並べられている。

観客がそこに座って、試合を観戦していたんだぁ。

試合の内容は…。

『HR同士の戦闘が繰り広げられました。

他には、ラルクとニコンの王子の対決もです。』

ここで、リュート王子が、やられたんだ…。

グチャグチャに荒らされたこの広間を眺めていたら、激しい戦闘であろう想像がつく。

サレンさんが酷く悲しむのも、理解できる。

ところが、ここでも…武人兄ちゃんどころか、生物の気配は感じられなかった。

私達地球人は宇宙人と比べて察知能力は乏しいけど、【パスティユ】がそれを補助してくれる。

全く感知されないのは、変だなぁと思っていた。

AⅠが答えてくれた。

『この場所にはラルクも、他のHRも存在しません。先に進んでください。』

静かすぎるなぁ、と不安に思ったけど、AⅠの指示に従うしかなかった。

意に反して戻ると、今度こそ稲光の猛攻にやられてしまう。

AⅠの言葉を信じて、競技場奥の通路まで直進した。

無惨な姿に圧倒されながらも。

驚くほどに、競技場の先の通路でも、トラップの類が出現しなかった。元からないのかな…？

でも、怪しい光が点在する箇所もあるし…。

『彼の意図は読みにくいです。何故トラップを解除したのか…。民達の襲撃を甘く見ているのでしょうか？』

A I の嘆く声が聞こえてくる。

この研究所のこれからを憂いているような発言だった。

果たして、それだけなのかな…。

武人兄ちゃんは強いHRという認識はあるし、自分の力を過大評価するのはあり得るけど。

自分自身が強いと誇っているなら、地球を攻略しようという気になる筈。

クーランの側にいて、何も襲わないのは…。

待っているんだ。私達を。

【パステージュ】が兄ちゃんの前に飛んでくるのを。

解除不能な罠以外を停止させたのには、電波の受信で【パステージュ】の機体を指名したのは…。

通路にも出口はある。

3度目の広間に、【フラワー】は突入した。

その構造は、ボールの中身を彷彿とさせた。

地球の緯度と経度の線で編まれたような割れ目が存在していた。

割れ目はピンク色に光っている。

壁は球の内部に沿うように、黒っぽい銀色のタイルがぎっしりと張り巡らされている。

それ以外、何もなかった。

本当の『行き止まり』であると、兄達は落胆した。

ところが、私は見つけたのだ。

『行き止まり』の空間の中、銀色のタイル群の１枚だけ…青く光る箇所があった。

拡大すると、その正体は制御室となっていた。

室内には、フードを被った黒い者が１人、立っていた。

「武人兄ちゃん！」

私は大声で叫んでいた。

16・対峙の日



ずっと、夢を見続けていた。同じ人の夢を、何度も何度も。

就学前から、中学生になった今まで…1人の男の経歴を振り返るばかり見てきた。

中学生になってから、実際に面と向かいあう機会を得た。

愛嬌市南部への襲撃と引き換えに。

彼は窮地の所で、私達兄妹を救ってくれた。

カラフルなジェット機に乗って、ロボットに合体した。

襲ってきた敵を、この時は自動操縦だったけど…倒した。

彼と一緒にいたのは、たった1ヶ月程しか記憶に残ってない。

その期間は、本当に楽しかった。彼について行きたいと望むようになって、より勉強に励んでいたんだ。

連れ去りは、あっという間だった。

私達が敵の別部隊にもたもたしている時に、彼は捕えられてしまった。私達が無事に戻った頃には、彼の姿は消えていた。

帰って来ていないと知って、私は酷く頭痛を感じる程の衝撃を受けた。1週間程、個室のベッドの掛け布に包まっていた。

寝るのがしんどくなって、やっとベッドから出た。

それ以降…私達が所属する[ラストコア]は、太平洋に降下したマル口の部隊と接触して。西条司令の巧な技で、逆にマル口を捕獲した。

アレックスさんがうまく誘導して、マル口は[ラストコア]に馴染んでいった。あとは、現実通りだ。

マル口が引き入れたピウスの残存兵、サレンさんらニコンの民達の出戻り。

期間延長後に参加した正規軍の志願兵の皆さんの協力で、私達は《宇宙進出》を果たした。

目標の火星圏タレスに辿り着き、内部に突入して、そして…。

とうとう、私達兄妹は《武人兄ちゃん》を発見した。

★★★

『え…あれって、マジで兄ちゃんか…？』

勇希兄ちゃんは困惑した。

私が突然、名前を呼んだからビックリしたんだろう。

正直、無意識に叫んでいた自覚はあった。

100%、確証はない。ひょっとしたら、青白い部屋の中の者は違う人の可能性も捨てられなかった。

和希兄ちゃんは、道筋を示してくれた案内役のA Iに尋ねていた。

『あれが《ラルク》本人で、いいのでしょうか？』

『…その通りです。彼はずっと顔を隠していますが、正真正銘の《ラルク・トゥエラー》でございます。』

A Iが武人兄ちゃんの本名を告げた。

私の反応は、間違ってたかった。

『俺、全然わかんねえ、って思ったけどよ…。』

勇希兄ちゃんの素直な感想である。

多分、私も当てずっぽうに口を開いてしまった部分もあった。

《夢》さえなければ…私も青白い部屋内のフード男の正体はわからなかっただろう。

パソコンでディスクを書き込む時の音が流れてきた。

やがてそれは、テレビ放送が流れてこない時の砂嵐の音へと変わった。

これは、通信回線を求めている…？

『様子がおかしいな…。操縦士さんやマルロさんと連絡を取り合う時と、異なっている気がするんだが…。』

和希兄ちゃんの疑問はご尤もである。

緊急事態ですら、回線のノイズは少なかった。

妨害でもされていない限りは、通信のやり取りはスムーズに行えるように設計されている。

これはアレックスさんから、安心して乗る為の調整は頻繁にしていると教わっていた。

やはり、妨害の一種なのだろうか…？

私達が疑っていると、案内役のAIがはっきりと答えを告げた。

『これも開通の手段です。実はラルクは、特殊な機器を使用しておりまして…。』

「使用？」

『その辺でええよお前。後は下がるんや。』

男性の声が聞こえた。

機械音らしく、音がこもっている気がした。

他にも、鮮明に聞き取りにくそうだと感じていた。

でも、私達はわかっている。

話し言葉の表現の仕方が、特徴的だった。

《愛嬌弁》という方言が昔、愛嬌市内の人々で交わっていた事実があった。

時代の流れとともに、『標準化』された日本語を優先して使っていくようになって、方言の文化が徐々に廃れていった。

《愛嬌弁》を使うのは、私達の祖父母の代以上の人達のみだ。

ジェームズさんがさりげなく教えてくれた。

武人兄ちゃんは、《愛嬌弁》を猛勉強して習得した、と。

そう、この方言を使いこなす人で、私達が知る者は…やっぱり１人だけ。

男性の機械音の主は、武人兄ちゃんなんだ。

『承知しました。』

兄ちゃんの声に、ＡＩが引き下がった。

彼が指していた『お前』は、案内役のＡＩ本人だった。

ちょっとした雑音が入る。

引き下がったとはいっても、回線をオフにはしていない。

ポツ、ポツと、ノイズが耳に流れてくる。

ヘルメットの耳当ての部分はヘッドホンのクッションみたいな構造になっていて、ちゃんと音が聞こえる。

雑音の影響で耳が痛くなりそうだ。

でも、男性型の機械音だけど、これから武人兄ちゃんが話し始めるに違いないんだ。少しの辛抱だ。

『…よう来てくれたわ。【パスティーユ】。《期間満了》は過ぎてるやろうけど、延長したんやな。３ヶ月では足らん事、はなから知っていたで。』

武人兄ちゃんが私達に語りかけた。

もちろん彼の肉声ではなく、男性の機械音のままなんだけど。

『[ラストコア]におった頃と違うと思ったやろ？実はな…喋れない身体になってしもうて。今流れている言葉は、文字情報を今おる部屋の装置に打ち込んで、代わりに送らせてるんや。』

『喋れなくなったのかよ！』

『ちょっと変だとは、思っていたんですが…。』

喋れなくなった件について、兄達は驚いた。

私は言葉を発してないけど、彼ら同様の反応は見せた。

『声以外でも色々やられてしもうて、な。体調は、優れてるとは言い難いんや。こうして奇跡的に、立っとるけど。』

機械音なのに、武人兄ちゃんは呑気に語る口調で話しているようだった。

ここで私は、『期間満了』前日にマルロが打ち明けた内容を思い出した。

武人兄ちゃんは、『改造』させられた事を。

等身大以上のカプセルの中に、彼は放り込まれていた事を。

それは、彼の証言で真実味を帯びた。

武人兄ちゃんの身体は、ボロボロなんだ。

このままタレスの、今いる【レッド研究所】の中に居座り続けたら、彼の命が危ない。

案内役のA Iから、クーランがいなくなった後のこの星の現状を知った。

研究所の外で、タレスの民達が暴動を起こしている。

矛先は、【レッド研究所】だ。

民間人の勢力を舐めてはいけない。

彼らは数が集まれば、より強大な力を発揮する。

これは、地球の人類の歴史でも、同じように繰り返されている。

権力者に虐げられた民達は苦しい現状を変えたいが為に、行動を起こす。

行動は凶器となって、権力者やその賛同者に襲いかかる。

タレスでの権力者はクーランだった。

彼がいなくなってからは、『息子』のラルクが代理で担っている状態だ。

クーランの手下で活動していた過去が存在している。

武人兄ちゃんにも非はあるだろう。

だけど、この星の民達を私は何も知らない。

知らない人達に兄ちゃんが倒されて欲しくない。

合成、ではなく代替えの音声しか流れなくても、武人兄ちゃんと話ができないわけではない。

だから私は、率直な思いを伝えた。

「武人兄ちゃん。今なら間に合いそうだから、帰ろう？ここにいたら兄ちゃんが危ないよ。帰って、[ラストコア]で治療しよう？

元気になるよ。」

マルロは武人兄ちゃんを《ラルク》呼びして、『敵』だと告げた。

ピウスの残存兵達もマルロが引き入れたのだから、彼の肩を持つだろう。

私は、『敵』だとしても…兄ちゃんが完全にクーラン側に寝返ってはいないと信じている。

サレンさんの証言が、そう確信を持たせてくれたんだ。

100%全て堕ちて居るんだったら、サレンさんを逃したりはしない。

この半年間で、敵・味方の有利不利が読めるようになった。

あとはワガママ言わず、素直に行動を取るだけだ。

私の欠点は、兄達にもマルロにも、色んな物言いで指摘されている。

成長するにつれて、ここは変えていかないと…。

自分の是正については、帰ってからでもゆっくり考えられる。

まずは、武人兄ちゃんの返事を待つんだ。

私の発言の後、間が空いた。

今までの武人兄ちゃんなら、すぐに答えが返ってきた。

それは、兄ちゃんがまだ喋る事ができたからだ。

声が出せない状態の彼に、即答は困難だった。

私達は彼の言葉を、じっと待つしかなかった。

マルロが引き受けてくれているロボの軍団（＝マルロのかつての仲間達）の一部が、あの広間を抜け出してここまでやってくるおそれはあるだろう。

軍団以外に【レッド研究所】に勢力がいなくても、油断はできない。

時間に猶予はない。

切迫している状況だとわかっていても、私達は武人兄ちゃんに急かす事はできない。

ごく普通の学生から【パステージュ】のパイロットにさせたのは兄ちゃんである。

賛否はあれど、ほんの短期間でも私達の仲間として支えてくれた武人兄ちゃん。

無理に口を割らせるのはかわいそうだ。

ギリギリの拡大できる倍率で、青白い制御室の内部を眺めた。

画質が粗い中、兄ちゃんがタブレットっぽい板に、指でタッチする動作が見受けられた。

何かしらの行動を、私達に示すつもりなのは、はっきりと読めた。

言葉になって、返ってくる時が来た。

期待は、裏切られた。

『それはでけへん。確かに俺は、クーランの全てに同意してない。どうしても、ここから離れられへん。マルロが解除不可能だったHRの軍団の後始末をするように、俺も責任を取らんといかん。戦ばかりを引き起こすHRはな、滅びないとあかん。情がわいて、他の奴らは逃したけどな。』

「兄ちゃんが責任感なくてもいいよ！研究所自体のみを壊せばいいだけじゃない！最後までしがみつくな必要はないよ！」

私の声は、高くなっていった。

コックピットの中で、体が前に出ている。

否定はされても、諦めきれなくて。

私が訴え終わるまでに、兄ちゃんはタッチ操作に移行していた。

先程よりも音声が流れてくるまでの待機時間は、短かった。

『研究所自体おさらばして、施設丸ごと破壊すれば楽だろう。でもな…生物全てが資産を壊したから言うて、納得せえへん。命まで貰い受けなければ、心が晴れない奴やっておる。前に来たリュート王子もその例になるで。』

機械音の男性の声が出ている最中も、武人兄ちゃんはタッチ操作に集中していた。

『あの子らにはちゃんと話が出来なくて申し訳なかった。俺には発声機能の喪失だけじゃなくて、体内に内臓を《食べる》微生物が注入されとるんや。クーランに逆らうと、内臓を蝕んでいく仕掛けになっとるんや。本気で挑んだのは、クーランが用意した【宇宙犯罪者】達と、リュート王子一行のみや。【犯罪者】達は噂でも知ってるような奴らで覚悟しとったからええよ。王子達はな、本音を言えば戦いたくなかった。第2の人生を順調に歩んでいけてるんやったら、俺はそれでええんよ。

クーランの命令で星を滅ぼす任務を何度もこなしたけど、民達の命までは取るつもりは無かった。効率性を高めたのも理由の1つやけど、無関係の者達まで犠牲になってほしくはないんや。ライフラインの破壊だけでも、十分星は潰せる。あとの分かれ道は己の思考で切り開くしかない。』

辛辣な発言をしたけどな、と武人兄ちゃんの声明は続いた。

一星の次期王様になるリュート王子に対しても、平和に暮らせと願う兄ちゃん。

もしかすると、私達が駆け込んできたのも、嫌なのだろうか。

それはそれでショックだ。

でも、兄ちゃんの気持ちもよくわかる。

誰でも幸せを望みたいんだ。

幸福を味わってほしい相手は、王子達ではなかった。

『俺が謝罪せなあかんのは、君らにもそうや。勝手に危険な所に行かせて、申し訳ない。俺が消えてから、ずっと苦しかったと思う。マル口を信用できるまで、時間がかかったやろ?』

『兄ちゃん、何でマル口を知って…。』

『入港前の解析業務で、ラルクに全て情報は行き届いております。』

案内役のA I が教えてくれた。

A I は再び沈黙に徹した。

『マル口が地球に降下したと聞いた時点で、そこまで戦禍が広がらなかったのも耳にしたからなあ。よろしくやっとなるやろうと、なんとなく察しとった。

宗太郎が導入を決心したのは見事や。怠慢やろうけど、地球は耐えられそうやと信じていた。宇宙船は大層傷んでしまったやろうけどな。よう改良したなあ。』

機械音の声はどんどん流れてくる。

武人兄ちゃんは黒いフードは外していた。

ずっとタッチの操作を繰り返していた。

口で喋れなくても、なんとか言葉を紡ごうと努力をしている。

兄ちゃんは兄ちゃん、この無機質で暗い施設の中、ずっと我慢していた。

マル口は兄ちゃんの《育ての親》クーランは、歪な愛情を抱く研究者であると説明した。

厄介な人に監視されていたら、脱出の機会だって失うだろう。

よく機会を伺って、武人兄ちゃんはクーランを仕留めたもんだ。

《育ての親》と《息子》の間柄なら、関係性が狂気じみていたとしても、結びつきを途切れさせるのは難しいだろう。

サレンさんの目の前で、兄ちゃんはクーランとの縁を完全に切る行動を示した。

後始末として今、ここにいるんだろう。

私達が手を取って、武人兄ちゃんをここから連れ出したい。

でも兄ちゃんの意志は、『逃げない』と拒んでいた。

ロボ形態の【ブラッドガンナー】に姿を変えていない兄ちゃんならば、無理矢理引っ張り出すのは容易かもしれない。

ただ、彼の意志に反してまで救出に力を注がないといけないのかな？

どうしても自分の良心が、救出活動を遮ってしまう。

災害に巻き込まれているなら、心情なんてお構いなしに困っている人を助ける。

これは？

研究所内で騒ぎが起きているのは、マルロが交戦しているあの残骸だらけの広間のみ。それ以外は、閑散としていた。

災害と呼ぶには、程遠い。

これは王子達にも共通するんだけど、[レッド研究所]に突入したのは私達[ラストコア]側だ。

災害ならば、私達が起こした事になる。

見方を変えれば、[研究所]の重要人物を奪取しに来たと捉えられるだろう。

私達の行動は、善にも悪にも変えられる。

第三者の視点によって。

この球状のホール内部に、第三者の姿はない。

2人の兄達も私側の当事者である。

だから、今の出会いが正しいか間違っているかなんて、判断がつけられない。
となれば、自分自身の直感を、信じるしかない。

色々考えこんでいると、武人兄ちゃんは言葉をタブレットに入力した。打ち込まれた言葉は、機械音声によって私達に伝えられた。

『王子達の時は伝達ツールがなかった。戦う事でしか、彼らを退けられなかったんや。せやけど、今は大丈夫。繋ぎとしての道具を使っている。ごちなくとも、最低限のやり取りはできる。君らに、選択肢を与えられる。』

選択肢？

一体、私達に何を選ばせてくれるのだろうか。

考える間もなく、兄ちゃんの代理音声は流れてきた。

『今の俺の立ち位置は、君らの敵になる。頼りなくとも、クーランの後継者として君らを迎えている。それでも抑止力を働かせた方や。研究所内はスムーズに進行出来へんから。』

『あの狭い通路の枠組みは、所謂トラップの跡だったんですね…。』

和希兄ちゃんが言った。

私も上の兄の発言で、一連の流れを思い出した。

タレスの出港口からここまで、私達のはめられた場所はその残骸だらけの広間しかなかった。

マル口の元仲間達らしきロボ達が、うじゃうじゃ浮上した。

マル口が自ら率先して、仲間達への処理は己のみで尻拭いすると決めた。私達は彼の身を案じながらも、先に進んだ。

おかげでこうして、武人兄ちゃんと向かい合って言葉を交わせる。

《会いに行く》のが当初の目的だから、私の目的はとうに達成していた。

もう少し踏ん張りたい欲は誰でもある。

欲を出して、兄ちゃんと一緒に帰ろうと誘った。

彼は《敵》の立場になっていると、私達に告げた。

これでは、楽に帰還なんて望めない。

選択肢の内容を聞くまで、私達は黙っていた。

『君らはよくやってくれた。褒めたい気持ちは十分にある。逃げんと、ここま
で辿り着いた。』

正直、君らにもあの地球で幸せに暮らしてほしい。俺に地球を襲う気は更々あ
れへん。俺が権力者と暫定されとるが、民達に乗っ取られても構わんと考えと
る。選択できるのは今や。出口への道は確保しとる。俺の言った通りに進め
ば、安全に出れる。残るか去るか、どっちがいいんや？』

「残ると、一体どうなるの？」

いちいち聞かなくとも、私の脳内では何を意味するのか察していた。

勘違いかもしれないと、一縷の希望を残して。

簡単に返事をしにくい質問をしたし、随分間が開くんじゃないかと身を構えて
いた。

兄ちゃんのタッチ操作も、段々と慣れてきた。

最初の時と比べて、タイムロスが大幅に削減されていた。

『俺と対決しなければならなくなる。つまり戦闘を開始するんや。君らの判断
次第で、俺は対話を放棄して君らを叩く。機械を介してる状態やけど、俺が
笑って話ができるのは今のうちだけや。どうなん？君らは何を望むん？』

武人兄ちゃんが私達に与えた選択肢は、ここぞって時の重要な内容だ。

『残る』と『去る』の、二者択一の問題を突きつけられている。

私達が確実に生き残れる道としては、『去る』一択でいいだろう。

兄ちゃんは出口を用意していると言った。

今までもマル口の元仲間達以外攻めて来なかった。

兄ちゃんの配慮なら、私達を安全に通してくれるだろう。

だけど、これには代償がつく。

武人兄ちゃんの今後の行方を、一切追えなくなる。

【ラストコア】の、【パスティーユ】のパイロットとしての期間を延長してもらっても、3ヶ月が原則だ。

これ以上の引き延ばしは無謀である。

【ラストコア】がずっと目標として掲げてきた《宇宙進出》。

今回が2度目ではあるものの、宇宙へ出る事はなかなか容易にできない。

時間も労力も費用はかかるし、無関係の人間にも迷惑が被る。

兄ちゃんの『行方』に囚われて再延長しても、費やす日数が余計に無駄になってしまう。

この場の機会を逃してしまうと、もう2度と、武人兄ちゃんに会えなくなる。

だから、私は決断した。

まずは、2人の兄達に承諾を求めた。

「和希兄ちゃん、勇希兄ちゃん。私、武人兄ちゃんに挑みたいんだ。手が触れ合いそうになる所まで来て、兄ちゃんに背を向けたくないの。」

『やっぱり未衣子は戦いたいんだな。俺達の中で1番会いたがっていたから。』

『でも本当にいいのかよ？勝負次第で帰れなくなるだろ？』

強い否定自体は返ってこなかった。

しかし、勇希兄ちゃんは私の、兄妹全員の身を案じていた。

一抹の不安がよぎるのも、致し方ないと思う。

優しい武人兄ちゃんではあるが、彼は他の生物よりも強力なHR。

多数の宇宙の星を滅ぼした【宇宙犯罪者】の汚名も持ついわくつきでもある。

対して私達は地球の人間。

3 機合体ロボ【バステューユ】の力を借りなければ、HRやそれ以外のロボにも立ち向かえない、非力な存在である。

両者の力量を比較すると、武人兄ちゃんの方が圧倒的に大きいだろう。

『去る』を選んでひたすら待ち続けるのも無謀だけど、『残る』を選んで勇猛果敢に挑戦しようとするのも、これまた無謀ではある。

どっちにしても、私達への選択肢は過酷な冒険を必要とする重大さを含んでいる。

ならばいっそ、私は『残って』武人兄ちゃんと対立する。

終焉の先で地に着けられるかどうかはわからなくても結構だ。

一戦交えずして『去って』、後悔したくない。

武人兄ちゃんを全力で止めるのは、私達兄弟の役目だ。

他の知らない誰かに、この役目を譲りたくない。

「私はもう、期間の延長が決まった時点で覚悟はしていたわ。サレンさんの証言で、武人兄ちゃんを連れ出せる可能性があるかなあ、と思っただけだよ。兄ちゃんがその気なら…私も本気で立ち向かいたい。

あなたを、倒すよ。武人兄ちゃん。」

私の発言は兄達と《ラルク》双方に向けていた。

熱意は先に、2人の兄達に伝わった。

『どちらにせよ、武人さんを止める必要があるんだ。脅威の存在として、この星の内外で知らしめているのならば。』

『俺達は生きていて欲しかったけどなあ…。もう、腹を括るしかねえだろ？ 兄妹で兄ちゃんを、全力で止めに行こうぜ？』

兄達から同意の意志を貰った。

これで危ない目に遭遇しても、迷う事はない。

生き延びたいなら、どんな手を使ってでも兄ちゃんに足止めをすれば良いだけ。

勝率がわずかでも、ゼロじゃないなら勝てるかもしれない。

逆転勝利という奇跡だってあるんだ。

案内役のAⅠが割り込んだ。

ちょっかいや迷惑をかけに来たのではない。

最終的な決断の、確認だった。

『それでは、《ラルク》との対決に是を示すという形で進めていきますね?』

『え?何でお前が来てんだよ?』

『重大な決定には、二重の認証をするよう指示を受けておりますので。よろしいですね?』

「お願いします。私達は敗れても後悔しません。いいえ、悲しみを引きずらないように、彼を乗り越えていきたいんです。」

『承知しました。《ラルク》に『残る』を選んだ旨を伝えます。』

案内役のAⅠと私達の会話のやり取りは、ここで終わった。

静寂の度合いが、強くなった。

拡大したモニターの映像には、青白い部屋で武人兄ちゃんが、タブレット端末を横に投げ捨てる姿を目撃した。

そして、爆発が起きた。煙は部屋の内外で広がっていく。

呆気に取られている暇は、なかった。

【パスティユ・フラワー】の目の前に、赤いラインが光る黒いロボが突進してきた!

最低限の微々たるバリアは張っていた。

あまりの咄嗟の行動に、【フラワー】は手持ちのロッドで黒いロボとの間隔を取った。

突進で機体ごとぶつかると、それだけで致命的な損傷に至ってしまう。

突進による加速で、【フラワー】はどんどん後ろへ押される。

今度は背後の心配をしないといけない。

数秒の時間で回避に移るのは厳しかった。

だから私は、バリアの強度を調整した。

衝撃による破損を、少しでも抑える為に。

結果的に、【フラワー】は球状の広間の壁に、叩きつけられた。

背後にバリアの強度を高めただけで、【フラワー】自体に傷は少なかった。被害は壁のヒビ割れのみだ。

「くっ…！」

私はレバーを握っていた両手に、痺れの間を味わった。

兄ちゃんに対して『残る』を選択した後、1分もかからない内に突撃を仕掛けられた。

これが、武人兄ちゃんのHRの、ロボ形態である【ブラッドガンナー】の実力…？

私の胸の奥に、得体の知れない痛みが押し寄せてくる。

『怖い』という感情。

今までそんな経験を何度もしたけど、度合いが最高潮になるのはこれで3度目だろう。

1つ目は10年前の娯楽施設の襲撃での微かな記憶。

2つ目は同級生のお兄さん達からの過剰な身体接触による、忘れられないトラウマ。

今の突進が3つ目の『怖さ』を感じた瞬間だった。

手の痺れはまだ残る。その回復を待つ時間はない。

私達が戦闘の許可をした以上、【ブラッドガンナー】は攻撃の手を緩めないだろう。

アレは突進後、距離を離して宙で固定していた。

待機のつもりなのかはわからない。

静止の時間は終わり、【ブラッドガンナー】は次の突撃を開始した。

迫ってくる、黒いロボ。威圧感がひしひしと伝わってくる。

対処を、対処を考えなくては。

私が手を焼いていると、突如コックピットのスピーカーが怒鳴り声でやかましくなった。勇希兄ちゃんの声だった。

『未衣子！今すぐ俺に代われよ！』

言いたい事は即座に理解した。

【フラワー】から【サニー】へのチェンジである。

この広間には、私達【パスティーユ】と、武人兄ちゃんの【ブラッドガンナー】しか存在していない空間である。

実質、1対1の対決だ。

広範囲の複数の敵を片付ける【フラワー】よりも、対人戦闘で発揮する【サニー】に代わるのが良さそうだ。

「わかったよ。勇希兄ちゃん、行って！」

私は下の兄の要求を認めた。

【パスティーユ】はジェット機に分離しなくても、形態チェンジが可能である。

両目を隠さないといけない位の眩しすぎる光を照らして、機体の外観を変化させる。

《剛力ガラススフィア》のトライアングルを動かす。

三角形の上の頂点に、勇希兄ちゃんの中にあるコックピットが居座った。

光は時間が過ぎれば、薄くなっていく。

ピンク色の可愛い雰囲気ロボから、太陽のように輝く美しい黄色のロボへと変貌を遂げた。

【パスティーユ・サニー】がこの広間に姿を見せた。

私はサポート役に回った。

もうすぐ【ブラッドガンナー】が【サニー】に接近するかと思われた。

動きは一旦、停止していた。

【パスティーユ】の形態チェンジ時に発する光は、まともに直視すると失明を起こしやすい。

遮光性のあるゴーグルや板でも使用しないと、目眩を覚えて倒れる危険性もあるんだ。

発光に気づいた側が守りの体制に入るのは当然だ。

できるだけ距離を離して、尚且つ目を、カメラアイを手などで覆い隠す。

発光の継続時間は微々たるものだから、淡くなるまで耐えればなんとかなる。

コックピット内の地図データが示す、赤い光の点。

それは元々、青い光の点だった。

いつの間にか、色が変わっていた。

点の色は識別で自動変化したり、手動操作で変える場合もある。

【ブラッドガンナー】を示す光の点は、直前まで青く灯されていた。

【サニー】のサポートに回るようになってようやく、色の変化に気がついた。

突進で襲いかかってきたから、自動変化したのか。

頭の回転が速い和希兄ちゃんが密かに切り替えていたのか。

真相はわからない。

今は…真実を追及するほど余裕はない。

【ブラッドガンナー】は眩しい光のショックから逃れる為に一時停止した。

止まる理由が無くなれば、動き回っても何の問題もない。

障害物は、無に等しいから。

『味方』の青から『敵』の赤に変更された光の点は、もう1つの青い光の点へと近づいていく。

突進時と変わらない、豪速で。

地図データ上の長さで言うと、2つの点の間隔はわずか2、3センチである。

映像では、【ブラッドガンナー】が銃を両手に持って、真っ正面にやってくる。

メインパイロットになった勇希兄ちゃんも、本気で左右のレバーを握る。それに呼応するように、【サニー】もパンチを繰り出す時の構えを取った。

【サニー】は姿勢を低くして、助走をつけた。

【ブラッドガンナー】目掛けて、一直線にダッシュで飛んだ。

機体が黄色の薄い膜で覆われる。

機体の周りは膜の色よりも濃い黄色の枠で縁取られる。

これらは、【サニー】が格闘攻撃を仕掛ける時でしか、現れない。

【サニー】の右肘が、胴体より後ろに引いている。

【ブラッドガンナー】の至近距離で、強烈なパンチを発揮しようとしている。

【サニー】の威力は、ただのパンチではない。

硬度の高い壁を突き破ったり、地面を裂いて中に突っ込んでいける程の破壊力を備えている。

【ブラッドガンナー】に拳が向けられただけで、ロボの胴体に穴を開ける事も容易だ。

一撃必中で、戦闘が終わる。

エネルギーの大量消費が心配だが、脱出までに持続すれば問題ないだろう。

もしもの時用に、予備エネルギーの交換も数回できる設定も行えるようにしている。

『うおりゃあああああ！』

勇希兄ちゃんの叫び声だ。

彼は目の前の俊敏な黒いロボにパンチをかまそうと真剣だ。

叫び声は、彼の心の原動力になろうとする。

勇希兄ちゃんの迫力は、兄妹の私達にも感じていた。

勢いだけでは、武人兄ちゃんには立ち向かえない。

そんな事、【フラワー】が壁に叩きつけられた時点でわかっていたのに。

【ブラッドガンナー】は受け身のポーズを取らない。

防御してダメージを抑えよう、なんて考えなかった。

彼の武器である2丁の銃の先が、【サニー】に焦点を当てた。

銃口が目の前に姿を見せているという事は…。

「勇希兄ちゃん！」

『あんだよ！？』

『何だよ』、と下の兄は言おうとしていたが、あまりにも突然なので多少の発音違いが生まれた。

今は言葉の違いなんかよりも、目を背けてはならない重大な動きに気をつけなといけなかった。

私が叫んだとしても、モニターの映像でかなり拡大された【ブラッドガンナー】の前では、遅かった。

【サニー】は相変わらず、右手のパンチを目の前の黒いロボに決めようとしている。

止めに入ろうとしても、機体は急停止できなかった。

緊急停止の機能も搭載していても、完全停止に数秒かかる。

銃口の奥が、明るくなった。まごう事なき濃い赤の光であった。

光の強度が増していった時に、銃口から光の塊が溢れ出た。

こんな至近距離なら、回避行動を選択するのは不可能だ。

防御に徹するの一択だ。

私と和希兄ちゃんは急いで、その場凌ぎのバリアを精一杯張り巡らせた。

濃い赤の光の塊は、チューブでクリームを絞り出すように外に溢れた。

直線を描くはずだったそれは、その場凌ぎのバリアで粗方弾き返した。

塊はバリアで枝分かかれし、【サニー】の後ろへ流れていった。

【ブラッドガンナー】が放つビーム砲に耐えるには負荷がかかり、【サニー】の攻撃が遮られる。

ビームに押された【サニー】は徐々に、後ろへと退けられる。

どんなに頑丈なバリアを張っていたとしても、限界は訪れる。

バリアが耐えきれず消滅した時、【サニー】は一気に壁に衝突するまで飛ばされた。

ビーム砲の直撃は斜め下に機体をずらしておいたので、免れる事ができた。

【サニー】が被った損失は、ビームの勢いで壁に衝突した時の、細かな破損のみで済んだ。

メインのエンジンに被害はない。

ちょっと壁にめり込んだので、外れるのに多少の時間はかかったが。

壁から離れた後の行動を、どうにかしないといけなかった。

【ブラッドガンナー】は非常に素早い。

次の手も、一瞬で繰り出すだろう。もたもたしている暇はない。

予想通り、【ブラッドガンナー】は【サニー】へ、3度目の突進を仕掛けてきた。

距離が縮まる前に対策を…！

今度は、和希兄ちゃんの声が流れてきた。

『勇希、回避率を上げよう！』

無茶振りかな…と思った。

頭の良い上の兄が考え無しにこんな事言わない。

裏に何かあるはずだ。

私はそう信じていたので、和希兄ちゃんに動揺しなかった。

下の兄はメインで動かしている影響も相まって、混乱していた。

『今【サニー】なんだぜ！エネルギーは交換できるのかよ！』

『違う！チェンジするんだ！』

普段は温厚な和希兄ちゃんの、滅多にない怒鳴り声。

私と下の兄のように、焦りが伝わってくる。

『チェンジ』の一言で、今から何をすべきなのかを理解していた。

勇希兄ちゃんも驚いた表情を見せても、『チェンジ』の意味はわかっていた。

『何に代わるんだよ、兄貴…。』

意味は知っていても、【サニー】以外の2形態のどちらに代わるかまでは予測
つかなかったみたいだ。

多分それは、彼の反応が遅れただけ。

まさか、と言いたそうな顔つきを、下の兄が示したからだ。

『【スカイ】に代わろう、勇希。どうも相手はかなりの瞬発力を持ち合わせて
いる。』

『兄貴…。』

『守り切るだけでは、【バステューユ】全体に負担がかかる。スピードを上げ
て避ける方法も取るのがいいだろう。』

『攻撃はどうするんだよ！』

『【スカイ】も非力ではないさ。剣は1本だけじゃないんだ。複数のパターンを用意すれば、適切な手段が取れそうだ。』

和希兄ちゃんには、自信がありそうに見えた。

3人ともヘルメット越しで、極端に表情を崩さないとわかりにくい。

それでも、上の兄の唇は、下に弧の字を描いていた。

笑っている。

一瞬で落としかねない危機が迫ってくるこの状況下で、何かしらの対策を考えているんだろうなあ。

『わかったぜ。兄貴、頼む。』

勇希兄ちゃんが折れた。

私との些細な喧嘩をしょっちゅうやってしまう下の兄が。

相手が長兄だから、つい従ってしまうのもあるんだけどね。

和希兄ちゃんは私にも名前を呼んで、確認を取った。

上の兄には『いいよ。』と、了解の返事をしておいた。

【サニー】の機体が光る。

【パステージュ】、2度目の発光だ。

〔天海号・弐式〕からタレスの内部に突入したジェット機の合体時も光るから、実質は3度目だ。

武人兄ちゃんが身を潜めていた青白い部屋の見える球状の広間に足を踏み入れるまでは、形態チェンジは行われなかった。

途中でマルロの元仲間達に絡まれそうにはなったけど、マルロが足止めしているから無駄な消費をしなくて済んだ。

全方位からの攻撃に備える為、まとめて蹴散らせる【フラワー】のみで奥へ進んで行った。

武人兄ちゃんとの戦闘開始から、時間は5分くらいしか経っていなかった。

2回も形態チェンジを迫られる形になっている。

【ブラッドガンナー】に対抗するには、それなりの策が必要だった。

もう少し、慎重になるべきだったのだ。

戦闘開始後の今、悔やんでも遅い。

『残る』と決めた以上、武人兄ちゃんの『壁』を乗り越えるしかない。

生き残ればいいんだ。

勝負に、勝てばいいんだ。

ここには、スポーツのルールみたいな決まりなんて存在しない。

勝利を掴む為に、手段は問わない。

形態チェンジの制約は当然ない。

必要とあらば、どんどん適応していくよう、戦況を持っていった方がいい。

【スカイ】はそれなりに、特徴を持っている。

俊敏なスピードは、活用次第でうまく捌ける。

回避行動を頻繁にやって、隙を見つけた時に剣で突く。

【ブラッドガンナー】の動きを、ピンポイントで命中して停止させる。【サニー】の豪快なパンチとは異なる攻撃法だ。

光はほぼ一瞬で、弱まっていく。

水色のボディは、そこで披露された。

ガッチリとした筋肉質の【サニー】と比べて、スラリとした細身の【スカイ】。女性型の【フラワー】よりは肉質はあるので、ちゃんとした男性型のロボである。

【サニー】へ発泡した銃をそのまま持っていた【ブラッドガンナー】は、カメラアイの部分を腕で覆い隠していた。

走行も、止めていた。

HRとしてももの凄く強い武人兄ちゃんも、眩しい光は苦手ようだ。

またこれで、一方的な衝突を避けられた。

【スカイ】は光の消滅後、瞬間移動を繰り返した。

モニターの映像の視点がコロコロ変わる。

じっと眺めていると、乗り物酔いでも起こしそうだ。

攻撃面は、上の兄に任せるしかない。

あっち行ったりこっち行ったりと、地点を頻繁に変えていた。

こうすると、相手側には敵が分散して数が増えていると錯覚させる事が容易になる。

パッと見ただけでは同じ個体の物の数が増加しているので、1つ1つ倒すのは効率が悪い。

一気に片付ける全体的な武装で早急にけりをつけるのがいい。

【フラワー】のロッドを振り回して弾を放つ、広範囲に行き届く攻撃は、エネルギーを…体力を大きく消費する。

お手軽なメニューを選ぶには、相当の対価を支払う犠牲がつくのと同義だ。

武人兄ちゃんがまだ【ラストコア】にいた時に、【ブラッドガンナー】の武器について、ざっくり教わった。

【ブラッドガンナー】は銃を主体とした多数の武器を出力できる。

電撃ショックを与える銃、針を弾丸として飛ばす銃。

身体を張るので減多に使用しないらしいけど、大砲も兄ちゃんの手で生み出せるんだ。

本物の【スカイ】を割り当てるより、全方位に銃を連射していくのが手っ取り早いだろう。

【ブラッドガンナー】は、【スカイ】が高速で動き回る輪の中心で、じっとしているだけだった。

手を出して来ないのを変だと思っている。

でも、行動を緩める事はなかった。

【スカイ】の剣は、2本だけではない。

切れ味抜群の、座高ぐらいの長さの剣が2本あるだけで…あとは偽物だ。

外見自体は本物と変わらない、水色の剣。

違うといえば、やはり切れ具合だ。

本物の双剣はロボの機体どころか、硬い地面や壁も奥まで突き刺せる。

グリップを握る機体の力が加わる事で、荒いトンネルの作成も可能である。

がっしりはしてないけど、ちょっとした接触で折れたりはない。

偽物の剣は、想像通り折れやすい。

【パスティーユ】のエネルギー供給がある限り、生成ができた。

私が操る【フラワー】のロッドを駆使した攻撃と、ほぼ似ている。

大量の剣を、広間に配置した。

刃の矛先は、未だじっとしている【ブラッドガンナー】に定めていた。

逃げないのが不思議だった。

同時に、今がチャンスだと捉えた。

布の縫い目しか突き刺せない小さな針でも、束になってかかれば凶器になる。

数えるのが面倒くさくなる程の膨大な剣を配置し終わると、【スカイ】は後ろに下がった。

剣を並べただけで、リストバンドのような厚みのある輪が出来上がっていた。

合図は、【スカイ】の右腕1本で十分だった。

真っ直ぐに腕を上げて、直角に腕を下ろす。

全ての配置された剣が、【ブラッドガンナー】へ直進した。

【ブラッドガンナー】は避ける事なく、大量の剣を受け止めた。

結果、爆発時の煙があっという間に拡散していった。

威力は大きい。

普通に考えて、これだけ大爆発が起きれば、機体が全焼して使えなくなる。

【パステージュ】のようにコックピットが備わっているロボだと、緊急の脱出をしないといけなくなる。

機体そのものの使い道がなくなれば、和希兄ちゃんが取った策はひとまず成功だろう。

でも、HRは違う。

ロボ等の機械に変貌を遂げる特殊な生命体は、そう簡単にはやられない。

紛い物の剣でも、まとめ上げれば凶器になる。

紛い物の剣だからこそ、本物の武器ですぐに壊されてしまう。

【ブラッドガンナー】は非HRのロボと異なり、大爆発に巻き込まれてもピンピンとしていた。

その証拠に、目の前にやって来てるのだから。

サポートに回っている私でも、これは非常にまずいと感じていた。

【スカイ】はとりわけ、3形態の中では耐久性が低い。

機動性に割り振っているのだから仕方がないのだけど。

応急処置でバリアを強引に展開させた。

耐えてくれるといいんだけど。

実際、ぶつかった。

体当たりで強引に飛ばされる、まではいかなかった。

【スカイ】は本物の頑丈な双剣は、きちんと残している。

和希兄ちゃんは、もしもの対策まで考慮していた。

双剣の刃を【スカイ】の胸元でクロスして、【ブラッドガンナー】の体当たりをギリギリで防いだ。

だけど、徐々に後方へ押されていく感覚はあった。

地図データでも微かに私達を示す青い点が下がっているし、モニターの映像でも右下に《DANGER》の文字の点滅が繰り返されている。

【フラワー】や【サニー】の時でも、《CAUTION》の点滅で済んだのに。これは、かなり厄介だ。

『くっ、う、うう…！』

和希兄ちゃんは堪えている。

モニターに上の兄が歯を食いしばる様子が目についた。

ヘルメットは口元まで覆っていないので、緊急時以外は形がはっきり見える。

急いで、チェンジするしかない。

しかし、それは一足遅すぎた。

案の定、本物の双剣はバラバラに砕けた。

欠片になった双剣の刃は、乱雑に散っていった。

次の一手を取れない【スカイ】は、双剣のグリップを握りしめたまま、呆気にとられていた。

何もしていないと、敵が付け込んでくる。

【ブラッドガンナー】は自身の身体を横に捻り、右脚で勢いよく【スカイ】を蹴り飛ばした！

右脚の蹴りをまともに受けて、【スカイ】は思いっきり飛ばされた。

終着点は当然、広間の壁だった。

細身の【スカイ】は軽そうに見えるが、ジェット機3つ分を合わせた重量は必ずある。

【スカイ】の全身が、壁にめり込んだ。

それは、ゴツイ外観の【サニー】よりも深く沈められた。

できてしまった窪みから、今度は上手く外れなかった。

身動きが取れない状況に陥ってしまった。

【ブラッドガンナー】は甘くない。

完全に動くのが困難な状態の私達に、トドメを刺しにかかるだろう。

【パスティーユ】側に手段が残されていないのか？

いや、僅かだが残されている。

《再構築》による修復である。

その範囲は多岐にわたる。

傷の埋め合わせから、千切れた手足の生産までできる優れた機能がある。

代償として、やはりエネルギー問題が引っかかる。

アレックスさんは予備エネルギーを最大搭載数まで補充してくれた。

《再構築》の過信はするな、と注意された。

これについてはアレックスさんも、まだ試作段階と言っていた。

頻繁に使用して【パスティーユ】が壊れる可能性も否定できないとも教えられた。

だから、先進的な機能については欠損した時に使おうと、私達で決めていた。

五体満足の現段階では、もう少し様子を見るべきと考えていた。

【ブラッドガンナー】に直接打撃のダメージを受けているので、【スカイ】も所々に傷や凹みが散見された。

傷口を広げたり、凹凸具合が大きくなると、機体の故障にも繋がってしまう。

《再構築》と機体の増強で、危機的状況を免れたい。

【ブラッドガンナー】はとどまる事を知らない。

武人兄ちゃんの温情で、一発で仕留めていないだけ。

次はない。

【ブラッドガンナー】はダッシュで移動を加速し、銃口を向けた。

右手に持った銃一丁で、最後にするには十分らしい。

【スカイ】は、かなり危篤な状況に陥っていた。

コックピット内の操作は、正常に動けるのに。

手足よ動け、と念じ続けている。

何度も何度も、コックピットの操作に全力を尽くしていた。

どんなに指で滑らかなタッチをしても、勇希兄ちゃんが両手でレバーをカチャカチャ動かしても…《ERROR》の表示ばかりが映し出される。

諦めろ、と誰かが告げてきている。

武人兄ちゃんは喋れない。

武人兄ちゃんの声は聞こえない。

『諦めろ』の声は、兄ちゃんの声質ではないと理解していた。

たった5文字の言葉。

ネガティブなワードだから、反復されると頭に、心に響いてくる。

『諦めろ、諦めろ』

連呼が始まった。兄達が聞き取れているかわからない。

私だけ感じてるかもしれない。

『諦めろ、諦めろ、諦めろ』

いい加減、やめて欲しい。

胸が痛くなる。

操作には慣れているのに、手が震えてしまう。

言葉の力は、時に偉大さを発揮する。

パニックになって、引きずり込まれそうになる。

逃げなきゃいけないのに。

銃口から弾が発射されたら、もう助からないだろうに。

『諦めろ』の連呼は、未だに木霊する。

《剛力ガラススフィア》で守られたコックピットの脱出を考えても、この閉じられた空間では捕獲されてしまう。

無意味な行動だ。

連呼し続ける言葉に、同調すべきなのか…。

身を委ねかけた時だった。

緑の光が広がる奇跡が起こった。

ライトグリーンの光は、瞬く間に広がっていく。

迫ってくる【ブラッドガンナー】は光に押され、進行を抑制された。

光がチカチカと点滅を繰り返すので、まともにモニターの確認なんてできなかった。

顔を上げた時には既に、光が消滅しかかった頃であった。

グレーの煙がモクモクと上がっている。

やがてそれは晴れていき、視界は良くなっていった。

壁にたくさんの、掘り込まれたような跡がつけられていた。

きっと、煙は壁を削るのに散らばった埃だったのだろう。

削るとは、どういう事なのか？

答えはすぐさま判明した。

映像の両端に、また煙が漂ってきていた。

かなり速いスピードで、光の線が滑らかに流れていった。

この攻撃は…！

『子供達、今出れるようにしたから離れて！』

私達兄妹とマル口についてきた、サレンさんの声。

【ホーンフレア5 t h】の飛行と機動性を補助する弓型の機体、【ウインドアーチ】に乗ってやって来た。

サレンさんの指示通り、私達は再度【スカイ】を動かす努力をした。

今度は、抜け出せた。

【ウインドアーチ】のビームで、溝の縁を削り落としたからだ。

傷だらけの【スカイ】。

元々頑丈なつくりになっている【パスティユ】だからこそ、空間内で飛べた。

【ブラッドガンナー】の姿がない。

地図データの尺では私達よりも5センチ先に赤い点が灯されている状態なんだけど。

逆に、【ウインドアーチ】が【スカイ】の隣で止まった。

モニターの映像でも、専用のスーツとヘルメットを着用したサレンさんが左端に表示された。

『ありがとうございます、サレンさん。』

和希兄ちゃんが感謝の言葉を述べた。

ここでうかうかしていられないので、サレンさんが私達を誘導していた。

『広間の直前の通路まで行きましょう。武人さんは埋もれたままですけど、いつ這い上がってくるかわかりません。』

【ウインドアーチ】は【スカイ】の前をって行った。

緑色の弓型の機体を示す青い点は、私達が最初に出た広間の入り口を目指していた。

【ブラッドガンナー】は今、下に積もった破片の下にいと彼女は言った。

【スカイ】よりピンピンしているんだし、復活は早いだろう。

私達はサレンさんの指示に従った。少しでも、冷静になるように。

★★★

武人兄ちゃんが拠点としていた広間の直前の通路まで、【ウインドアーチ】と【スカイ】は戻ってきた。

通路は狭く、機体が2体横に並んただけでギリギリレベルの幅だった。

【ウインドアーチ】が縦横に形態を変えられるので、ロボ2体並ぶよりも隙間ができ、間隔に余裕があった。

【スカイ】も細身のロボだから、間隔はさらに広がった。

武人兄ちゃんはまだ、朽ち果ててはいない。

赤い点はずっと灯されたまま。

でも、直前までの戦闘よりも、気配を感じられなくなった。

雪崩のように流れ込んできた壁の破片で、大ダメージを被ってしまったのだろう。

積み上げられた破片の山から顔を出すには、時間がかかりそうだ。

『気休めだけど、小休憩しましょう。俊敏な相手は疲れるでしょう？』

「ピンチの所救っていただいて嬉しいんですけど…マル口は大丈夫なんですか？」

私はサレンさんに、とても重要な存在になった者の安否を尋ねていた。

サレンさんは急に、表情を曇らせた。

少し頭を前に傾けていたのは、映像でも見てとれた。

彼女はバツが悪そうになりながらも、正直に話した。

『マル口さんは、1人で猛攻を食い止めているわ。』

『逃げて来たのかよ！』

『落ち着け勇希。焦る気持ちはわかるけど、彼女は…。』

和希兄ちゃんが勇希兄ちゃんの怒りを抑えていた。

【ウインドアーチ】の外観自体をよく見れば、支援以外の運用が困難だろうと理解できる。

この機体で多数の飛び道具を使う敵相手に挑むには、それなりの戦略が必要になる。

下の兄がサレンさんを責めたくなるだろうけど、仕方ないもある。

マル口の心配は、全員がしている。

たった1人で大量の敵を処理しようと奮闘している。

たとえ正体が彼の元仲間であったとしても…和解するにも時間を要する。

効率的に攻めるなら、先にマル口の元仲間達を片付けるのが最善策だ。

1番熟知している彼が、単独で阻止しようと踏ん張っている。

私が武人兄ちゃんに《会いに行きたい》のを、知っているから。

自分の元同志からの猛攻に、私達を巻き込みたくないから。

だからマル口は、1人で敵の進行を防ごうと耐え凌いでいる。

サレンさんを責めるべきではない。

むしろ危なかったのは、私達【パスティーユ】だったんだ。

【ウインドアーチ】が乗り込んでこなければ、【スカイ】は【ブラッドガンナー】の銃で…。

最悪の事態が、降りかかる予定だった。

私達は、奇跡を手に入れたんだ。

そういう思考で、乗り切ろうと決めていた。

『ごめんなさい。足手纏いの私が、責任を感じてここまで来てしまっ…。』

「いいえ、今のビーム砲がなければ、私達がやられてました！」

私は笑って答えた。

困惑しているサレンさんを慰めようとして。

私の気持ちを汲んだのか、反抗気味だった勇希兄ちゃんも、サレンさんに感謝した。

『あ、ありがとう…。』

突っかかろうとした時よりも、声が小さめだった。

言えただけマシか…。

私は下の兄の態度を及第点だと、心の中で評価していた。

私達はサレンさんに救われた。

ただ、【ウィンドアーチ】のビーム攻撃は、一時的な足止めに過ぎない。

小石が転がり落ちるような、物音が聞こえてきた。

気配を感じた私は、映像を切り替えた。

頭部に内蔵されたカメラアイは、360度回転できる。

広間への入り口に視点を合わせると、遠くで黒い腕が伸びていた。

雪崩程度では、【ブラッドガンナー】に変身した武人兄ちゃんは倒れない。

予想はしていたけど、復活のタイミングが早かった。

私は兄達に急いで報告した。

「兄ちゃん達！起き上がってきたよ！」

『ええっ！何の対策も考えてねえよ！』

『仕方ない、こうなったら…。未衣子、予備エネルギーは…。』

「まだ1度も交換してないわ。今の分はあと3割程だけど。」

『じゃあ、《再構築》による修復だ。』

『アレックスさんは多用するなって言っただろ！？』

『背に腹は変えられないさ。この戦闘さえ乗り越えて帰還すれば、俺達兄妹は解放の身だ。使えそうな手段は、試してみるしかない。細かい傷を直すぐらいなら、難しくなさそうだし。』

和希兄ちゃんも私についてきた感じだったのに、私以上に覚悟を決めている。

これには、賛同しかない。

このままやられ続けて沈んで…帰れなくなるよりはマシだ。

アレックスさんが最大限に予備を積ませたのも、今の戦いが本気で挑まないと危険だと知っているから。

リフレッシュして、もう一度立ち向かわないと。

せっかくサレンさんが駆けつけてきて、尚且つ武人兄ちゃんと私達を離してくれたんだ。

救われた命、無駄にしない。

できる限り、手を尽くすしかない。

「和希兄ちゃん、設定はしておくから、今すぐやって？」

『ああ、わかっている。』

『失敗、しねえよなあ…。』

「もう、ここまできて…怖気付きすぎよ？」

『うるせえ！わかったよ！ここから出るんだろ！兄貴、やってくれ！』

勇希兄ちゃん、空手を習っているのにビビりな一面があるから…。

いい加減、落ち着く事を覚えてほしいんだけど。

下の兄に呆れている暇はない。

予備エネルギーを自動的に切り替えれるよう、パネル操作をした。

【スカイ】の機体全体が、やんわりと照りつける。

チェンジ時の輝きとは異なる。

即座に両目を覆い隠さずに直視してしまっても、目眩を起こさない位の淡い照明になっていた。

【パステージュ】の各形態がつけられた傷は、共有される。

かなりしわくちな姿に見えた【スカイ】だった。

しかし、今の《再構築》にて、出撃時の真新しい姿に戻る。

傷口の縁が伸ばされていく。

縁同士がくっついて、切り目自体を消していく。

機体全体につけられた傷が全てこんな修復処理を行っているので、完了する頃には新品同様の【スカイ】が立っていた。

『…未衣子ちゃん、かな？』

「サレンさん？」

《再構築》の処理が終わる寸前に、私はサレンさんに呼ばれた。

サブパイロットの私は、サレンさんの話に耳を傾けられる状況にあった。

作業をしながら、彼女が口を開くのを待った。

もうすぐ敵が舞い戻るので、サレンさんの開口は早かった。

『マルロさんの伝言です。

「貴女は最初から、《特別》な経験をしている」と。短いですが、それだけです。』

【スカイ】の修復は完了した。

パン、と膜を破るようにして、包み込んでいた光を周囲に散らばせた。

おそらく火の類だけど、小火程度の熱では通路の壁は耐えられた。

《特別》…。やっぱり、私は…。

【ブラッドガンナー】がとうとう、私達を探しに来た。

入り口の穴に収まる大きさで。

黒い口ボが小さく見えているとなると、距離自体は十数メートルは離れているはずだ。

強化力なビーム砲でも、【ブラッドガンナー】は放つつもりだ。

片手で使える小銃ではなく、両手でグリップを握って使う胴体ぐらいの大きさの砲を構えていたから。

これは、バリアを駆使してでも防がなければ。

私達は兄達に声を荒げた状態で告げた。

「兄ちゃん達！【フラワー】にチェンジして！まずは撃たさないようにするわ！」

『ああ！何でも試してみるしかねえな！』

『未衣子、状況次第で俺達もチェンジするけど、いいかな？』

『それは兄ちゃん達に任せるよ！今はあれを阻止しないと…。』

【ウインドアーチ】を守ろうとして、【スカイ】は通路の出入り口の縁に立った。

3度目の、神々しい光が放たれる。

光を前にして、【ブラッドガンナー】は一旦上へ飛んでいった。

「サレンさん。伝言ありがとうございます。ここからは、私達で挑みます。サレンさんは帰還して下さい。」

3度目の眩しい輝きは慣れたのか、一瞬で消えた。

細身だが男性型の水色ラインのロボ【スカイ】から、ヒラヒラなスカートを身につけた女性型のピンク色ラインのロボ【フラワー】に形態チェンジが終わった。

『だけど…貴女達は…。』

「大丈夫です。必ず、彼を倒して帰りますから。」

私はそう言うと、コックピット内の両脇のレバーを握りしめた。

【フラワー】は再び、広間内を飛んだ。

天井付近にいた【ブラッドガンナー】が小銃をこちらに向ける。

数回、弾を放った。

【フラワー】は右手のロッドを左から右へ振って、バリアを展開した。弾はバリアで弾かれた。

効果がないと悟った【ブラッドガンナー】は、幾度目かのダッシュを試みた。

接近して、相打ちでもするつもりだろうか。

【パステージュ】以外の青い点が、まだ残っている。

武人兄ちゃんは、私達が『去る』選択肢をすれば出口を誘導すると言っていたけど…それは叶わなかった。

私達が反対の選択肢を選んだからだ。

ただし、出口がわからないのは、今の広間の壁が全て壊されていない時である。

【パステージュ】の衝突した後や、【ウインドアーチ】のビーム攻撃で溶かしていった跡が、現時点で存在している。

偶然、黒っぽい穴を発見した。脱出するなら、ここしかない。

サレンさんに向けて、強く叫んだ。

「広間の前方斜め下に、黒い隙間が見えます！そこに潜り込んで下さい！」

『黒い…？はっ！？』

「戻るなら今のうちです！リュート王子には貴女が必要だと思います！先にジェームズさん達と合流して下さい！」

『…わかったわ。』

サレンさんが承諾した。

青い点が広間内へ動き出した。

サレンさんを逃す為、私達は【フラワー】で【ブラッドガンナー】を下に行かさなよう妨害した。

破片が落下しないか心配だったが、【ウインドアーチ】は機動性が高く、猛スピードで斜め下の穴に潜り込んだ。

『行ったか…。』

『俺達だけになったよな？』

「武人兄ちゃんに挑むのは私達だけよ？サレンさんまで負担をかけるわけにはいかないわ。」

『先に戦っているしなあ…。』

『まだ勝利の糸口が見えないが、弱音を吐いても仕方ない。兄妹で協力して倒そう。』

「うん！」『おう！』

上の兄の言葉に私と下の兄は快く返事した。

戦いは、振り出しに戻った。

エネルギーの消費だけが、直近の動作を物語っている形となった。

兄妹の話し合いも中断した。

【ブラッドガンナー】は素早い。

油断していると、また動作不良を起こしてしまう。

勝利して帰る事。

それだけを信じて、私達は戦闘に身を投じた。

17・絶縁の日



火星圏タレス、出港口前の宇宙にて。

戦の残骸が漂う真暗で静かな空間で、[トールメイス・サウ] 3隻と[フレアランス5] は走行を停止していた。

理由は明確で、彼らの仲間の宇宙船である[天海号・弐式] がタレス内に入港したからだ。

それが出てこない以上、彼らは移動ができなかった。

[トールメイス・サウ]、[フレアランス5] の周辺に、人型のロボが少なくとも20体以上待機していた。

有人用のロボから、HRのロボ形態まで、様々な機体が宇宙船の前についていた。

アレックスが一般用の3機合体ロボ【パスティーユ】の前に、プロトタイプ的な機体を開発していた。

実際には、石切寿恵子（いしきりすえこ）中尉が乗る【軍用機】は2代目である。

初代は【ポーリアドール】という1人乗りの巨大ロボを試運転させていたが、パイロットの暴走も相まって撃墜された。

寿恵子と同じ正規軍出身の日本人だったが、1人でのこのこ行かせた寂しい状況だった。

ところが、[ラストコア] の2度目の《宇宙進出》では、寿恵子以外の正規軍出身の人間が少数ながらも存在した。

階級的に上官の立場だった主導者ジェームズに連れてこられた彼女達は、『志願兵』と呼ばれた。

彼女達には、色々な不安を抱えていた。

元々正規軍の指導が行き渡った人達だ。

上層部が忌み嫌っていた[ラストコア] の面々と、うまく接していけるのか？

また、彼女達は【軍用機】のパイロットとして、戦場の前線に立たなくてはならない場面にも遭遇するだろう。

【ラストコア】に参加する前の訓練で、寿恵子達は禁断の生命体・HRの脅威を思い知らされた。

実際のHRと出会ったのは【ラストコア】の臨時支部に来てからであっても。寿恵子達は机上の講習にて、過去の映像やうまく撮影された画像を見せられた。

その中には、未衣子達白井3兄妹も巻き込まれた、10年前の【天海山ユートピア】の『事故』の詳細も一緒に含まれていた。

講習ではきちんと事実が伝えられた。

『事故』ではなく、襲撃『事件』であると。

悲惨さを表す数々の画像に、彼女達は顔を引き攣らせていた。

ショックのあまり、両手のひらを頬に当ててしまった者も現れた。

同時に、この大規模な『事件』を正規軍では聞かされなかった件についても、驚愕した。

『正規軍は関わりの持たなかった騒動を細かく説明しないのです。

あなた方が知識不足なものも当然です。気に病む必要はありませんよ。』

丁寧な口調で話した講師だが、この言葉に彼女達は救われた。

【軍用機】の操縦も大変だった。

『一般機』である【パステューク】の前段階の3機合体ロボ。

合体前のジェット機1機に1人は必ず搭乗するので、ロボになるには3人が必要だ。

3人で組んで、チームワークを強固にしないといけない。

本来ならば【ラストコア】管轄の海底の基地にて演習を行いたかったが、慣れない人間に合体訓練をさせると、周りの被害が及んで基地を壊滅させかねない。

【パステューク】の時はロボが1体のみで、白井3兄妹だけの指導だったから、海底の基地内での演習でも過ごせたが…。

あまり使われていない、閑散とした地上の基地を利用するしかなかった。

【軍用機】のジェット機のユニットを2体分、船も経由してその基地に搬送してもらった。

15人の志願兵だと、5チームの編成になる。

2体分となれば、1回もしくは2回交代しての訓練となる。

全員で一斉に教えを叩き込むよりも、時間を要した。

ジェット機から合体して1体の人型ロボに変わろうとするのには、1番苦労した。

志願兵達の中には、アニメを熟知している者もいた。

その者は合体イコール個々の機体同士をくっつけて変形させると想像していた。

今まで観てきたアニメの内容がそうであったから。

ところが、【軍用機】は【パステューク】の前段階のロボである。

【パステューク】が接続の合体を要しないのだが、【軍用機】もそれは同じであった。

彼らが観てきたアニメ内での設定との差異を認識しなければ、混乱が生じる。

実際、搭乗前に【軍用機】の合体の説明があって、『ええ…?』と困惑の声を漏らしている兵士もいた。

【軍用機】はジェット機で三角形を作る。

メインを担当するジェット機を上頂点に置き、残りは下に配置する仕組みだ。

正面と背面から見て、2段のピラミッドが出来上がっていると判明すると、三角形のラインが出現する。

前と後ろ、1つずつ。

概念的に三角柱として見立てるように。

3機のジェット機が光り、それが1つにまとまっていく。

光がじわじわと消えていく頃に、ロボのお出ましとなる。

合体訓練に関しては、普段の倍以上の怒号と叱責の繰り返しだった。

厳しさに慣れている志願兵達だったが、悔しさで涙をこぼす者もいた。

だが、合体の仕方を理解した今となっては、いい思い出となっていた。

宇宙ですら初めてで、【軍用機】が環境に合うのかどうか…こちらに不安があった。

昔の《宇宙進出》にて最初の有人機を飛ばしているから信じろ、と今の直属の上官であるジェームズから言われ、寿恵子達は勇気を出して出撃した。

現在、敵の姿は確認されていないため、訓練通りの合体を実施した。

全5チームが、【軍用機：コードS】の形態のロボへと変形した。

【コードS】は【パスティユ・フラワー】と似た装備の人型ロボであるが、装甲はやや弱かった。

【軍用機】は中・上級者向けの機体である。

名称に単語を入れているように、こちらは軍人達鍛え抜かれた戦士用の兵器だ。

寿恵子は【コードS】のメインパイロットとして、外宇宙を見張っていた。

同じ『チーム1』に、スピード重視の【コードL】担当の池田中尉、アタッカーになる【コードW】担当の森崎中尉が同乗者となっていた。

2人は男性の志願兵である。

『…戻れない所まで、来てしまったなあ、俺達。』

『今更だけど、行動力あふれる自分達に圧倒されてしまうよ…。』

「まだまだこれからよ？実戦は未経験だし…。」

『緊張で手が震えてしまうなあ…。人間相手にするんじゃないし。』

『事前の講習で散々叩き込まれても、恐怖は拭えないよ。』

「まあ、それは私もだし、志願した皆同じ気持ちだろうね。両隣にHRの方々がついているから、少しは楽だけど。」

寿恵子は正面に位置するモニターの映像を見ていた。

真っ黒で静けさの増す空間で、光沢のある銀色のロボが左右の端に1体ずつ、映り込んでいた。

彼らはラルクとの戦闘で散ったピウス・エクステラの部隊である【エクステラ隊】の残存兵だった。

リウト王子一行の受入れ問題から、彼らは変わった。

王子一行は突然の地球降下どころか、【ラストコア】に協力を申し込んできた。

武人がいなくなってしまった時に地球を去った当事者達が、である。

今もなお眠り続けるリウト王子の代わりにサレンが低姿勢で頼みつつも、【ラストコア】のスタッフ達からは怒号と叱責を言うばかりだ。

統制制御室内にマルロが厳しい指摘をしたおかげで、大半は口を閉じたのだから。

妙に納得のいかない面々も残っていた。

そこで前に出たのが、寿恵子達志願兵だった。

彼女達は口を揃えて言ったのだ。

『協力すべきです、助け合うべきです。』と。

スタッフの全員が心に響いたのかは不透明だ。総司令官の西条宗太郎が問いかけを実施しても反抗する人間がいたからだ。

逆に、[エクステラ隊]の残存兵達からは、寿恵子達の行動に感銘を受けた。

《同調性》の共通の特性をもつHRには、1歩を踏み出す勇気が出なかった。

まして宇宙で名の知れた者でないと、余計に自信が無くなってしまう。

原始地球人は何の特殊能力を持たない。

禁断の強力な生命体であるHRはおろか、他の星の生物達よりも能力では劣る種族だ。

反面、確立した意志を持ち、それを前面に出せる心の強靭さがあった。

志願兵、及び[ラストコア]の関係者達以外、残存兵達は地球人を知らなかった。

今まで、彼らは地球人を見くびっていた。

若さの残る寿恵子達志願兵のように、他星人に臆する事なく歩み寄ろうとする心優しい者がいたなど、微塵も思っていなかった。

王子一行の受け入れが正式に決まってから解散すると、寿恵子達と残存兵達は意気投合を始めた。残存兵側から申し入れた形で。

最初、寿恵子達はとても驚いた。

だが自分達に好意的な他星人が出てきた事に喜んで、差し出された手を握り返した。

それ以来、彼女達の関係性は何のトラブルもなく、良好なまま時が過ぎていった。

『宇宙人って言うけど…見た目あんまり俺達と変わらないよなあ。ヨーロッパの人かと思ってた。』

『少佐でもどこの国かわからなかったからさ。アメリカの人なのにイギリスに友人がいたりとかして…。』

「少佐の友人関係は広いよね。今までずっと正規軍の基地の中で過ごしてきた私達とは大違いで…。」

ピピピ、と電子音が鳴った。通信回線の連絡だった。

相手は…隣の金星人からだ。

仲間達のやり取りは業務において欠かせない。

寿恵子は回線に応じた。

どうしましたか？と彼女が尋ねると、残存兵の1名が素直に答えてくれた。

『現在、タレスを見守っている状態ですね？』

「ええ、機体はずっとあの星と向き合ったままですが…何かありましたか？」

寿恵子はきょんとした。

彼女の疑問は、すぐに解決された。

『目を凝らしてよく見て下さい。何か、飛んでいる物体がありますよ？』

そんな指摘を聞いた寿恵子達は、モニター内の映像を凝視した。

特にタレスの周辺を、見落とさないようにじっくりと。

物体の発見者は池田であった。

『本当ですね、飛んでいます！』

森崎は、別の動きも読み取れていた。

『少しずつ大きくなっていきますね？接近してきそうな…！』

「森崎中尉？」

寿恵子は森崎が途中で話を止めたと気づき、軽く心配した。

気遣われた彼は声のトーンを大きくして、寿恵子達や残存兵に伝えた。

『帰還です！味方の機体に戻ってきます！』

「味方…！？」

『緑色の、弓型の機体が！』

「まさか、【ウインドアーチ】が一番乗り…？」

寿恵子は機体の名称を当てた。

火星圏タレスという黒っぽい星。

裏側から覗くと、赤道部分以外に白っぽく見える箇所があった。

これが、クーランが主人であった【レッド研究所】の施設である。

裏側から放物線を描いて、寿恵子達の所へ戻ってくる機体が1つ。

寿恵子が拡大して細部をチェックすると、それは正真正銘、【ウインドアーチ】だった。この機体のみが宇宙を飛んでいた。

【ウインドアーチ】がある程度接近してくると、パイロットのサレンから通信が入った。

『こちら【ウインドアーチ】、サレン・D・フェルテです！艦隊の方、応答して下さい！こちら…』

サレンは応答要請を繰り返した。

中央前方に位置する【トールメイス・サウ】が応じた。

寿恵子達を指揮する事務局長・ジェームズが口を開いた。

『もう戦闘は済んだのか？』

サレンは首を横に振った。

『いいえ、現在2機共、交戦中です！私は先に戻るよう促されまして…。』

『何！？逃げてきたのか！？』

ジェームズは驚愕したが、サレンに怒鳴ろうとしなかった。

【トールメイス・サウ】に、割り込みの通信が入ったからだ。

【天海号・式式】は、未だタレスの中だ。

出港口から通された駐艇場のポートにて、待機中の状態だ。

しかし、通信自体はできた。

〔天海号・式式〕のブリッジにいたアレックスが、ジェームズに受け入れを指示した。

10歳の差はあれど、局長の身分差は変わらない。

歳下の技術局長が、歳上の事務局長へ指示を出すのは珍しくなかった。

ジェームズは帰還したサレンを非難するのをやめた。

今は1人でも命が助かればいい。

快く、1番近い〔トールメイス・サウ〕で【ウインドアーチ】を受け入れようとした。

稲妻の如く、一瞬だけ、閃光が走った。

間隔はかなり離れてはいたが、サレンはモニター映像で確認していた。

『今は…？』

サレンは動揺した。光の直進が、何らかの兵器からの攻撃を意図するならば、警戒を怠れない。

だが、1回だけ閃光が通過しただけでは、見抜きにくかった。

機体の区別をつける前に味方がビーム砲を発射した可能性もある。

疑ったのは、閃光の走る向きだった。

【ウインドアーチ】は待機する味方と合流する為に、4隻の宇宙船へと飛んでいた。

キャッチした閃光も、【ウインドアーチ】と同じ方角で走っていた。

目指す方向が同じ、となると…。

不吉な予想がつく頃に、再び閃光が走ってきた。

それは、1発だけでは済まされなかった。

【ウインドアーチ】を通過していく閃光は、近いものから遠いものまで範囲が広がった。

近いものだと機体の端スレスレまで襲ってくるので、【ウインドアーチ】は斜めに傾けて回避行動を取った。

『きゃああああっ！？』

閃光の猛威に、サレンは思わず悲鳴をあげてしまった。

異変の察知は、4隻の宇宙船と待ち構えていたロボ達にも広まった。

『敵襲か！』

『確認しました！3時の方向から、敵の軍団が進行してきます！』

『ビーム砲を連発しながらか！？』

『まだ司令達は星内にいるのに…！』

4隻の宇宙船の艦内は騒がしくなった。

警報のアラートも鳴り響く。

ビームの弾は、構わず乱射してくる。

宇宙船も【エクステラ隊】の残存兵のHRも、ニコンの王子の側近兵のロボ達も、各々で最低限のバリアを張り巡らした。

【軍用機】に搭乗していた寿恵子達志願兵も慌てながら、防御策を取ろうとしていた。

バリアの展開は、スイッチ1つで行った。

あくまでもこれは、簡易的で範囲の狭いバリアの作動である。

範囲を拡大し、自身の機体を守るように保たせるには、もう一段階の操作が必要だった。

心臓がバクバクする。

地球上の戦場での経験ですら浅い、元日本の正規軍の身だった志願兵達。

宇宙空間での実戦は、初めてだった。

落ち着いて行動するように、とジェームズや他の上官達から叩き込まれたのに。

いざとなれば…怖さで手が震えている。

汗が滲んできている感覚もするし、冷たさも覚えてしまっている。

レバーを握ろうとしても、何故か力が入らない。

ビームの弾はどんどんこちら側に飛んでくる。

うかうかしていると、いつかは弾が機体に当たり…。

あまり最悪な場面を想像したくない。

寿恵子は頭をブンブンと横に振って、気を引き締めようと前を向いた。

両手のレバーに力を込めて握った。

同じ志願兵の仲間達に、大きな声で呼びかけた。

「まずは障害物をうまく利用しよう！」

言葉の通り、寿恵子は周りに漂流している障害物に目をつけていた。

そう、それは…【天海号・式式】諸共タレスの前までたどり着いた時に焼きついた、ロボや宇宙船の残骸。

当初は全員で、黙祷を捧げていた。

タレス内部に入港する【天海号・式式】を見送り、ずっと待機していた。

せめて急な戦闘に対応出来るように、【軍用機】はジェット機を飛ばして合体を実行した。

今、漂う残骸達は…自分達を守る盾となるかもしれない。

自他チームの者達と口でコンタクトを取りつつ、【軍用機：コードS】は飛び回っていた。

「少佐、攻撃の指示をお願いします！」

『待て！ 迂闊に動くな！ まだ正体が掴めていない！ 解析を急がせる！ 今は防衛体制を…』

『いいえジェームズ氏、我々は正体を見抜いております！』

『何？』

ジェームズは攻撃を許可しなかった。

敵がどんな部隊なのか、彼らも解明されていないからだ。

だが、知らないのはジェームズだけだ。

事務局長の立場の地球人が知らないという事は、【ラストコア】のスタッフ達もわからないとほぼ同意義である。

ジェームズが乗り合わせていた【トールメイス・サウ】のブリッジで監視している金星人のクルー達は、敵の部隊に見覚えがあった。

【エクステラ隊】は年に2、3回、宇宙の旅に出る。

クーラン等の権力者達からの依頼で赴くのが大半である。

宇宙空間でも度々、他星人の宇宙船部隊との交戦経験を持っている。

その記憶を元に、クルーが告げた正体は…。

『火星圏セレスの豪腕部隊です！宇宙船の周りには…HRと思わしきロボ達が…！』

『何…だと…！？』

ジェームズは驚きで言葉が出てこなかった。

セレスの星はタレスと同じ、火星圏に属する星である。

【ラストコア】並びに土星圏ニコンの王子一行とは…敵対心を持つ程の深い関係はなかった。

にも関わらず、問答無用でビーム攻撃を仕掛けられたのだ。

わけが分らないとジェームズは嘆いた。

しかし、【天海号・式式】がタレス内に閉じ込められた現状では…指揮を取れるのはジェームズしかいない。

弱気になって泣き出しそうになっても、味方の勢力が削られていだけ。

ここで彼は、自分達が取るべき行動の優先順位を洗い出した。

懐から小さな正方形の紙切れを開いた。

中に書かれたメモを読んで、気持ちを落ち着かせた。

簡単なTODOリストだった。

その1番上には、尖った吹き出しの枠で囲まれた項目があった。

『人命優先』。

本当に必要なものは、かなりコンパクトに記されてあった。

〔ラストコア〕の事務局長として、彼が選択した判断は…。

『すまないが、相手と通信が繋がるか、実行してくれないか？』

『こんな攻撃の最中にですか！？』

『防御体制は取りつつ、だ。まずは話を聞かない事には有効な手段を選択できない。無理を承知でも構わん。やってくれ。』

『…承知しました。』

〔トールメイス・サウ〕のクルーは返事した。

☆☆☆

長期戦はしんどい。

武人兄ちゃん、すなわち【ブラッドガンナー】と真剣に勝負するようになって、私は初めて実感した。

今だったら、球技系のスポーツで3時間もかかる試合は、プレーも観戦もつらくなる気持ちがわかる。

自分達の命がかかっている戦闘だから、余計に疲労も溜まる。

【パスティーユ】に守られているような構造だから、私達の身体に傷口は開かれていない。

打撲とかの衝撃はあるけど、ヘルメット内部やコックピットのシートのクッションがそれを和らげている。

こんなに壁に叩きつけられる攻防を繰り返していたら、クッションの耐久にも限界はある。

形態チェンジも、5回以上は繰り返している。

【フラワー】で飛び立ってから、【ブラッドガンナー】相手に何十発の光の弾を放ち続けた。

進行を妨げて、時間稼ぎをしようとして。

素早く黒いロボが淡いピンクの弾に翻弄されている隙に、【サニー】が接触ギリギリまで突進する。

チェンジは秒速で済ませた。

【サニー】は機体を燃え上がらせて、このまま【ブラッドガンナー】に突っ込んだ。

体当たりのお返しをする為に。

オレンジ色の炎に包み込まれた【サニー】ならば、【ブラッドガンナー】の一部でも火の粉が飛びかかるだろう。

かなり接近しているのだから。

ところが、【ブラッドガンナー】にも凄技を持っていた。

普通の人間ならば、銃はホルダー等の入れ物に仕舞って常備する。

必要な時に出し入れして使う。

【ブラッドガンナー】は…手のひらさえ健在ならば、どんな規模の銃でも生成できる。

反撃に移るタイムロスは少なかった。

いつのまにか、【ブラッドガンナー】が手にしていた銃がこちらに向けられていた。

サブパイロットとしてモニター画面を逐一チェックしているので、異変にはすぐ気づく。

バリアは展開できるが、あまりに近すぎると【サニー】の拳が壊れてしまう…！

和希兄ちゃんが乗り出した。

その合図は、【スカイ】への形態チェンジだった。

まばゆい光さえ発すれば、銃の発砲は止められると信じて…！

実際に、形態チェンジ中だと、【ブラッドガンナー】は手を出しづらくなっていた。

このタイミングの時に被弾は確認されていなかった。

チェンジが終わる頃に、距離を離す。

間を取って、武人兄ちゃんに私達の位置を探りにくくさせる。

まさに【スカイ】はスピード重視の形態で、短距離をワープするように移動していく。

地図データから確認しても、青い点が広間内のいろんな位置に飛んでいる事がわかる。

あまり深追いすると、頭が痛くなりそうである。

攻撃の主な判断は和希兄ちゃんに任せて（緊迫した自体になれば別）、私はエネルギーの残量をチェックした。

予備の1本はすでに取り替えられており、この時点では使用中になっていた。

残り3割。2本目のセットを設定しないと危険だ。

2人の兄達に報告して、私はパネルの操作を完了させた。

戦闘の場面に一旦戻って…。

【スカイ】は残り3割のエネルギーなんて気にせずに、サクサクと広間内を飛び回る。

もう一度偽物の剣を空中で並べて一斉発射させるのかと思えば、それは実行しなかった。

【スカイ】が手にしているのは本物の水色の剣。

氷のように半分透き通っている剣。

暗い印象のある現在の広間だけど、壁のタイルの隙間に丸い点の光がポツポツついていて、刃先で反射する姿もたまに見かけた。

【スカイ】が向かうのは、やはり【ブラッドガンナー】である。

【ブラッドガンナー】もチェンジを始めていた頃の位置にはおらず、次の動作を開始していた。

【ブラッドガンナー】は【サニー】用に撃とうとしていた銃を【スカイ】に向けて、数回乱射した。

遠くの敵を落とせる口ホは、距離を詰めなくても自前の武器で軽々と落とせる。

【スカイ】の装甲が弱いと知っているなら、近づけさせずに足止めして滞らせてから確実に仕留めるのが楽だろう。

そうは、いかせない。

こっちだって、まだまだ生き延びたいんだ。

【ブラッドガンナー】が繰り出してくる銃撃を、【スカイ】はスルリとかわす。

段々と距離を詰めていき、双剣の持ち方を変えた。

普通に剣のグリップを握ると、親指が刃に近くなる。

今の持ち方は、逆に小指が近い。

真剣勝負をするというより、刺客のスタイルだった。

おそらく、刃の向けられた先を目指すのは…【ブラッドガンナー】の《心臓部分》だろう。

H Rには全共通の弱点があり、それは《心臓部分》の機能停止である。

これさえ実行すれば、どんなに強力なH Rでも起き上がる事ができなくなる。

対立している武人兄ちゃんはもちろん、前の広間で別れたマル口も、この弱点は変わらない。

私達兄妹は、2人から全共通の弱点を散々言われ続けた。

どんなに頭の悪い勇希兄ちゃんですら、この点をきちんと覚えていた。和希兄ちゃんなら尚更だ。

だから、一撃必中のポーズに変更したんだ。

双剣の刃先で、【ブラッドガンナー】の胴体突きこうとダッシュする。

弾が飛んでくる可能性が高いので、バリアの展開は怠らないようにしている。

至近距離まで追い込んだ。

【スカイ】は【ブラッドガンナー】の後ろへ回り込む。

気づかれても、手を出しにくいのは困難であろう。

だって、わざわざ振り向かないと対処できないから。

そんな認識を持っていたからか、別の不意打ちにはピンと来なかった。

【ブラッドガンナー】は、武人兄ちゃんは…私達の接近に気がついている。

そうじゃなければ、両腕を後ろに反らして撃つなんて事、考えられないと思う。

【ブラッドガンナー】は両腕を後ろに反らしながら、2丁の銃を発射させた。

銃口は発光し、それは【スカイ】の方へ押し寄せてきた。

弾の光を目視した【スカイ】、並びに和希兄ちゃんが『うおっ！？』と声を出して、怯んでしまった。

刺しにかかるポーズが、崩される結果になった。

双剣は急いで身構えるように、刃をクロスさせた。

弾の光は爆発を起こさせた。

ドン！とアクション映画での効果音を思い出す轟音が、コックピット内に響き渡った。

バリアを張っても、クロスで身構えても、【スカイ】では防御力に劣ってしまう。

意図せぬ形で、壁と衝突してしまった。

今度は【スカイ】が初めて大きなダメージを被ったので、《再構築》後の【パスティユ】の損傷は軽めだった。

咄嗟に撃ってきた銃弾も、火力的に見れば小さかった。

反発力が強くて、壁への衝突に至ったんだと思う。

【ブラッドガンナー】を示す赤い点も、前へ2センチ程ずらしていたし。

【スカイ】の双剣で粘ろう、とまではいかなかった。

【ブラッドガンナー】は距離こそ離れていても、こちらと向かい合っていた。

猛スピードで接近して、銃で乱射して動きを封じにかかるだろう。

ならばこちらも、形態チェンジを繰り返して、攻撃の手を封じ込めてしまおうか。

対等に向かい合う前提ならば、【サニー】の火力でゴリ押ししていこう。

それを3人で取り決めすると、勇希兄ちゃんが張り切り出した。

【ブラッドガンナー】と【パスティユ】との間隔があと数十メートルまで縮まった時。

【スカイ】の全身が光り出した。

形態チェンジの操作は、慣れていた。

チェンジにかかる時間が、徐々に短縮されていく。

【サニー】が解放された時、1分を切っていた。

【ブラッドガンナー】は光の明度をカットする機能が備わっていないのか、激しい光を発する【バスティーユ】の形態チェンジに1歩も踏み出せずにいた。

抗える術もないのだろう。これはこれで、かなりの好都合だ。

【サニー】、3度目の挑戦。

特に秘策を考えていなかった私達は、【サニー】の火力を最大限に引き上げた。

威力も速度も、計器の限界突破まで上昇させていく。

ガチで潰しにかかろうという強い意志を、【サニー】のフルパワーが表現している。

飛び方に異様な心地がした。

体験したことのない加速に、サブパイロットの私と上の兄は前に引っ張られるような感覚に陥った。

コックピットのシートのベルトは固定しているけど、それでも前のめりになりかけた。

車の急ブレーキをかけた時の車内。

私がイメージしたのはこれだった。

慣性の法則でも働いたんじゃないか、なんてふと思っていた。

【スカイ】に劣らない俊足で、【サニー】は【ブラッドガンナー】に接近する。パンチでいくスタイルは変わらない。

【サニー】を動かす勇希兄ちゃんの為に、ありったけのエネルギーを注ぎ込んでいた。

予備も交換準備が整っている。

今度交換すれば、予備エネルギーのタンクは3本目になる。

残りの補充回数は、あと1回のみ。

最後の補充を終えても【ブラッドガンナー】がしぶといのならば…。

まだだ。

【サニー】のパンチが私達の希望に応えてくれる。

ここまで熱くなれば、流石の黒いロボの装甲も凹むだろう。

【サニー】は【ブラッドガンナー】の正面で、右手のストレートなパンチをぶつけた。

最大出力で動かしたので、攻撃力も半端ない。

パンチを1発ぶつけるのに成功すると、【ブラッドガンナー】は回転しながら奥へ飛ばされていった。

速度も大きいので元の体制に戻す時間はなかった。

結果的に、【ブラッドガンナー】は壁にぶつかり、全身がめり込まれた。

大きい物体を強い衝撃で他の物体に当たると、鼓膜が破れる程の大きな音が響いてくる。

あまりのデカさに、サポート役の私は両目を閉じてしまった。

【ブラッドガンナー】が壁にぶつかると、黒いロボを砂埃が包みこむ。

【ブラッドガンナー】が、武人兄ちゃんはどうなったのかは…すぐにはわからない。

地図データの赤い点は健在だ。生体反応が無くなれば消えるのだけど、点灯しているのならまだ生きている。

【サニー】はパンチをぶつけただけで、【ブラッドガンナー】の中身まで突っ込んではいない。

H Rの共通の弱点である《心臓部分》の機能停止までは至らなかった。拳がロボの内部まで貫通していないのだし。

「…勇希兄ちゃん。」

『無我夢中でやってんだから仕方ねえだろ！』

『そうだな。武人さんはただでさえ素早く動いている。拳が命中しただけでも御の字だろう。』

「そうだよね…。接近する度に銃口を突きつけられては、こちらも身動き取れなくなるね。」

『器用だよなあ、武人兄ちゃん。』

『あの器用さが、彼の武器なんだろう。【宇宙犯罪者】の経歴も、それで積み上げてきたみたいだ。』

【犯罪者】。私が1番信用したくない、武人兄ちゃんの評価。

今まで散々《夢》で見せられ続けたんだから、武人兄ちゃんの良い面も悪い面も覚えている。

でもやっぱり、私は兄ちゃんが『可哀想』だと思ってしまう。

執拗ないじめを受けている《夢》も見てきているし。

たとえ私よりも彼の事を熟知している人であっても、【犯罪者】呼ばわりしてほしくない。

傲慢な考えだろうけど。

【ブラッドガンナー】の状況を把握しないといけない。

次の手が、わずか数秒で出されるかもしれないから。

砂埃の舞いは、下へ降りていく。

黒い口ボが衝突してめり込まれた壁の『霧』が晴れた。

【ブラッドガンナー】はまだ壁にはめ込まれた状態だった。

綺麗な大の字を作って、ピクリとも動いていない。

生体反応はまだ残っている。

地図データの赤い点が消えない限りは、油断はできない。

【サニー】のフルパワーは鎮静化した。

機能停止寸前まで追い込んだので、過剰な消費を抑えるために。

脱出の事も考えないといけないから。

壁に固定されている今の【ブラッドガンナー】ならば、『心臓部分』を突き破れば…！

形態チェンジはもうしない。

一点集中突破で済むのならば、【サニー】のパンチで十分だ。

無駄に掛け声でコンタクトを取らなかった。

モニター映像に各々2人が映っているし、頷くだけでやる事は決まった。

『心臓部分』の破壊が目標だから、フルパワーの火力は出さない。

それでも、【サニー】は燃え上がる。

これが、最後の1撃になる。

成功すれば、あとは帰るだけ。

サレンさんの機体【ウインドアーチ】が利用した穴に入って…外を目指せばいい。

まだサレンさんの行方を、私達は知らない。

サレンさんが無事に帰還しているのを信じるしかない。

そうでもしないと、私達が示した先が間違った道となってしまう。

来た道に戻ってマルロと合流するのも、頭の片隅にはある。

〔天海号・式式〕に収容されるまでエネルギーが持続するのだろうか…それが最大の問題だった。

【サニー】は自慢の右手の拳を、後ろに下げた。

【ブラッドガンナー】へ強烈なパンチをかますために。

燃え上がる【サニー】はひたすら、めり込んだ壁から離れない黒い口ポヘー直線に猛進する。

【ブラッドガンナー】は動かない。

手足が使えないのなら、抗える術が残されていないはずなのに。

私達兄妹全員が、想像できなかったんだ。

【ブラッドガンナー】には、胴体にも大砲が備わっていた。

いや、あれは…生み出されたのだろうか？

赤い光がチューブタイプの薬剤みたいにニョキニョキと出現して、大砲を構築していた。

これは、まずい。

緊急停止は…叶わなかった。

フルパワーではないけど、【サニー】の特攻はそう簡単には止められない。

1度停止を呼びかけた時でも、メインパイロットの勇希兄ちゃんはイライラしていた。

【サニー】の攻撃は、かなりの集中力が要る。

広範囲で敵を一斉に沈められる【フラワー】とは違う。

大砲は、発射された。

超強力な、真っ赤なビーム攻撃だった。

ただまっすぐ前に撃ち放つタイプで、途中で曲がる事はなかった。

【サニー】はビームスレスレの位置にいたので、直撃は免れた。

しかし、右の肩にかすり傷がいった。

『痛み』を感知して、【サニー】は広間内の底まで落ちてしまった。

ビームが掠れただけだったから、【サニー】のフルパワーのパンチと比べると威力は段違いに格下だ。

落下スピードも、もう少しゆっくりなはず。

しかし、突如生み出された大砲に何の防御策を練っていない私達に、守る手段はなかった。

ちょっと当たっただけなのに、崩れた体勢を戻せなかった。

広間の底面と衝突しても、おかしくはなかった。

『うわあああ！』

と勇希兄ちゃんは声を出して、機体の落下の勢いに流されるだけだった。

サポートに回っていた私と和希兄ちゃんも同様だった。

衝突して、【パスティユ】の機体の動作が停止した。

特に故障したとかではない。

コックピット内の電気系統は生きている。

左側から沈んでいった【サニー】だけど、その分右側はかすり傷以外の物理的ショックはなかった。

だから、右腕を軽く上下に動かせた。

起き上がるのに、右手を底面につけて、腕の力だけで胴体を起こそうとしていた。

右脚の動作チェックもした。

右脚を前にクロスするようにして、【サニー】をうつ伏せの状態にしようと努力した。

最初は凹んだ底面から左側が抜けられなくて焦っていた。

力を振り絞っていくと、ゆっくりと左側を引き剥がす事に成功した。

上体を起こせるようになり、【サニー】は一時的に正座を崩した姿勢で座っていた。

『クソッ、あともう少し、だったのによ…！』

勇希兄ちゃんの悔しさの声が聞こえる。

右手をグーにしてコックピット内を叩く音も。

本当に、あと少しで息の根が止められる寸前まで追い込めたのだ。

息の根を止めるなんて言葉を、武人兄ちゃん相手に使いたくなかったけど。

ベタンとしゃがみ込んだ姿勢だった【サニー】ではあった。

休んでいる暇はないとわかっているので、両手を支えにして足の裏を底面につける。

何とか2足で立ちあがろうとして、次の敵の襲来の備えを考えていた。

【サニー】が立ったのと同時に、【ブラッドガンナー】が降りてきた。

大砲のビームの威力に押されて、壁の凹みからうまく外れたんだろう。

ガシャン、と大きな音を立てて黒いロボは落ちてきた。

両足の裏を底面につけて、膝を曲げて直立の体勢を取ろうとした。

でも、向こうは急にバランスを崩してきた。

前のめりになって、右手の拳も底面についてしまった。

『ゲホッ、ゲホッゲホッ！！』

黒いロボが咳き込んだ。

喋ることができない武人兄ちゃんの、久々に聞いた生の音声。

これは相当、兄ちゃんが参っている証拠なのでは…。

『あまりここで声を大にして言いたくはないんだけどな…。』

和希兄ちゃんが申し訳なさそうに呟いた。

「私達だけの範疇だったら大丈夫だよ？」

『そうか。なら静かに聞いてくれ。実は面白いデータを自動で集積していたらしくてね…見てもらいたいんだが。』

和希兄ちゃんから棒グラフの図が送られてきた。

青色の棒を横に並べたグラフで、棒の数は20本くらいあって多かった。

棒グラフは左側を数値の始点として、始点の位置に時間の記録がなされていた。

反対の右側には、上から下に目を落としていくにつれて、下がっていった数値。

数値とグラフはもちろん連動していて…棒グラフは段々短くなっていった。

これは、一体何だろう。

すぐに和希兄ちゃんが説明した。

『《Life Point》とグラフ上部に書いてあるだろう？』

上の兄の指摘に従ってグラフ上部に視点を移す。

本当に、そう書いてあった。

正しくは…《Life Point TARGET: ENEMY》だった。

ENEMYは『敵』と言う意味だから…この分析は誰のものなのかというと。

「武人兄ちゃんを調べているの？」

『どうやら【パスティユ】が、自動的に計算していたみたいだ。4ヶ月以上前、武人さんは土星圏の王子様と対決しただろう？』

『あの時の兄ちゃん、すげえ速え動きしていたよなあ。息切れとかなくてよ…あれ？』

勇希兄ちゃんが何かに気づいた。

彼が居座るコックピットの中で頭部を横斜めに傾けていたし、疑問を抱いているはずだ。

「どうしたの？勇希兄ちゃん。」

『そう言えばよ…俺、武人兄ちゃんの戦闘の動きっぷりを2回しか見てねえけど、変じゃねえか？随所で立ち止まっているような…そんな気がするんだよ…。』

勇希兄ちゃんが『随所』とかの表現を使うの珍しい。

なんて事を口にするとうるさいので、これは黙っておいた。

まだ下の兄の報告が残っているし。

『仕留める機会は、結構あったと思うんだよ。あんな馬鹿でかい大砲を身につけられるんなら、それでお終いにすれば良かったんじゃないか、って。』

「光に弱いからでしょ？」

『武人兄ちゃんは【パスティユ】の仕組み、最初から知ってるだろ？アレックスさんの開発に携わったぐらいだよ…。当てずっぽうで大砲でも撃ったら良かったじゃねえか？何で次の行動が、『遅い』んだ？』

『遅い』？

俊敏な口ボである【ブラッドガンナー】が？

私は少し、後ろに引いてしまった。

《残る》選択肢を取ってから瞬時に突進してきた【ブラッドガンナー】が、『遅い』…と。

どうやったらそんな分析になるのか、私は甚だ疑問に感じていた。

でも、和希兄ちゃんの反応は私と違った。

なるほど、と感心するように頷いていた。

『俺も大量の剣で刺す時に感じたさ。刃先が自分自身に向けられた時から回避行動に移せた筈。【ブラッドガンナー】みたいに機動性の高いロボなら尚更。だけど…武人さんは一斉に自身に集中してくる剣を、受け止めていた。結果、爆発は起こしたんだ。』

上の兄の洞察力に、私は驚いた。

【ラストコア】本部で観戦した、リュート王子対武人兄ちゃんの戦闘。

あの時、【ブラッドガンナー】は【ホーンフレア5th】の攻撃を回避したり、撃ち返したりしていた。

改めて振り返ると…【ブラッドガンナー】はそんな行動をうまくやっていないように見えた。

私達が倒して勝てそうな雰囲気。

今の激闘で、そんな場面がちらほらあった。

私には2つの理由がよぎった。

1つは、本音は私達と戦いたくないから。

武人兄ちゃんは王子達一行と同様に、私達と勝負したくないとこぼしていた。

だから、戦闘の有無を私達の判断に委ねたんだ。

これには、些細な疑問が残る。反応が鈍くなっている【ブラッドガンナー】だけど、反撃は何度もあった。

反撃をするという事はつまり、まだまだ生き延びたいと願っているのだろう。

私達を勝たそうとしてわざと隙をつくろうと、武人兄ちゃんは考えていない。

だとすれば、残りの理由。体力の、限界説が有力視される。

だって、もう喋れないからって専用機器を使用して私達に伝えていた武人兄ちゃんが、ここでとうとう咳き込んだのだから。

ロボ形態なので、咳だけで済んだ。

人型の姿だったら…血や痰を吐く症状もみられたかもしれない。

『もう少しの辛抱だと、俺達に宣告してきているだろうな。』

和希兄ちゃんがそう言った。

だったら、そうかもしれない。

上の兄が賢いから従うのではなく、私にも何らかの兆しが見えていたからだと思う。

前のめりの状態で座っていた【ブラッドガンナー】が、立ち上がった。一時的に消滅していたであろう銃が、両手に出現した。

まだ、仕掛けてくる。

【サニー】も衝突で傷を負ったけど、まだ2足で立てる。

対峙する両者が、同じ体勢で向かい合った。

【ブラッドガンナー】は両方の銃のグリップを握りしめる。

【サニー】は両手で拳をつくる。

戦闘は、再開された。

両者のロボが前方へ飛び出した。

タイミングは、同じだった。

☆☆☆

ジェームズに寿恵子ら志願兵達の【ラストコア】メンバーからすれば、前代未聞の奇襲だった。

油断していたわけではない。

いくらクーランの存在が消えた火星圏タレスであっても、別勢力が攻め込んでくるであろう予測はしていた。

その為に4隻の宇宙船の周りに、ロボ達を配置した。

ところが、他星の民達からの襲撃まで、頭が回らなかった。

いいや、このような事態の発生確率も、ゼロではない。

今の【ラストコア】には、土星圏と金星圏の味方もついてきている。

しょっちゅう偵察用の衛星を飛ばす星ならば、地球人の行動を知る機会もあるだろう。

そんな輩が敵になっただけ。

敵の正体が、手を結んだ金星圏や土星圏からの反乱分子だったのならば、まだおおよその理解はできたのに。

火星圏でも、タレスからの攻撃ならばもっと納得できた。

火星圏セレスは…【ラストコア】全体であまり詳しい情報を入手していなかった。

入り込んだのは、ある家族構成の状況のみ。

アレックスがマルロにたつぷりと説明した、ローン姉妹の伝説。

姉妹の片割れが、地球人の男性との間に白井3兄妹を産んだ事実。

姉妹には黒川武人ことラルク・トゥエラーとの関わりがあった事も、彼の口からうっすらと漏らしていた。

ローン姉妹の伝説を知るの、アレックスを含め数人だった。

マルロや白井3兄妹に打ち明けた後、アレックスは「ラストコア」内の重要人物に、既知の情報の半分の範囲を開示した。

ジェームズも偶然出会った子供達が奇跡的な繋がりがあったと聞き、衝撃を受けた。

今でも脳裏に焼きついている。

しかし、自分達が責められる羽目になるのに、身に覚えはない。

ビウスの指揮していた「エクステラ隊」の残存兵が言った、火星圏セレスの精鋭部隊。

名称を「ウージェ」と教わった。

「ウージェ」の発進する宇宙船の艦長に連絡を取ろうとしたジェームズ。

残存兵が一瞬驚いたが、命を拾ってくれた「ラストコア」の事務局長の指示に従った。

回線は開いてくれたのだが。

「ウージェ」の主軸になった宇宙船の艦長から、耳を塞ぎ込みたくなる程の怒声を浴びせられた。

『タレスもセレスも関係ない！火星圏の領域に侵入した者は排除する！クーランのいない今ならば、我々の能力を誇示できよう！無法者よ！ひれ伏すがいい！』

初対面で開口一番から横暴だとビックリしたジェームズ。

周りに残存兵達存在で心に多少の余裕があったし、「ラストコア」第2の司令官としての務めを果たす為、尻込みせずに交渉を申し込んだ。

だが、【ウージェ】の主軸宇宙船の艦長は、一向に聞く耳を持とうとしなかった。

4隻以上もある【ウージェ】の宇宙船の数。

ビームやミサイルを遠慮なく撒き散らしていた。

やむを得ず、防衛策としての反撃とバリアを、【ラストコア】側でも展開した。

攻めにかかるにはジェームズや宗太郎等のトップ層の許可があるので、ロボ達の前進はまだ開始されていない。

「くっ、【天海号・式式】がタレスの中に駐在しているという時に…！」

「1隻でも落とさないと、割に合いません！ここは割り切りましょう！」

「そうだな…これ以上の対話は不要だ。アレックス！」

【ウージェ】の主軸宇宙船への回線は切断された。

ジェームズは別の回線でアレックスを呼んだ。

『すでに擬似効果音は流れてきているぞ？』

「宗太郎に伝えておいてくれ！外宇宙が危険に晒されている。戦力を削る目的での攻撃を開始するぞ！」

『わかった。【ウインドアーチ】の回収は急がせてくれ。こちらからも提案を出せるなら、尽力しよう。』

アレックスは頼みを引き受けた。

了承の意を確認したジェームズは、まずは【ウインドアーチ】が向かっていた【トールメイス・サウ】の1隻の状況を調べてもらった。

運のいい事に、【ウインドアーチ】はその宇宙船に収容されていたとの報告があった。

サレンは機体を降りて、格納庫からブリッジへ移動しているらしい。

機体の回収は済んだと知ったジェームズは、自軍の4隻の宇宙船に指示を出した。

「これ以上の拡散はいけない！ある程度でいい、撤退させるまで攻撃しろ！
〔天海号・式〕が待機している最中で、俺達は退く事ができない。なんとしても、耐えてくれ！」

『少佐！大変です！』

ジェームズが搭乗する〔トールメイス・サウ〕の1隻に、新たな通信が割り込んできた。

彼が最初に志願兵として誘った正規軍の、石切寿恵子中尉だった。

「君達はこれが初めての实战だ！接近は他の兵に任せて、遠くから攻撃しろ！
【コードS】ならば距離が届く！」

『承知しておりますが…！』

「無駄口叩いている暇はないぞ！」

『それが、ビームの猛攻で発狂した人が…！』

『わあああああ！』

叫び声が響いた。

寿恵子の回線から漏れたのだが、声の主は彼女ではない。

男性の音声だったからである。

臨時体制とはいえ、発狂で暴走してしまうと歯止めが効かなくなる。

貴重な命を失いたくないので、流石に異常者を戦禍の渦に送り込むのを避けたかった。

攻撃手段は多い方が、戦局を有利に運びやすい。

しかし、衝動に駆られた者までは…。

回収を考えたジェームズだったが、同時に別の回線が入った。

数えきれない程の通信網で、現場が混乱した。

発狂した志願兵からの回線も、この「トールメイス・サウ」のブリッジに入ってきた。

『光が！光が怖い！』

『落ち着いて下さい！我々も共に行動しますから！』

『嫌だ！ランダムに撃たれたら、自前のロッドも思う存分振るえない！』

うわああああ！と泣き叫んでいる発狂者。

彼が乗る【軍用機：コードS】の側に、元「エクステラ隊」のHRがいてもだ。

『申し訳ございません少佐、自分の担当に代わりましょうか？』

『いいえ、耐久を重視する為に、【コードW】にチェンジしますよ！』

「…正気を保てないのでは、特例を出すしか…！」

ジェームズが許可を出す時だった。

「ウージェ」の動きに変化があった。

先程まで、宇宙船の武装で対処していた。

戦闘用らしき人型のロボは外宇宙に出てはいたののだが、隣で共に前進するのみ。

スピードを上げて自前の武装で攻撃する事はなかったのに。

「トールメイス・サウ」のブリッジには、頻繁に報告が舞い込んでくる。

多数の報告の中には、敵の動向の変化も含まれていた。

クルーがジェームズに告げたのが、『ロボ達が急接近し始めた』動きと、『ロボ達の正体がHRである』情報だった。

前者はまだ想定内の範囲だ。

あちらから攻撃を開始した以上、この戦闘自体に乗り気なのは向こうである。

ロボ達へいつGOサインを出してもおかしくない状況だった。

後者も、全く想定していなかったわけではなかったが…。

クルーは正体の判明のみならず、どこに所属であった経歴すらも告白した。

3隻の〔トールメイス・サウ〕を保有する〔エクステラ隊〕は、元々火星圏で待機していた。

他の〔宇宙犯罪者〕と同様に、長であるピウスがクーランと契約を結んでいたから。

それ故に、突進してくるロボ達を知っていた。

〔エクステラ隊〕のいくつかは、火星圏タレス内の〔レッド研究所〕に出入りした記憶がある。

クーランとの相談の前に、幾度か複数のHRを見てきていた。

クルーの者達が、次々と声をあげていく。

あれは、タレスのHRだと。

〔レッド研究所〕から引っ張ってきたのだろうか、と。

ジェームズは敵HRの映像を拡大しろと、クルー達に要求した。

彼らは要求に応じて、ジェームズの見える位置に映し出した。

事務局長も、気づき始めた。

敵HRのボディは、何かとの共通点を見出していた。

〔ラストコア〕に一時期所属していた、黒川武人。

元クーランの《自慢の息子》として使役されていた〔宇宙犯罪者〕の1人である、ラルク・トゥエラー。

彼が変身するロボ形態の名称は、【ブラッドガンナー】で通っていた。

【ブラッドガンナー】は黒い装甲に、赤く光るラインが特徴的だった。

それと、現在襲いかかってくる敵HR達は、ジェームズからすれば酷似していると感じた。

ならば、武装も同じでは…。

嫌な予感がした。武器の種類は、それぞれに特性がある。

利点も欠点も兼ね備えている。

至近距離まで接近しないと傷をつけられない武器がある。

使用方法さえ間違えないと遠方からダメージを与えられる武器もある。

【ブラッドガンナー】は、後者の特性がある『銃』を駆使して戦うのがウリだった。

クルー達の証言、『タレスから引っ張ってきた』のが本当だとすれば…。

本音は対決の形を取りたくはなかった。

相手側から仕掛けてきたのだから、それに応じるしかなかった。

どうやら【ウージェ】には、接近して宇宙船を潰す事を認めない気であるらしい。至極当たり前の対応ではあるが。

ジェームズの心配は、別方面にあった。

発狂した志願兵が気掛かりだった。

タレスのHRで思いつくのは、武人の出身と同じ【レッド研究所】で改造された者達だろう。

ジェームズ、とりわけ地球の【ラストコア】の面子からすれば、それぐらいしか考えられない。

彼らが【ブラッドガンナー】と同じ武装で挑んでくるとすれば…！

怒号があちこちで飛び交っている状況下。

意識していたのか、『オス』の声が聞こえてきた。

たった4文字だけだったのに、はっきりと事務局長の耳に届いた。

『危ない！』

【トールメイス・サウ】のブリッジの中央奥のモニターは、16面に分割されている。

多角的に戦況を把握できるように、戦闘開始された時から切り替わった。

声が鮮明に聞こえてこなくても、映像で様子はわかる。

特に、利き手の多い右側は、無意識に生物の目が行き届きやすい。

爆発。

【パスティーユ】のプロトタイプである【軍用機】は、健在だった。

その間近で、無機物を破壊された時の炎が、ドオン！と四方に広がっていった。

「あれは、もしや…。」

「我々の同志が、やられました。」

見守っていたクルーの1名がジェームズに言った。

両者共に、残念そうな表情をした。

度合いだけは、違いがあった。

クルーは幾度の戦場を駆け巡った経験と、ピウス・エクステラの喪失の記憶がある。

悲しくても、堪えていた。

ジェームズも元々は正規軍に所属していた軍人だ。

未だに『少佐』としての階級も呼ばれている。

地球上の戦場を全く知らないわけではない。

宇宙上の戦場を目の当たりにするのは、これが初めて。

最初の《宇宙進出》で、ジェームズは地球に残っていた。

次の総司令官として引き継ぐ為に。

百聞は一見にしかず。

伝聞で情報を知っているだけでは、激しい感情は湧かない。

1度でも衝撃を目の当たりにすれば、誰だって嘆いてしまう。

左の手のひらで顔面を覆ったジェームズは、落胆の声を漏らしてしまった。

クヨクヨしている暇は、なかった。今は戦闘の真っ最中だ。

【トールメイス・サウ】のブリッジで立ったままのジェームズよりも、自身の機体のすぐ側で爆発を目視した志願兵達の方が、ショック度は大きい。

経歴の浅い若者は、心の許容範囲は広くない。

発狂者だった男が、暴走を始めた。

『あああああ！』

『うわっ！いきなり動かすな！』

『待ってくれ！形態チェンジを…！』

『うるさい！自分のせいだ、自分が怖がっていたから…！』

『落ち着け！今のお前では、俺たちまで巻き添えをくらうぞ！』

【軍用機】は3人乗りの合体ロボットである。言い換えると、これらのロボに乗った3人は、三位一体で挑まなければならない。

同乗する他の志願兵がそう説得するのは、あながち間違いではない。

戦場での被害の拡散は完全には防げない。

阻止しようとする努力は必要だ。

発狂者には、言葉が通じなかった。

該当の【軍用機：コードS】は、銃を手にしているHR達まで一直線に進んで行った。

暴走は、止まらない。

【コードS】は【バ스티ュー・フラワー】と同じ、遠くから光の弾を飛ばして落とすのが得意な形態だ。

近距離だとかえて、不利になってしまう。

なのに、速度を計るメーターは上昇していく。

残存兵の爆散前よりも危機的な状況に陥っていた。

「おい！止まれ！緊急停止だ！」

ジェームズは発狂者を阻止する為、自ら乗り出していた。

映像に向かって、停止の声をあげた。

ところが、発狂者は1つの事に神経が集中し過ぎて、外野の声を聞き取れなかった。

言葉にならない大声で叫びつつ、左右のレバーだけを力強く握りしめていた。

周りを見れないと、いつ爆破されるか…。

負傷者が出るのは致し方なくとも、急激な増加だけは避けたかった。

敵のHR達は、元【レッド研究所】の生物であったならば、任務等で戦闘にも慣れているはずだ。

猛進する地球産のロボなんて、テンポ良く破壊するだろう。

誰か先に敵を仕留めておけ！とジェームズは言おうとした。

指示を出す前に、味方の他のロボが【コードS】の両脇についた。

2体が【コードS】を力づくで拘束する。

【コードS】は発狂者の感情を汲み取ったようで、拘束されてもジタバタ暴れていた。

背後に、寿恵子が乗った【コードS】が駆け寄っていた。

寿恵子は志願兵達の一主導者だ。

彼女を最初に【ラストコア】に誘ったジェームズを除けばの話だが。

『あまり動かないで！乱射されてきて怖がる気持ちはわかるけど！』

『逆に聞くと！お前はなんでそんなに落ち着いてられるんだ！スタートラインは同じだろうに！』

『揉め事は後にして下さい！やられますよ！』

寿恵子に対して、グサリと刺さる言葉を吐いた発狂者。

戦闘中にそんな余裕はなく、他の残存兵に叱られた。

暴走した【軍用機】以外にも、寿恵子達の周りには残存兵のHRや、リユート王子の側近兵のロボが数体ずつ集まっていた。

戦力は欲しいところ。

だが不慣れの者に単独行動はさせられない。

宇宙戦での経験が豊富な残存兵や側近兵に、うまく誘導してもらえない。

そうでないと、手を出せないまま落とされてしまうだけだ。

これは志願兵達以外でも同じ条件であり、外宇宙で飛んでいるHRやロボ達は全て、撃墜の危機に晒されているのだが。

『バリアと障害物を利用して下さい！』

『宇宙船のビーム砲弾よりも威力は劣ります。装甲のまだ硬い残骸物ならば、1、2発は凌げれるかと。』

『近接戦闘は、他の者と宇宙船の武装で補います！遠くからの支援攻撃に徹して下さい。』

『シミュレーション通りであれば、【コードS】のロッド攻撃だと、HR達の幾つかは落とせます！』

ジェームズは驚きの連続で、言葉が出なかった。

猛攻撃の脅威が迫ってくるというのに、的確なアドバイスを志願兵達に助言しているのだ。

志願兵達はジェームズが[ラストコア]に連れてきた地球人。

しっかりしなくてはならないのは自分なのだ…と心の底で自身を責めていた。

悔やんでいる場合ではない。

今はノウハウのある者達に任せて、見守るしかない。

現状で繰り広げられている惨劇を次の糧にできるよう、しっかりとその目に焼き付けなくてはならない。

宇宙船のブリッジで立っている以上は、こちらの攻撃展開の指示を出すのだけ怠らないように。

多くの生物達を生き延びさせたい。

この想いはどちらの陣営も譲れないであろう。

最後をとくに覚悟している者以外は。

【ラストコア】側、特に前線に出ているロボ達は仕切り直した。

【軍用機】に張り付いていないロボ達が前に出て、弾をすんなりとかわしていきながら、刃先を突き出す。

乱射し続けるHRに対して、ダメージを与えようと加速したのに。

突如、変化が起きた。

『待て！』という停止の号令があった。

これを発したのは指揮官代行のジェームズではなく、4隻の宇宙船の艦長でもなく……残存兵だった。

彼が最初に、敵側の奇妙な光景を、目の当たりにした。

異変に気づかない他の兵士が何故？と彼に聞いた。

ジェームズもモニターを凝視していたクルーから、報告に耳を傾けていた。

停止を促した彼は、

『向こうのHR達が、ゾロゾロと撤退していきます！』

と理由を述べた。

それが事実なのかを確認する為、前線のロボ達は武器を下ろした。

しばらくの間、【ウージェ】の意味不明な行動を観察した。

【ラストコア】側からは彼らに対して、あまり武装を展開していない。派手に爆発を撒き散らしてもいなかった。

なのに、火星圏セレスの精鋭部隊のHRの数が、みるみる減っていった。勝手に消滅したのではなく、帰還していた。

【トールメイス・サウ】にも、マス目を利用した地図データが搭載されている。

クルーの1名が目を離さずに、減少する数を調べていた。

いつのまにか、ビーム砲弾の猛攻もなくなっていた。

あれだけ無差別にバンバン放っていた攻撃が、一斉にピタリと止めてきた。

どういう事なのか？

謎は数分もかからずに、判明した。

呆気にとられている最中、通信が入った。

「ウージェ」の部隊の宇宙船から、ではない。

別の「トールメイス・サウ」に機体ごと収容された、リュート王子の側近の技術仕官であるサレン・D・フェルテからだった。

『増援が、来てくれました！』

サレンはとても喜んでいた。

ここでジェームズは思い出したのだ。

リュート王子一行の緊急の地球降下の時。

マル口はしゃがみ続けていたサレンに対し、『提供できるもの』を聞き出していた。

彼はどんな媒体でも構わないと言っていたが、王子一行側の提供物は『情報』ばかりだと信じていた。

彼女はさりげなく、『モノ』も提供できると申し上げていた。

申告通りならば…彼女が意図する『増援』は…。

「もう飛んできたのか！」

『木星圏で待機していましたので、[フレアランス5]からは宇宙に上がった時点で進行開始の連絡を入れました。後続の宇宙船を見て、退いたのでしょうか？』

「後続…？」

「ジェームズさん、音声流れております！」

クルーがジェームズと顔を合わせる為に、後ろを振り向いた。

音声の元を探りたいので、ジェームズはモニターの切り替えを指示した。滑らかなタッチ操作で、瞬時に音声の流れる外宇宙の映像を映し出した。

「何だ？これは…。」

ジェームズは呆気にとられていた。

音声の流れる映像の中の宇宙船は、特に変わり果てた外観などなかった。

大抵の宇宙船は、背部以外丸みを帯びた形になっている。

例えば、背筋の伸びた、デフォルメ化されたクジラによく似ている。

派手な宇宙船だと装飾品でゴツゴツした感じにはなるが。

ジェームズが初めて目撃した宇宙船に、装飾品など見たたなかった。

せいぜい、側面にデカデカと名称のロゴが貼り付けられているだけ。

〔フレアランス5〕の藍色と同系色であろう、紺や紫色の宇宙船が飛んでいるのみ。

どうしてこれらの宇宙船が…。ジェームズは疑問を抱いていた。

内情を、サレンが説明した。

『実は土星圏の中には、セレスと様々な交流関係を結んでいる星も存在しておりまして…。宇宙船のロゴを捉えてから、恐れたのでしょう。』

「…お前達はしていないのか？」

『〔フレアランス5〕は直接飛ばしてませんから。商船ではありませんし。』

『商船』というキーワードを聞き取ったジェームズ。

これである可能性に気がついた。

「貿易目的か？」

『他にもあるでしょうが、そう解釈するのが手っ取り早いと思います。商業系は私の専門外で、あまり詳しくないので…。』

「要するに、向こうも取引を失いたくないから、引いたんだな。」

ジェームズはそう納得していた。

事務局長と王子の1番身近な側近が話し合っている内に、[ウージェ]側のHRの数がゼロに近づいた。

後ろに控えていた宇宙船から、次々と撤退を開始していく。

攻撃を止めた相手に刃を突き出すのは、あまりいい印象ではない。

憎悪が少し込み上げてきても。

戦う意欲を失せた者に襲いかかるのでは、初っ端から仕掛けてきた[ウージェ]の宇宙船と同じ道を歩む事になる。

憎しみを堪えて、[ウージェ]の部隊が去る姿を見守っていた。

「壊滅まで追い込まれずに、済みましたね…。」

「そのようだな。」

「まずは、生存者の確認を…。」

「頼む。…君達にとって、惜しい者を失わせて申し訳ない。」

ジェームズは顔を俯かせた。

なんとか持ち堪えたのに、彼の表情に哀愁が漂っていた。

「宇宙に出た時点で、理解していましたから。」

寂しい感情は、残りますけど。」

クルーの1名もジェームズと同じ顔つきになってはいた。

ちょっぴり哀しげな空気の中で、再びサレンからの通信が入った。

『ジェームズさん、ちょっといいですか?』

「構わないが、どうした?」

『土星圏の有志達の代表者様から、ジェームズさんにご挨拶が。』

「繋いでもらえるか? ついでに[天海号・式式]の西条司令にも報告しよう。」

『かしこまりました。』

サレンの通信は、一旦中断された。

ジェームズはブリッジ内の別のクルーに、次の仕事を指示した。

「[天海号・式式]に繋いでくれ。戦闘はたった今終了した。

土星圏の有志達から、お話があるんだ。」

「承知しました。」

クルーは普通に引き受けた。

こちらも軽快なパネルの操作で、該当の宇宙船に通信を繋げた。

タレスの出港口内部の駐艇場にて未だに待機している[天海号・式式]のブリッジが、モニターに映し出された。

宗太郎を呼ぼうとしたジェームズだが、既に当人が彼と向かい合っていた。

『どうした。』

「実はだな…。」

☆☆☆

激しい衝突の繰り返し。

機体同士がぶつかり合う音。

物凄いスピードで飛ばされて、壁に叩きつけられる音。

『音』ばかりが響き渡って、『声』なんて全く流れてこなかった。

無声状態の現場ではあるが、そんな事はいちいち気にしていられなかった。

とにかく、戦闘に集中した。

【パスティーユ・サニー】と【ブラッドガンナー】は向かい合って、ほぼ同時にダッシュを開始した。

こうして見ると、両者が接触する頃合いに利き腕の拳で顔面にでもパンチをするだろうと、想像するかもしれない。

でも、身体を張る【サニー】とは違い、【ブラッドガンナー】は銃を駆使して戦う。

拳と拳が交わるはずがなかった。

【ブラッドガンナー】は接触する寸前で、右手に持った銃を使用した。

放たれた弾は、【サニー】の左肩に当たる、予定だった。

バリアを張り巡らしたおかげで、大きな損傷には至らなかった。

ただし、それは関節部分に入り込んで、腕が千切れなかっただけである。

左肩の部分に爆発はもちろん広がったし、【サニー】のパンチの攻撃を緩めるときかけにもなった。

当然、【ブラッドガンナー】に隙を与える事を許す羽目になる。

人型のロボには、腕が2本ある。

右手が使用中なら、残りの作業を左手に代行するしかない。

足技も使用する場合を除いてだけど。

【サニー】がちょっとよろめいたところで、【ブラッドガンナー】は勢よく左手の拳を突き出した。

息切れでも起こしているかのような荒い呼吸を繰り返していたのに。

まだそんな余力を残していたのか…と私は驚いていた。

だけど、超強力なパンチをくらってしまうと、余計な思考が出来なくなった。

パンチの威力で、驚異のスピードで遠くに飛ばされていたから。

遠くと言っても…私達兄妹と武人兄ちゃんがいる場所は、球状のタイル張りの大広間である。

狭苦しい空間ではないけど、ちゃんと壁は存在している。

姿勢を戻す事ができない【サニー】は、壁と衝突するしかなかった。

3機のジェット機が合体したロボでありながら、重量感のある【サニー】は、壁にぶつかると比較的大きな凹みが出来上がる。

スピード重視の【スカイ】や、広範囲攻撃型の【フラワー】だと、凹み具合はもう少し小さい。

【サニー】よりも全身の面積が減っているから。

それでも凹むのは凹むけど。

あちこちに凹んだ窪みが出来すぎて、球状の大広間が荒れてしまった。

私達兄妹が住んでいる地球の中じゃないから、この空間が歪みきったところでどうでもいい。

武人兄ちゃんにとっては一応『育ちの研究所』だから、気に掛けないといけな
いだろうけど。

ぐったりしてる暇はない。

【ブラッドガンナー】が豪快なパンチをぶつけられる余力があるんだったら、
一気に距離を縮めてくるだろう。

素早さに定評のある【ブラッドガンナー】。

ギチギチにはまった壁の凹みから、エネルギーを少し消費してでも抜け出した。

地図データを追わずとも、【ブラッドガンナー】は接近してきた。

【ブラッドガンナー】は2つのステップで撃ってくる。

始めはけん制目的で、次の手でトドメを刺しに行く。

さっきのは左肩しか当ててきてないから、けん制攻撃だった。

迫り来る次の一手は当然、トドメの攻撃だ。

和希兄ちゃんが声を上げた。

弟と妹の2人に対してである。

私と勇希兄ちゃんは『OK!』と上の兄の意思を尊重した。

快諾した内容とは、形態チェンジだった。

武人兄ちゃんと再会してから、かれこれコレばかりで回避してきている。

強烈なまばゆい光は、直視した者をクラクラさせてしまう。

故に、何か目を守る物で直視を防ぐしかない。

同じ手が何度も通用しているのには疑問は残ったけど…私達も咄嗟のアイデアが思いつかないし。

そもそも戦闘経験の浅い私達には、【ラストコア】での教えを守る事でしか、対策ができない。

エネルギーの残量はかなり気になっているけども。

力を惜しんでは、兄ちゃんに勝てないから…。

激しく強烈な光は一瞬にして消えて、【パスティユ・スカイ】へとチェンジした。

【ブラッドガンナー】は右手の銃で、【パスティユ】の装甲を貫通させようとしていた。

トドメの一手だろうと推測していたし、銃の大きさがけん制時用の分よりも一回り大きくなっていたから。

今の戦闘で何度も経験してきているから、些細な変化にも気がついているんだ。

でも、発砲なんてさせない。

その決意を固めているのは、【スカイ】のメインパイロットである和希兄ちゃんだけど。

【スカイ】はチェンジした後、一気に加速度を急上昇させた。

計器の数値がみるみる増えていく。

近づく【ブラッドガンナー】の動きを封じる為に、黒いロボの周りでギョングョン飛んでいた。

双剣を握りしめているとはいえ、その刃が【ブラッドガンナー】に振り落とされる事はなかった。

とにかく、行動の封鎖のみ。

物凄い俊敏な移動を繰り返して、【スカイ】は『風』になる。

『風』は目に見えない。

冷たさが肌に感じてくるだけ。

【ブラッドガンナー】は黒い口ボだから、温度を感じしないと思われがち。HRは機械ではなく、『生命体』と教わった。

だからちゃんと、瞬発的な『風』を感じられるはずだ。

【スカイ】は超高速の移動を止めない。

ビタッと動きを止めてしまうと、敵に視認を許してしまうから。

【ブラッドガンナー】の周りをビュンビュンちらつかせる反復移動は維持したまま。

私達は移動を継続したままの状態での攻撃を考えていた。

主導は9割方希兄ちゃんではある。

だけど今は、何でも試すしかない。

『風』になりきった【スカイ】が、手を緩めずに剣を投げた。

目標は【ブラッドガンナー】。

双剣の内の片方だけを投げつけた。

投げつけられた剣に、原型が残っているように思えなかった。

多分、私達の錯覚だろう。

どんな物体でも瞬間的な速度の移動をすると、原型が崩れるように見える。

1個のボールが地面と平行を保った状態で瞬間移動すると、ボールは横長く伸びる。

【スカイ】が今投げた剣も、まるで細長いレーザー光線かと思わせた。

しかし、たった1回の投てきでは、【ブラッドガンナー】相手に効果はない。
薄い、というまだ手応えのあるレベルすらも感じられない。
だって、光線と変化した水色の剣が、【ブラッドガンナー】と交える寸前で元
に戻ってしまったのだ。

銃とは、ある意味万能の武器かもしれない。

【ブラッドガンナー】は迫り来る剣の攻撃を、見事銃弾のみで跳ね返した。

【スカイ】の剣と比べると、微々たる威力の銃弾だったのに。

跳ね返された剣は、大きく回転をして遠くへ飛んでいくようだった。

実は【スカイ】は【ブラッドガンナー】の周りを駆け巡っているのだが、決まっ
た定位置はない。

ランダムに秒単位で動き回っているだけ。

跳ね返りの剣に当たるなんて、そうそう無いと想定していた。

ここは反省すべきだった。

ちょうどピンポイントで、【スカイ】に向かって剣が飛んできた！

本当に秒単位で位置をずらしまくっているから、避けるのには困らないだろう
けど…。

サブパイロットとしてモニターを凝視していた私と勇希兄ちゃんは、動揺して
いた。その影響で、つい声を出してしまったのだ。

「きゃあっ！？」

『うおっ！？』

私と下の兄が声を漏らしたタイミングは、同時であった。

兄妹同士の連携を取るために、常に通信回線はオープンにしたままだ。上の兄
の耳に、私達の動揺の声が届いていた。

『どうした？2人とも…！？』

和希兄ちゃんが気にかけてくれた時だった。

異常を悟った上の兄は、【スカイ】の『風』に変貌した瞬間移動を止めてしまった。

それは完全に捕捉できなかった【スカイ】の全身を、お披露目するのと同じ事。

故に、【ブラッドガンナー】に自分達の位置を知られてしまう危険があった。

銃使いのロボはわざわざ動かなくても、目標に攻撃できる。

すなわち、発砲を許してしまった。

銃声は3回、私の耳に届いた。

さらけ出してしまった【スカイ】は当然、被弾。

バリアの抵抗で機体の内部まで入り込まなかったけど、爆発は起きた。

【スカイ】がよろけた。宙に浮く水色っぽく見える白いロボは、バランスを崩し後ろへさがった。

爆発の炎と煙で、前が遮られている状態になった。

焦って両手をバタバタさせかねないと思われがちだけど、意外とそうでもなかった。

モニターが灰色の煙に覆われていても、地図データは生きている。

地図データの赤い点が動き出した。

私達【パステージュ】を示す青い点に近づけるように。

【ブラッドガンナー】の機動性ならば、1分もかからずに迫って来るだろう。

動揺して迷惑かけた分を、取り戻したい。

その決意を固めた私は、兄達に進言した。

「兄ちゃん達！【フラワー】で行かせて！」

『え？何でだよ？』

「剣と拳以外の手を使おうと思うの！それで突破口が見つかるなら！」

早く！と私は急がしていた。

和希兄ちゃんは察して、形態チェンジを承諾した。

『わかった。すぐにやるぞ！』

『ああ！イライラする！』

勇希兄ちゃんは余程ストレスが溜まっていたのか、苛立ちの声をあげた。

即決したせいで、チェンジに移行するための発光が行われた。

【パステージュ・フラワー】にチェンジするのは、久しぶりの感覚がする。

タレス内部に最初に乗り込んだ時、【フラワー】で待ち構えていたのに。

自身の周囲全てを蹴散らす戦法が得意なタイプは、対人戦闘には向かないんだろう。

【サニー】か【スカイ】で挑むのは仕方がない。

この2形態で決めていたのだったら、私は文句を言わない。

だけど、戦況は埒があかないまま。

【ブラッドガンナー】は、武人兄ちゃんは時々ゼゼゼと、息を吐いている。

体力の限界を見破っているのに、水色と黄色の2形態は一向に終わらせる気配がない。

殆どかわされている。

【ブラッドガンナー】も、私達を倒せる機会は沢山あった。

そもそも宇宙全体では、半世紀ぐらい前から出沒したのにもかかわらず、大量繁殖したHR。

生物と機械の交配の元で生まれ落ちた、禁断の生命体。

武人兄ちゃんは同じ仕組みで生まれた者達からも、恐れられている存在。

マルロから聞いた話によると、

『クーランが誇張しているとして信用しない者がいたのも事実だが…。ラルクが強いHRであるのも事実だ。何より奴は、立ち回りと取捨選択が得意だ。不要物を切り捨てる事も厭わん。よく、地球産の基地を存続させたな…。』

という評価であった。

チェンジは一瞬で終わる。

パァン、と風船の膜が割れるように。

【パステージュ】シリーズは10Mを超える大きな人型ロボだ。

それでも、外見の雌雄がきちんと整えられている。

【サニー】が豪快なマッチョメン、【スカイ】はスリムなジェントルマンという、『男性』を思い起こさせる。

反対に【フラワー】は、キュートなプリンセス像を模したロボと化している。

本物の、『女性』型のロボだ。

機体のラインの色の大半がピンクで塗られているのも、『女性』を強調するアクセントになっている。

【フラワー】の右手には、自慢の武器であるくす玉のついたロッドが握られていた。

ぶっちゃけ言うと、右手だけで軽く降って弾を飛ばす方が早いかな…と考えてはいた。

面倒くさくても、火力を重視した。

ロッドは両手で握る。

リュート王子の専用機【ホーンフレア5th】みたいに、突き槍の構えを取った。

右手を前に、左手を後ろに配置した状態に固定して。

これはロッドであって、槍ではない。

上部の先端は槍の刃先ではなく、くす玉のオブジェ。

物理的に押して、相手の機体にはぶつけない。

本来なら、兄達にエネルギーの残量を確認してもらいたかったけど、流石にそこまでの猶予はない。

使い切る覚悟の上で、やるしかないんだ。

【ブラッドガンナー】とは、至近距離まで来たのか？と焦りそうな所まで接近している。

形態チェンジの光を発したおかげで、多少のタイムラグが生じた。

これを利用するしかない。

もう少し貯めてから発射したかったけど、先に銃の発砲を許してしまう。

だから、淡いピンクのビームを出した。黒いロボの姿が全く見えなくなってしまふまで、ビームを出し続けた。

いや、消し炭にしようという気持ちで、ビームの威力を上げている。

ロッドから放たれる淡いピンクのビームは濃さを増し、小径の幅も広がった。

視界が狭い空間だと、ピンクの景色のみで区別がつかない状態になっている。

【ブラッドガンナー】を探そう、という気を起こさせない程。

『未衣子！最後の予備はもう変えている！』

「報告ありがとう、和希兄ちゃん！」

『悠長に言ってんじゃねえよ！あと8割切ってんだからな！』

「あら、エネルギーの残量は読めるんだね？」

『いつまでも俺の頭を舐めんじゃねえよ！』

勇希兄ちゃんが怒鳴ったけど、彼の反論はいつも通りだから気にしていない。

エネルギーの残量の減少は深刻だ。

【パスティーユ】はエネルギーを完全に使い切ると、機能を停止する。戦闘にて武装展開できないだけでなく、様々な場所への移動も不可能になる。

現在、私達は未だに研究所の中だ。

研究所から、タレスから脱出しなさいといけない。

しかし、エネルギー切れを起こしてしまうと…自力で出られなくなってしまう。

マルロのロボ形態【チタン・キュレン】が間に合えば、いいのだけでも…。

過度に期待しすぎてはダメだ。

あそこの広間で、マルロは自戒の念も込めて食い止めている。

一般の生物とそれらが住まう星を憎んで潰しかかった【宇宙犯罪者】が、私達に未来を生きろと道を譲ったんだ。

彼の思いを、無駄にするわけにはいかない。

エネルギーは『もう』残り8割を切っている。

でも、『まだ』7割は残っている。

途中で高火力ビームの噴射を止めよう。

終わらせるタイミングは、私の頭で既に描いている。

今のビームで、広間内の壁に押し込むつもりだ。

モニターの映像では明るいピンク1色の光景が広がるだけ。

【ブラッドガンナー】がどこにいるのか、探しにくいかもしれない。

位置の把握の決め手は、地図データである。

地図データはきちんと広間内と外の境界である壁も表示されている。

敵対する【ブラッドガンナー】を示す赤い点が残っている。

焼き尽くしてしまいかねない高威力のビームに包まれている状態なの。

赤い点の光の強度は健在だ。

点滅せずに、【フラワー】から離れていくだけ。

2人の兄達がメインで任された時でも、武人兄ちゃんの呼吸は荒かった。

自分達が乗る機体にブンブン振り回されながらも、微かに漏れる吐息が耳に届く。

私達が長期化する戦闘で疲労が溜まるのと同じように、兄ちゃんもまた体力をすり減らしている。

そろそろ限界の時が、来ているんだ。

いよいよ【ブラッドガンナー】が広間内の壁に当たる頃合いになった。

とりあえず、一定の衝撃は加えないといけない。

H Rは大小問わず、舐めてかかっていくと、絶対に勝てない。

とてもしぶといんだ。

《心臓部分》を貫くなり壊すなりして、生命機能の完全停止にしないと勝利は確実にならない。

【パスティーユ】は【ブラッドガンナー】に、何度も壁にめり込まれる程ぶつけられてきた。

現在の広間、最初に訪れた時と比べて…ひび割れが酷くなっている。

激化する戦闘でダメージを負うから当然なんだけど。

広間内に支柱は露わになってないから、壁が天井を支えているのかもしれない。壁に亀裂が拡大していけば、いつかは広間内の天井が落ちて、機体ごと潰されるだろう。

その前に…出る事を考えなきゃ。

【ブラッドガンナー】を壁に押し込んでから1分、2分は辛抱した。

押し込んですぐにダッシュで接近すると、黒い口ボが復活する可能性があるから。

えげつない行為だけど。

這い上がれないと確信を持ってから、【フラワー】はビームの噴射を終えた。

数秒も掛からずに、ピタリと止まった。

ビームの攻撃を浴びた【ブラッドガンナー】が、爆発の炎に包まれた。

酸素が薄くなってきている。炎の鎮火スピードが速まり、煙がモクモクと上がっていくのみになった。

【ブラッドガンナー】の姿を視認できるまで待つ時間をもったいない。

《心臓部分》が無事だったら、硝煙の中でも壁から外れようとするから。ダッシュを開始していた。

【フラワー】が地面に足をつけていたら、完全に蹴っている。

そんな接近の仕方に切り替えていた。

目標は一直線。ひたすら【ブラッドガンナー】のみに、集中して。

ビームの攻撃のみならず、全力でダッシュする時もエネルギーを消費した。残量のメーターをいちいち気にしてはいない。

目を合わせた事はある。数値は、5割を切っていた。

これで決着をつけないと、私達は敗北してしまう。

ここで最大の問題点に気づく者がいるだろう。

急接近して、一体何をするのか、と。

距離を縮めて攻撃に移るのならば、剣技などの近接用の武器が必要になる。

もしくは、体技を鍛え抜いているか。

格闘に自信があるのならば、特に武器はいらない。

でも、【フラワー】の武器はロッドだ。

ロッドの先端に、尖った装飾品はない。

地味に触ると痛みを感じて、血が出てしまう飾りなら少しあるけど。

（くす玉を支える置物型の部品とか？）

人間などの有機物よりも硬いロボに、些細な棘は効かない。

ならば、どうするのか。

答えは簡単。ロッドを持ち替える、ただそれだけ。

普段は弾を発射したりビームの粒子を飛ばすのに使うロッド。

先端を逆に変える。

ロッドの底の部分、前に向けるのだ。

ロッドの底は、ちょっとした宝石のような鮮やかな装飾以外、何の意味もなさない物である。

でも、今の私には秘策がある。トドメを刺すための秘策が。

【フラワー】の自前のロッドを、物理攻撃用として扱うのが、私のとっておきの策だった。

いつもの先端で構えているだけなら、エネルギー消費しないで戦うには…くす玉で叩くしかない。

これはこれで痛むだろうけど、圧倒的な威力は期待できない。

注意を逸らすなどの、その場凌ぎぐらいだ。

だったら、ロッドの使い道を模索してみるといい。

エネルギー消費して弾やビームを出す、先端でガシガシ叩く以外で何があるのか。

硬い装甲を貫通する方法はないのか…？

貫通するには、まずは刺さないといけない。

刺すには何が必要なのか？

刃じゃないし、針じゃないし…。

ぐるぐると思考を巡らせていると、私はある事に気づいたのだ。

ロッドはくす玉がついた先端以外、細いなあって。

針は細いから、布や肉を突き刺せる。

ロッドの底もまた、上部の先端よりも細い。

これは、意外に有効な活用ができるかもしれない。

私はサポート中、ずっと考えていた。

【ブラッドガンナー】が再び動き出さないうちに、猛スピードで衝突した現場へ急行する。

一定の速度以上を出す時も、エネルギーを消費する原因になる。

メインで集中する時、残量のチェックを疎かになりがちだから、推測で【フラワー】を動かしてしまう場合もある。

私の感覚では、5割くらい？

けれど、5割『しか』ないなら何だ。

『まだ』5割残っているじゃない。

兄達を道連れにしてしまうけど、《期間満了》の延長に同意した時点で分かっている事。

無我夢中で、我が道を進むしかない。

ロッドの底を前に向けて、構える。

機体を貫く為に、近づくまで後ろに引く。

そして、【ブラッドガンナー】からの反撃がないうちに、【フラワー】はその黒いロボの元まで接近した。

あとは、ロッドの底で機体を貫くのみ。

迷いなんて捨ててしまえ。

《武人兄ちゃん》の素顔を二度と拝めなくても、後悔はしない。

だって、私の、私達の手で彼を終わらせるのだから。

広間内ではずっと呼吸の荒かった武人兄ちゃん。

まだ、起き上がる元気は残っていた。

元気というより、根性に言い換える方がしっくりくるかも。

壁から剥がれようとして両腕を動かし、やっとの思いで離れられたから。

何らかのアクションをとりに来るだろう。

でも、怯んではダメだ。ここは、勢いに任せるんだ。

銃が【フラワー】に向けられてきても、回避も防御体勢も取らないで。

そのまま、穿つ姿勢を保ち続けた。

「ええーい！！！」

私は気合いの声を出していた。

【フラワー】が応えるように、ロッドの底を前に突き出す。

頭部は目標を定めるのに、屈めていた。

壁の凹みから外れた黒い口元に握られた銃の発砲があった。

赤く光る弾が、【フラワー】に命中しようとして、飛んでくる。

特に対策は取らなかったけど、弾はかわせた。

姿勢を低くする。

狙いは、1つ。全てのHRがここを抑えられたら、何の手出しが出来なくなる
身体の部位。

《心臓》が内蔵されている、胸元の中心。

もう少し深く踏み込むのならば、やや左に寄ればいいのだけど…。

今は細かい事を気にする余裕はない。

ただ、ロッドの底は胸元の中心のみを目指す。

これで、HRの機能の《完全停止》を願う。

これで終わらないと、私達は帰れない。

【ブラッドガンナー】の胴体の中に沈み込む。

体当たりを決めようとして。

ギリギリまで接近して、思いっきりブツ刺す。

スーっと滑らかに通る感触がした。

前に前にと進んでいく感覚も。

それにはちゃんと終着点があり、前進は止まった。

あっという間に、壁に衝突していた。

体当たりを決め込まれた【ブラッドガンナー】の背中が、再度壁と密着した。

【ブラッドガンナー】の傷は衝突による背中だけではない。

私が、【フラワー】が定めていた、胸元の中心にも、穴が開いていた。

いや、開けたのだ。

【フラワー】のロッドの底は、機体を貫く針となった。

私達はまだ離れない。【フラワー】はロッドを両手で握ったまま。

見届けなければならないんだ、最期を。

【ブラッドガンナー】のカメラアイとボディのラインは、常に赤く光る。それらが全て消えるまでは、油断はできない。

一瞬では消えなかった。まだ『赤』は灯された状態だ。

点灯は、持続しなかった。

胸元の上、頭部に付いているカメラアイの『赤』が、チカチカと点滅を繰り返した。

始めはゆっくりだったのに、鼓動を波打つように段々速くなっていった。

『赤』は暗くなった。

『黒』に限りなく近い『赤』へと、変貌した。

アイ以外のボディラインも同様だった。

鮮明な『赤』で活力を見出していた【ブラッドガンナー】。

胸元を貫かれた今は、真っ黒で不気味な人型ロボとして、私達の目に焼き付いた。

【パステージュ】を倒そうと躍起になって暴れていたのに、静かになった。

武人兄ちゃんは、起きなかった。

機体の外観では内部構造はわからない。

外観上でどこに突き刺したのかは、わかる。

きちんと胸元に命中している。

この様子なら、おそらく《心臓部分》にもダメージがいつている。

光が消えて、全然動く気配のない【ブラッドガンナー】。

【フラワー】はロッドを抜いた。

抜くだけで、まだこの場を離れなかった。

『もう、いいのかよ？もう少しグイグイ行った方が…。』

いいんじゃないの？と勇希兄ちゃんは言いたげだった。

だけど、私の心情を察していたのか、はっきりと言葉にしなかった。

「そうね。まだ、あと一押し必要かもしれないかもね。やるなら他も切っておこうと思うんだけど。」

『いや、もういいぞ未衣子。[ラストコア]の訓練でも『光』が消えたら、それは機能停止であると散々教わったんだ。君が一番辛いのに、これ以上の手を加える必要はない。不安なら、俺達が代わる。』

和希兄ちゃんに励まされた。庇ってくれる意思も感じられた。

でも、私は断った。

「大丈夫だよ。これ以上、傷つけなくてもいいわ。このまま、眠らせてあげて。」

『未衣子…。』

勇希兄ちゃんが私の名前を小さな声で言った。

和希兄ちゃんは黙っていた。

ロッドを抜き取って、壁にのめり込んだ【ブラッドガンナー】から距離を取った。ほんの数分だけ、動向に気をつけた。

停止したフリをして、私達を油断させようと企んでいるかもしれないから。

私、私達にとって、武人兄ちゃんは悪い人じゃないと知っていても。

この研究所内の広間は、戦場だから…。

動く気配は、なかった。全身真っ黒な人型ロボは、壁にへばり付いたまま、深い眠りについていた。

もう、いいんじゃないか？

誰かが私にこの場を去れと、後押ししてくれた。

声は聞こえない。私の錯覚だ。

でも、その提案に私は納得していた。

この広間には、何の用事もない。早く、ここから離れよう。

兄達と最低限のやり取りをして、研究所自体の脱出を考えた時だった。

『なあ、マルロはこっちに来てないよなあ？』

勇希兄ちゃんの発言だった。

「マルロ？」

『一応地図データ確認したけどよ、武人兄ちゃんの赤い点が消えた後、青い点が1つしか残ってないんだよ。』

「わかりきった事言わないでよ勇希兄ちゃん。青い点は私達のロボを示しているのよ？」

『そんな事はわかってんだよ！』

『怒鳴るな勇希。お前の言いたい事はよくわかった。まだマルロがここまで辿りついてないんだな？』

無我夢中で戦闘に挑んでいたせいか、マルロの行方をさっぱり忘れていた。辿りついていないのが事実なら、まだ『あそこ』の広間に残っている？

だったら、急いでマルロを連れ出さなきゃ…。

そう考えていた時だった。

ドオン！

ヘルメットのスピーカーの振動が耳に伝わって、痛みを感じた。

察知していたのなら、絶対に穴を塞ぎたくなるくらい、爆発音が鳴り響いた。

「今のは、どこから？」

私は兄達に方向を聞いた。

武人兄ちゃんの手によって、兵力の削減がなされた〔レッド研究所〕。私達が現在留まっている広間と、マル口が凌いでいる広間以外で、激しい戦闘を繰り広げている場所に心当たりはない。

和希兄ちゃんが左側から聞こえたと報告してくれた。

右側は壁で仕切られていて、実質『行き止まり』だ。

サレンさんに知らせた、広間奥の斜め下の黒っぽい穴のみが、『行き止まり』を失くそうとしていた。

彼女にはそう案内したけど、ちゃんと帰還できたのかはわからない。無事を祈るしか、ないんだ。

ここまで、狭い通路も利用しながらやってきた。

爆発音がした左側には、通路の出入り口が健在だ。

となると、爆発音の源は…。

「マル口、まだ戦闘中なの？」

『おそらく…あの通路の先は進行不可となっていますね。』

女性の声が聞こえた。

よく驚く勇希兄ちゃんは、うおっと声をあげた。

逆に和希兄ちゃんは、おや？と首を傾げるだけだった。

『まだ、生きていたんですか？』

『生きていても何も、私達に実体はございませんので…。』

今のやり取りで、もう1人忘れていた人物を思い出した。

案内役のA I だ。

『とりあえず、ご勝利おめでとうございます。そして、お疲れ様でございます。

あなた方は見事、《ラルク》を倒せましたね。』

「あ、ありがとうございます。」

私は気まずさを覚えながらも、A Iにお礼を述べた。

ほんわかな雰囲気は、一切無かった。

爆発音は音量を変えながら、2、3回はこちらのスピーカーに響かせていた。

『さて、あなた方の取るべき道を、ご案内いたします。』

『取るべき、道ですか？』

『決まってるだろ！アイツを助けに…』

『マルロ・ヒーストンの救出は不可能です。』

え？と私達は動揺した。

大勢の、かつての仲間だった人達の相手を抑えようとするマルロが、最も過酷な事態に陥っているなんて、わかりきっているのに。

多分、『HRだから』って、否定していたんだろう。

墜落を、受け入れられなかったんだろう。

タレスの高度な発達を経験したA Iは、ある程度の心情の察知はできていた。

なのに、今は淡々と私達に語りかけてくる。

『あなた方が助けに行ったとしても、彼はとうに焼き尽くされております。それに…あなた方の乗る機体には、もう動力が尽きている頃合いではありませんか？』

『エネルギーのシステムまで…！？』

『ふざけんなよ！やる前から諦めてんじゃねえよ！』

『いいえ、これは紛れもなく事実です。現状、研究所の施設内の崩壊が始まっております。』

上の兄は動力源を知られた事に驚いた。

下の兄はそれに気を取られず、A I に対して猛反発した。

しかし、それはA Iによって遮られてしまった。

『あなた方の取るべき道は1つ。《脱出》しかありません。サレン・D・フェルテを誘導した穴…あそこを潜って直進すれば、《搬入口》を通して外宇宙に出られます。』

「正解、だったんですね。」

『奇跡的に破られたのが、功を成しましたね。』

それに、と案内役のA Iは続けて言った。

『あなた方は選ばれし《特別》な存在です。私達にとって『生きる』というのは、《特別》な権利なのです。権利を与えられたあなた方がするべき事は、己の生涯を最期まで全うする努力でございます。ですから、ここから去るべきです。』

《特別》という言葉。

サレンさんにも同じ言葉が使われていた。

彼女の場合はマル口の伝言のおかげで、戸惑いながらも使っていた。

案内役のA Iは、堂々と使用していた。

私達をきっぱりと《特別》だと認めた。

だったら、もう迷わない。『残る』選択肢は、先に消去した。

探し求めていた人物相手に、その選択肢を行使したから。

私達は、生きている。

武人兄ちゃんに告げられた2つの選択肢。

選ばれなかった選択肢を取る時がやってきた。

「帰ろう、兄ちゃん達。私達の闘いは終わったんだ。あとは、平穏に暮らそう？」

私は自然と、口を開いていた。

不服ながらもずっとついてきた兄達の、反論はなかった。

『そうだな。心残りはあるけど、みんな同じように抱えている。彼は共倒れよりも、俺達の生を願っているだろうし。』

『アイツも元々〔犯罪者〕だったもんなあ…。最後でも味方になってくれたのは心強かったぜ。命を、粗末にできねえな。』

賛同を得られたのを、私は確認した。

ついでに、【ブラッドガンナー】の生体反応もチェックした。

地図データの赤い点は、消滅しきったままだ。

武人兄ちゃんはまだ、目を覚さない。

私は小さく『さようなら』と呟いた。

【パステュー・フラワー】は背を向けて、穴まで直進した。

☆☆☆

生まれてきてからずっと、マル口は『炎』に対する恐怖を抱いていた。

燃え盛る『炎』も、それに伴って湧き出てくる熱気ですらも、彼の決定的な弱点と化していた。

それは昔、自分のかつての同志達と対峙する前までの話だ。

今でも、『炎』に対してのトラウマは拭えていない。

なぜか今の激戦の最中では、『炎』への畏怖を持たなかった。

むしろ、現在のマル口には『爽快感』の方が勝っていた。

激しいスポーツをして汗をものすごくかいているのに、スカっとした気分のおかげで『気持ちいい』と感じる。

要は、マル口の気の持ち様であった。

敵は下から続々這い上がる。

『隊長』と呼んで慕ってくれた元同志達。

最初の陣営が姿を現した時から薄々気づいてはいたが、彼らは一言も喋らなくなっていた。

ただただ、侵入者に向けて、左手のロッドを振るうばかり。

そこに奇策などではなく、単調にロッドの先端から弾を飛ばしたり、ビームでも放つだけ。

彼らの戦いぶりを幾度も見てきたマル口は、撃墜に関しては苦戦しなかった。

しかし、どことなく数が多かった。

第1陣を全滅させても、底面から第2、第3の陣営が這い上がってくる。

広間の底は地下に貯蔵庫でも設けられているのかと疑いたくなるくらいに、数が非常に多すぎた。

計算高いHRとして、宇宙では名の知れたマル口。

自分の中での能力の配分を考えていても、限界はやってくる。

底面に足裏をつけられないので、空中に足場の円陣を敷いた。

足裏と一緒に、自身が大事に扱うロッドの底も、円陣につけた。

『ふう、やはりキリがないな…。』

マル口は小声で言った。

吐息混じりの声だった。

疲労は大分溜まってきている。

いつ膝をついて、立てなくなってもおかしくない状況だった。

『もっと多くの兵を連れてこられたら、良かったな…。向こうが指定しているのだから、文句を言っても、意味がないんだが…。』

ハア、ハア、とマル口は肩で息をしていた。

今までずっと、敵が浮上してはロッドの攻撃で蹴散らしたり、ビームで焼き尽くし続けたマル口。

広間内の内装も設備も、破壊活動を繰り返されたら、長くは保たない。

広間中の壁に数多の破損が顕著になった。

破片には火が揺らめいている。

敵の機体を爆破させる度に、炎が八方に飛散する。

やがて広間内は、燃え盛る炎の空間へと変化していく。

火星圏タレスの酸素濃度は、地球のそれよりも低かった。

燃焼の比率が高まると、少ない酸素が減っていく。

【チタン・キュレン】の外観は、所々にあるかすり傷程度で済んだ。

1番のネックは、酸素の濃度不足だった。

十数の陣営を沈めた【チタン・キュレン】は、ロッドの底をつける事でなんとか両足だけで立てていた。

視界が揺らぐ。めまいや吐き気もする。

身体のバランスも左右にふらついたりするし、目蓋も重くなった。

だが、もうどうでもよくなった。

生き残りたいという願望は、もう捨てていた。

自分が興味を持った者を、救いたかった。

広間の奥へ行くと、自ら指示を出した。

その者が会いたがっている《オス》が、奥で控えていたから。

己の役目は果たした。

あとは、かつての同志達と心中するのみ…。

少女の無事を、祈るばかりだった。

『フッフ、つくづく情けない《オス》だな、俺は。会って間もない《メス》に同情するなんて。』

微笑を交えた発言をしたマルロ。

【チタン・キュレン】は左手のロッドを、もう一度持ち上げた。

先端の立方体を、白く光らせる。

目視した相手を失明させてしまうくらいに、眩しく輝かせた。

『じゃあ、な。未衣子。ワガママ言わねえ《メス》になれよ。』

先端の立方体は白い球体の光へと変わった。

次の陣営への一手だが、振り落とす前にマルロは呟いた。

『…君が待っているなら、今、会いに行くよ。』

その時は、俺を呪ってくれ…〇〇〇。』

ロッドは真っ直ぐに振り下ろされた。

エピローグ 再認識の日

案内役のA Iの指示通りに従って、【パスティユ・フラワー】は広間内の斜め下の穴に潜り、《搬入口》を目指した。

しかし、5割どころか下手をすれば3割も切っていたであろうエネルギーの残量が、進行を妨げた。

スピードを、思っきり上げられないんだ。

爆発音はヘルメットのスピーカーに、ドンドン流れてくる。

急がなきゃいけないのに、やや低速で移動する羽目になった。

内心、突破できるか不安だった。

レバーを握る両手が、震えている。

ほぼ暗闇に等しい道のりを進んでいると、奥に希望の光が見えた。

《搬入口》側からの助けだった。

【エクステラ隊】の残存兵と、志願兵の皆さんが乗っている【軍用機】が、迎えに来てくれた。

実は残存兵達は、この裏道ルートが存在を知っていたようである。

ただ単に利用した事がなく、誘導の件もあったから候補に入れなかっただけだろう。

とにかく、助っ人と一緒に私達は帰還できた。

タレスの出港口側の駐艇場で待機させられたままだった【天海号・式式】。

私達がタレス前の外宇宙まで戻ってきた時には、白くて大きい宇宙船の存在があった。

【天海号・式式】は別の案内役のA Iによって、先に出港できたそう。

出港前に、激しい戦闘に突入する可能性があったそうで…。

もう一つの火星圏の星であるセレス？という星の強い人達が、攻めてきたらしくて、本当に驚いた。

サレンさんが頼んだ土星圏の宇宙船の軍団がやってきた事で、大惨事には至らなかった。

だけど、かけがえない者も失ってしまったみたいで…その件に関しては私達も悲しい気持ちになった。

あなた達のせいではないわ、と〔天海号・式式〕で例のお姉さんが慰めてくれた。

周りの皆さんが、『よく頑張ったね』と褒めてくれた。

賞賛の言葉を聞いている時は、とても気持ちがいい。

気持ち良さも相まったのか、潜入と戦闘での疲れがドッと出たのか…。

急に、眠たさを感じた。

足取りがフラフラしていた事に気づいた乗組員さんが側で支えてくれて、私は医務室へと運ばれた。

成功を祝うパーティは地球降下後にしようと決まって、兄達も当てがわれた個室にて休息を取った。

仮眠だけで済んだ兄達が、西条司令達からマル口の行方について、質問されていた。

ひどく落ち込んだ様子で、和希兄ちゃんが正直に説明した。

ただ、最奥の広間に行ってから、私達はマル口と会っていない。

復活した案内役のA1から、『生存は確認できない』と告げられてしまった。

それは本当の事だったし、2人とも素直に話していた。

西条司令も深刻な表情をしていたようだ。

〔ラストコア〕の最高責任者は、マル口の取った行動について、自分なりに納得していた。

救出できなかった私達に対して、執拗に責めたりはしなかった。

マルロやタレスのその後の件は、後に無人衛星でも派遣するという予定で調査する事が決まり…。

〔ラストコア〕の部隊の地球降下が始まった。

私が目が覚めたのは…地球降下後だった。

2、3週間程起きなかったらしい。

健康面とか気にしてしまったけど、栄養剤の点滴とかで補給してくれていたみたい。

〔ラストコア〕はすごい。

最先端の技術力を持っているなあ、と思っていた。

太平洋上に着水し、大陸まで運ばれた。

大陸に到達してから車に乗り換えて、最後に潜水艦を利用して〔ラストコア〕の臨時支部に戻った。

私は運ばれる時、誰かに背負われていた。

和希兄ちゃんだったり、志願兵の中の男性だったり、複数の人々にお世話になった。

医務室のベッドに横たわってから半日後に、私の目が覚めた。

目覚めの知らせを聞いた兄達が、医務室まで駆けつけてきた。

大丈夫か？とか具合はどうだ？とか、散々心配された。

全然平気だよと返したら、2人ともほっと胸を撫で下ろした。

アレックスさんが、

『〇〇を最終的に倒す辛い役目だったが、よく耐えたな。』

と言っていた。

ここで突然、私は不思議に思った。

〇〇とは、誰の事なのか、と。

疑問を解決したかったので、私はアレックスさんに尋ねた。

「その人、誰ですか？」

医務室にいた私以外の全員の顔つきが、一気に凶変した。

特に顕著だったのが、今まで信じきっていた2人の兄達だった。

和希兄ちゃんは、

『本気で言っているのか？未衣子。』

と何度も聞いていた。

その度に私はそうだよ、と首を縦に振った。

勇希兄ちゃんはキレ出して、

『〇〇兄ちゃんを忘れるなんておかしいだろ！？』

と私に向かって怒鳴っていた。

乱暴に言われても、わからないのはわからないし…。

勇希兄ちゃんが怒り狂い出す前に、アレックスさんは彼を抑えた。

同時に私に対する問診を始めた。

医務室の先生も側にいたので、この人は記録係に徹した。

聞かれた内容は、[ラストコア]に来てから今までの経歴と実績。

他にも教養と知識を答えろと言ってきた。

当然、私は素直に答えた。勉強しているから、正答率は高かった。

だけど、間違いもあった。

全部、〇〇兄ちゃんとか言う知らない人が関係する内容だった。

『もしかすると…こちらにも支障をきたしているかもな。未衣子。』

私はアレックスさんに呼ばれた。

私が彼の顔を見ると、彼は続きを話した。

『何かメモを…そうか、ノートがいいな。』

ノート？日記でもつけるのかなあ？

私、なんか異常をきたしているから？

勝手に口を挟むと話が進まないで、今はアレックスさんに譲った。

『ちょっと難しい作業になるが、こちらのノートに、就寝時に見た《夢》を書いてほしい。』

『《夢》、ですか？もし見れなかった時は…。』

『見れなかった、と書いてくれればいい。他の健康状態には異常がないから、1ヶ月くらい、様子を見よう。』

『あの…俺達は…。』

『《期間満了》でさよならさせたいが、この期間だけ彼女の側にいてやってくれ。思い出すきっかけになるだろう。』

アレックスさんは兄達に私の付き添いを頼んだ。

代わりに学校の授業の遅れの補習などの提供をするとの条件を付け加えて。

2人はわかりました、と了承の意を返した。

アレックスさんによる、私の《夢》に関する検査が行われた。

1ヶ月なら長そうで短いから、気楽に過ごせるかな。

★★★

1ヶ月の検査を受けた結果、特にめぼしい発見はなかった。

ただ単に、私は夜眠っている時に見た《夢》をノートに言葉で綴っただけ。

楽しい事、悲しい事、様々な出来事をノートに書いていった。

本当に、ありふれた《夢》。

私視点ではめぼしい発見はないと思っている。

アレックスさんや2人の兄達には、落胆する結果になってしまった。

3人とも、私のノートに《○○兄ちゃん》や彼を連想させる言葉が出なかったのにガッカリしていた。

『○○だけの記憶を、ごっそりと抜け落ちるなんてな…。』

アレックスさんの感想だった。

そして11月、私達兄弟は帰った。

これ以上の滞在は不可だと判断されたので。

潜水艦に乗る前に、お世話になった人達へ頭を下げた。

その中にはサレンさんもいた。

サレンさんが側で支えていたリュート王子が、昏睡状態から覚めた。

今は静養中の身であり、船着場にはいなかったが。

近日中には地球を出るらしい。

リュート王子の昔の同郷の人達を探す旅に出たいらしくて。

会えるといいね、と願っていた。

【ラストコア】本部を経由して、私達兄妹が暮らす愛嬌市へ戻ってきた。兄達は私を吉川公園へ連れて行った。

彼らは私に『忘れてしまった男の人』を思い出させるのを、諦めなかった。

修復作業の為に工事があり、歩ける場所は限られていた。

でも、ちょっぴり嬉しい思い出もできた。

季節外れの『桜』が咲いていた事。

スケッチで植物を覚えた和希兄ちゃんが、『十月桜』だろうかと推測していた。

桜の木は1本だけだったけど、嬉しくて写真に収めてしまった。

吉川公園での散歩以来、私の抜け落ちた記憶を取り戻す作戦を計画する日はなかった。

記憶の復活は難しいと、兄達も悟ったのだろう。

日常生活は普通に送れるので、自然に任せようと3人で話し合った。

各々、別行動を取った。

勇希兄ちゃんは空手教室の友達との再会を喜んだ。

特に親しかった人に、かなり抱きついて泣かれていたらしい。

とても素敵な友達だね。

和希兄ちゃんはタブレット端末で描いた絵を、異国にいる女友達に褒めてもらって喜んでた。

絵のストックはあったみたいだけど、あと1歩の勇気が足りなかったみたい。

勇気を出せて、よかったね。

私は、[ラストコア]に行く前の生活に戻った。

勉強に家事手伝いに、趣味の読書をするだけ。

[ラストコア]にいたからって、大きな変化はなかった。

強いて言えば、今まで家事に携われなかった分、頑張って取り組むようになったぐらいかな。

お婆ちゃんに今日はもういいわ、と告げられた。

毎日の家事手伝いの終わりの合図だ。

私は温かいカフェラテを注ぎ、それを持って部屋に戻った。

読みかけの本の続きを、早く読みたいから。

変化といえば、もう1つあったかな。

私は勇希兄ちゃんと一緒に、雑貨店で写真入れのフレームを購入した。

A5サイズくらいかな？

大きな写真を飾るのではない。飾るのは、1枚の横長のチケット。

[ラストコア]のお姉さんがくれた、新しい[天海山ユートピア]のチケットだ。

私はお姉さんから、2枚貰った。

最初の《期間満了》の1週間前、私はマルロと共にそこを訪れた。

アトラクションは1つも回らなかった。

襲撃で【バステュー】に乗るまでは、涼しい所のベンチで2人座っていた。

私の辛い過去を、横で聞いてくれたマルロ。

彼は自分の方へ体を引き寄せていた。

あれは、彼なりの慰めだったんだろう。

『気持ち悪い』筈の男性の手が、『気持ち良かった』んだから。

あの温もり、今も忘れてない。

検査期間中、アレックスさんに解決して貰いたい質問があった。

人によっては、些細な疑問。

私にとっては、重要な問題だった。

『マルロの首に課せられた装置、音声認識で爆発するんですよね？どんな風に言って、爆破させるつもりだったんですか？』

『合言葉を言う、それだけだが？』

『どんな合言葉だったんですか？』

『"I've always loved you."』

『…私はいつもあなたを愛していました？』

『ピンと来るように言い換えれば、「ずっとあなたを愛していた」だな。』

『すごく、ロマンチストですね。』

『大したモンじゃないよ。昔色々あってな…。』

アレックスさんとのそうした話は、1日だけで終わった。

《愛》まで芽生えていたのかは、私にはわからない。

マルロも《愛》という感情までには至ってないかもしれない。

それでも、私の辛い過去に同情し、私が《特別》な経験をしていた事を認めてくれた彼には、感謝しかない。

さようなら、マルロ。

私が所持していた１枚のチケット。

大事に飾っておくよ。

もう１枚、マルロの分のチケット。

あなたが大切に、懐の中にでも仕舞っている事を、期待しているね。

私は部屋のデスクの前について、カフェラテを飲みながら本を読んだ。

白井未衣子とロボットの日常《反転》

おしまい。

☆あとがき☆

ここまで来るのに、2年超はかかりましたね…。

学生の時から密かに妄想していた産物を、ついに言語化しました。

言語ってレベルの高さじゃありませんが…。

いざ書いてみると、うーん。

やっぱり、勉強不足は否めない感がひしひしと伝わってきますね。

内容も、デザインも、全てが…。

よくこれで出そうと決めたな！とどこかからつつこまれそうですね。

今はオンデマンド頒布扱い（値段はごめんなさい）で出すので、反省点は修正していくしかないですね。

実家の本が、増えていく…。

以上、カレーポークでした。

ここまでお読みいただき、ありがとうございます。

また別の作品で、お会いしましょう。

☆『ミコロボ』シリーズ一覧☆

○《共闘》ルート ※表記がない分です。

[1・正夢の日]、[2・復讐の日]、[3・糾弾の日]、
[4・暴挙の日]、[5・酔狂の日]

[6・暴露の日]、[7・告白の日]、[8・業火の日]、
[9・協議の日]、[10・誓約の日]

[11・包囲の日]、[12・潜入の日]、[13・奪還の日]、
[14・忘却の日]、[エピローグ・再出発の日]

公園で出会った《武人兄ちゃん》と一緒に、[宇宙犯罪者]のHRや《武人兄ちゃん》の『育ての親』であるクーランに挑むルートです。

《武人兄ちゃん》の過去や、未衣子の兄である和希・勇希の話も含んでいます。

☆『ミコロボ』シリーズ一覧☆

○《反転》ルート

*前巻

[1・捕囚の日]、[2・更改の日]、[3・降下の日]、
[4・翻弄の日]、[5・遭遇の日]、[6・招待の日]
[7・供述の日]、[8・力説の日]、[9・立証の日]、
[10・切替の日]

*後巻

[11・入城の日]、[12・破滅の日]
[13・集結の日]、[14・解放の日]、[15・譲渡の日]、
[16・対峙の日]、[17・絶縁の日]、[エピローグ・再認識の日]

《武人兄ちゃん》と袂を分つルートになります。

《武人兄ちゃん》の代わりに、《マルロ》が味方になります（言い切った）。
未衣子のトラウマ話も出てきます。『7』だけは人を選びそうな内容なので注意書きがあります。

※先に《共闘》ルートの『1』『2』を読む事をおすすめします。

☆『ミコロバ』シリーズ一覧☆

○短編

『1・調査の日』、『2・奮起の日』、『3・観察の日』、
『4・報告の日』、『5・改名の日』、『6・方言の日』、
『7・説明の日』、『8・救助の日』、『9・同居の日』、
『10・触発の日』

『11・試練の日』、『12・慰留の日』、『13・挑戦の日』、
『14・動悸の日』、『15・天翔の日』、『16・逃走の日』、
『17・伝道の日』、『18・自責の日』、『19・欲望の日』、
『20・成長の日』

8割方、1本で完結するタイプの短編です。

『8』～『9』（白井3兄妹の両親編）、『11』～『15』（華南編）のみ続き物となっております。

大体、本編の補完的な内容になっています。

おくづけ

タイトル 白井未衣子とロボットの日常《反転》後巻

作者 カレーポーク

メアド ton1200tekisuki★[gmail.com](mailto:ton1200tekisuki@gmail.com)

(★→@に変えてください。)

個人サイト『お肉のうまい定食屋』

(URL : <https://plus.fm-p.jp/u/meat5rice>)

note ID→curry_pork

pixiv users→87815976

(pixivのURLの後ろに入れるか、『カレーポーク』
でユーザー検索してください。)

発行日 2024年11月18日

制作先 製本直送.com様